

K2A29

Z32-B88

金の星

号月一

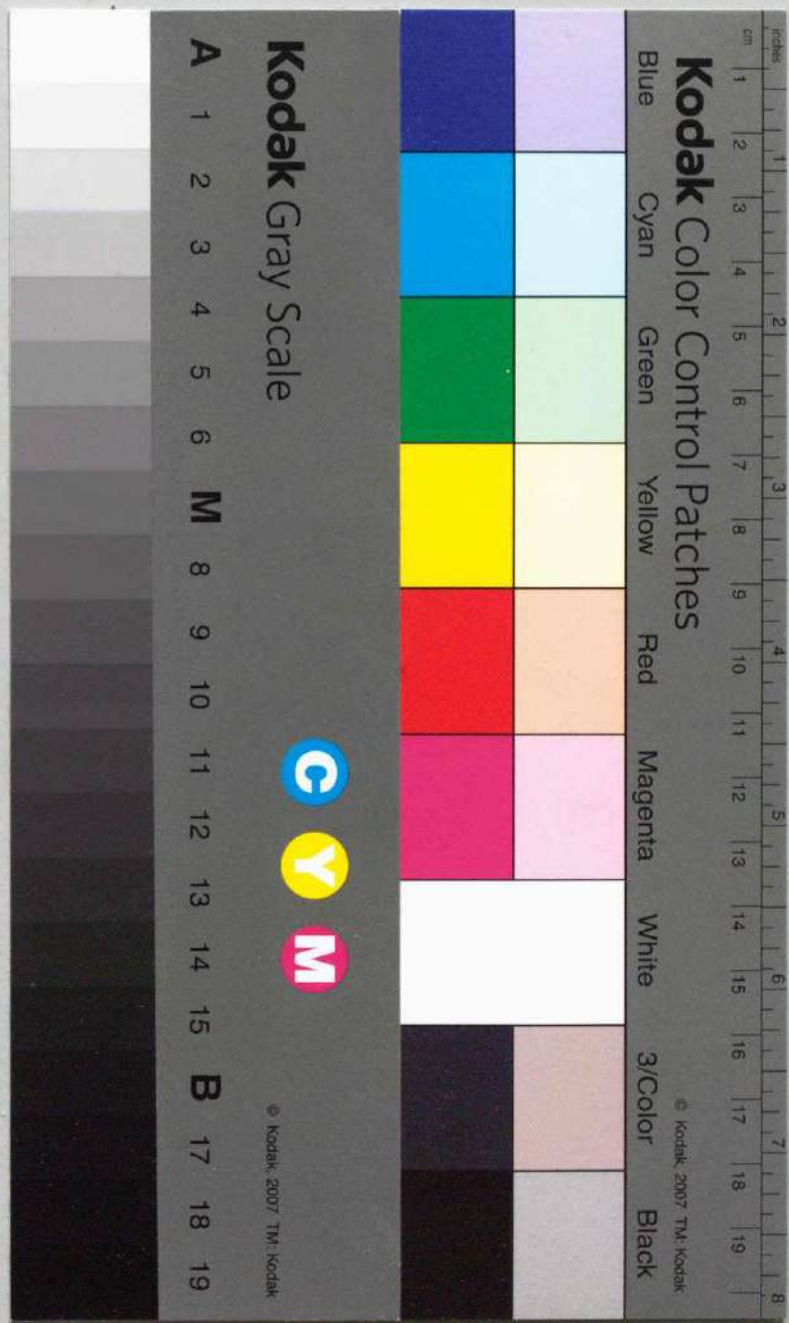


六双トイマビラア

號一第

卷七第

行發日一月一年四十五大 本納刷印日九月二十年三十五大 (行發日一回一月毎) 可認物假価三第日三十月六年一十五大



楽しいクリスマス
うれしいお正月の
おくりものはカルビス
あたたかいカルビス
みんなで飲んで
なかよく遊びませう

溫^{にん}方^か清^{せい}涼^{りやう} 滋^じ強^{きやう}飲^{いん}料^{りやう}

カニ

大場 (てのぶ)に類せし入分合六升一
加十八匁一匁定

越前 (てのぶ)に類せし入分合五升二
加十八匁一匁定

巖谷 小波 関野榮、太田三郎、橋本邦助
 鹿鳥 鳴 秋著 細木原静枝、杉浦非水畫
 オハナシ
 文部省認定圖書
 四六俵利洋装全五册 定價各一圓 送料別

文部省認定圖書
四六傳判洋裝全五冊 定價各一圓 送料各八錢

都下有数の小學校では特に本書を生徒の補助教科書として採用せられました。

この本はお断りの間屋です、みなさんがい
くら仕入れても仕入れても盡きない程
山積であります、クリスマスやお正月の
よきお贈物にもなります。

巖谷小波著（岡野榮、小林鐺吉、杉浦非水畫）

日本一の
の
畫
噺

四六半截全卅五册合廿五錢送料各四錢

日本一の先生が
日本一のお断を
日本一の美しい
日本一の面白い
ご本にして下さ
いました、ひら
がな綴りとカギカ
ナ綴りの二通り
あります。

力多力才文、天神標、清正、楠公爲朝、牛若丸

巖谷 小波著（文部省認定通俗圖書）

オトギウタ

第一卷より第三卷迄 四六倍判全三冊
定價 各八十錢 送料 各六錢

一二三お伽の歌
を唱ひましよ、
あきたら皆で晝
を見ましよ、繪
の面白さ唱ひま
しよ。

(一) お馬が三匹ヒン／＼白馬黒馬栗毛馬
(二) うつかりすると直ぐ落ちる
(三) ちるよ様の花片が馬の背中へヒタ／＼
(四) 平首平手でなでやれ
(五) 馬はだまつてあばれない (第二巻馬づくし一節)

東 京 日 本 橋 通

大 神 戶 京 都 古 名

丸 善 株 式 會 社

橫 濱 酒 仙 札

濟 岡 臺 梶

東 京 神 田 三 田 丸 比 呂

世界少年文學叢書 第二編

附録 白あざらし

四七判篇入總クローヌ
内容三百數十頁挿繪澤山
定價金壹圓九拾錢
送料金十五錢

この物語は印度の森林の中で、狼おおかみに育てられた少年の物語である。印度の大自然の中で、いろいろな猛獸と共に生活する不思議な運命を持ったこの少年の物語は、如何に大きな驚異を以て讀者に迫るであらう。世界的文豪キツブリングの名作を、小島先生がの麗筆によつて譯述されたもので、日本には珍らしい一大名篇である。尚附録の『白あざらし』も同じ作者によつて書かれたもので頗る面白く、面白い物語りである。装幀と口繪共に寺内萬治郎畫伯の苦心になる。

東京市外 田端三五一
振替電話 小石川三五八七番
東京市外 田端三五一

日本神話

古事記物語

「古事記物語」ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

グリム童話

「グリーム」童話は改めて述べたまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリーム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかも少少女の珍寶として聲に傳へられてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリームの数多くの作の内、最も有名な面白く、ものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、
 れまで、随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の
 如く、一つの物語に一枚づきの立派な畫を入れて、
 お話と畫と兩方でお話に讀ませる本は他にない。金
 の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに
 見ていただきたい。

ギリシヤ神話

イリヤード物語

(近刊)

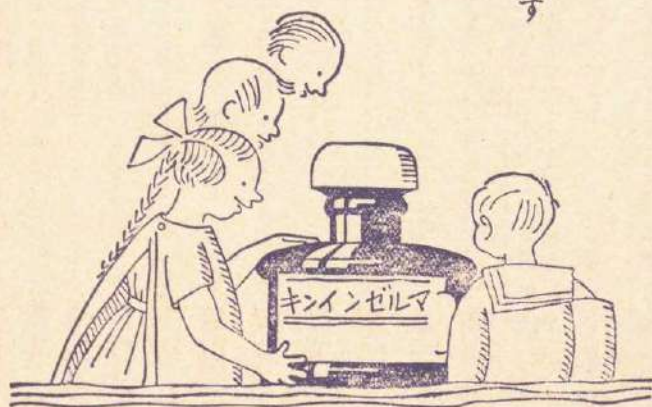
『オデッセー物語』と共に世界的に有名な物語りであつて、勇壯なトロイの戦争を書いた他に無い面白い長篇物語りの御愛讀下さい。

世界少年少女著名大系 金の星 編 社

丸善インキ

用筆年萬
キンイナテア

丸善インキは
何處の何誰も御承知です
質がよく 香がよく
色美しく 書きよく
決してペンを痛めません
そして すべての點で
舶來品を凌いでゐます故
譽があり 誇りがあり
嬉びがあり 輝きがあります
皆様のお机に置かれてゐる
アテナ・インキ！



(すまりあもに店具房文の處何)

沖野岩三郎先生著。落谷虹兒畫伯裝幀並ニ挿畫

長森の祈り

『金の星』愛讀者中未だ本篇
を讀まざる人ありや？
本篇は發行以來日淺けれ
ど、各方面より熱狂的大歡
迎を受け、新聞紙は筆を揃
へて、本篇を激賞せり

本篇は紀州の漁村に育つた兄妹の哀れな物語りであ
る。父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の
荒波にもまれつゝ奮闘努力を續け、遂に父に再會す
る迄の血涙記である。著者の信仰生活によつて生れ
た名篇だけに、一度本書に接すれば生計忘れぬ深
い感銘を與へられるであらう。最も健全にして有意
義な讀物として金の星社が責任を以て世に問ふ一大
傑作である。尙裝幀と數頁の挿畫は落谷畫伯の苦
心になり、他に見られぬ高雅極まりなく、しかも頗る
安價な本である。

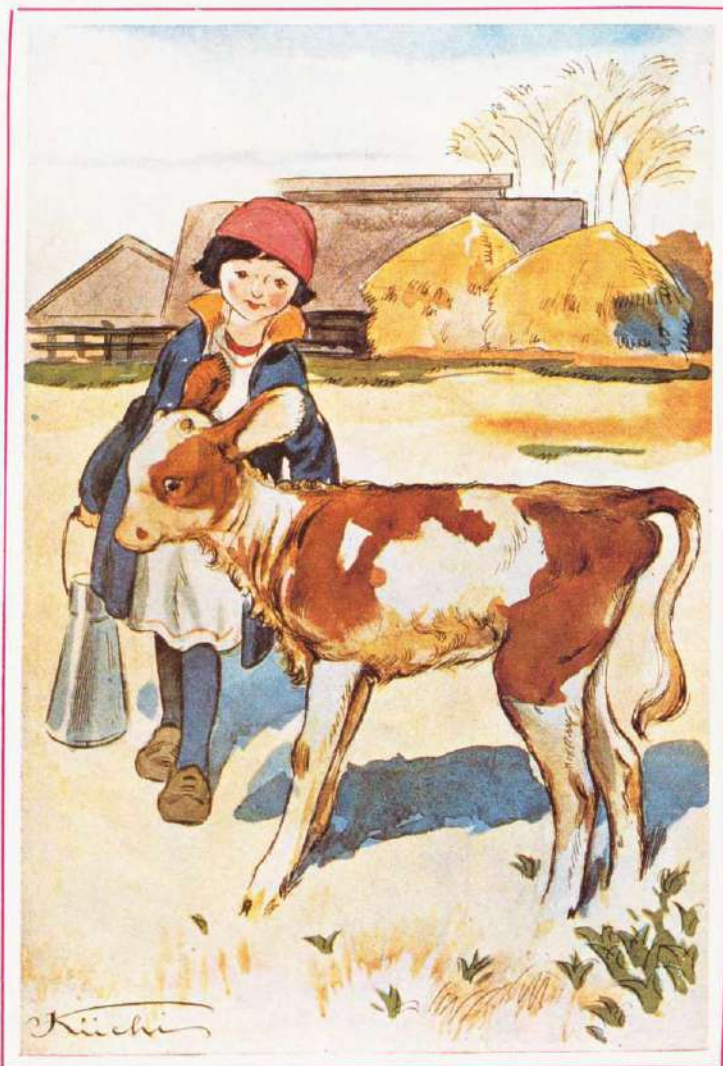
一五三端田外市京東
社星の金
番六九五九五京東替振

四六判箱入美本
本文二四〇頁
挿繪三色版外數頁
定價金壹圓八拾錢
送料金拾五錢



出目助さん道中記 (長篇) (三) 三島霜川
 あッはッはうッふッふ (滑稽童話) (六) 小島政二郎
 おやつ時 (童話) (六) 若山牧水
 シーグフリード物語 (繪物語) (七) 山野虎市
 不意の敵 (童話) (六) 沖野岩三郎
 嘆きの薔薇 (名島奇談) (六) 三井 信衛
 金べー (郷土童話) (三) 荒井 正巳
 主人を助けた牛 (郷土童話) (三) 刈田 謙三
 たらちね明神 (郷土童話) (三) 土橋 力
 牛沼物語 (郷土童話) (三) 松尾 芳男
 蜜蜂と牛の戦 (郷土童話) (三) 西依ひでを
 ナイビヤン (自由畫) (三) 山本 鼎選
 アラビヤン (自由畫) (三) 齋藤 佐次郎選
 冒険双六 (附録) 寺内萬治郎

何處まで滑る (表紙・原色版) 寺内萬治郎
 仔乳を求め (口繪・三色版) 岡本 歸一
 社の梅 (童話) (四) 野口 雨情
 同作の曲 (童話) (二) 中山 晋平
 林檎の木 (童話) (八) 楠山 正雄
 片手を失くした男 (怪奇物語) (五) 森川 一朗
 小鳥は空に (長篇) (三) 加藤 武雄
 聲謡舞踊『小石』 (話) 林 きむ子
 クウキキ先生 (童話) (三) 武井 武雄
 落葉 (童話) (六) 野口 雨情選
 ホシロー・ヒルム (蛸釣りの巻) (四) 真田 幸雄
 二人の米屋 (児童劇) (四) 小西 行夫
 お寶賣り (江戸奇談) (五) 小寺 融吉
 火事 (幼年詩) (六) 西川 喜平
 事 (幼年詩) (六) 若山 牧水選



仔

牛

(金の星畫)

岡本歸一畫

落谷虹兒先生の三大
名畫集を新春の机へ

虹兒
画譜

睡蓮の夢

美しき此の詩畫集を手になれた諸君から皆御喜びの手紙を澤山いたゞいて居ります。新たなる春の清い心胸に此の美しい書を抱かれよ。

虹兒
画譜

銀砂の汀

吾國第一の版畫家として名々の高い虹兒先生の畫は人の眞似も及ばない獨自の境地は益々あらゆる方面の人々から推賞されてゐます。一日も早く皆様に見ていたゞきたいと存じます。

虹兒
画譜

悲しき微笑

四版六羽二重
定價一圓三十錢
送料書留金五十錢

四版六羽二重
定價一圓九十錢
送料書留金八十錢

四版六羽二重
定價一圓七十錢
送料書留金七十錢

振替口座東京
四〇二七九番

交蘭社發賣

東京市神田區
南神保町六十番

女子學習院教授 射手矢貞三著 各冊菊判美本 三百頁圖入

新刊 少年 太平記

定價各冊

金一圓八十錢

送料各冊

金拾錢

上 二 下 卷

古來幾多の志士義人を感激奮起せしめたる千古の名文太平記の全篇を、少年少女にも容易く味得せらるゝやう、異常の苦心を以て之を現代文化せられしもの、而かも原文の妙所は、古文のまゝ味讀を容易にし、繁簡詳約宜しきを得て全篇の構想脈絡原文以上に整然として何人が讀んでも興味津津たるものあり。加ふるに故事成語の註解詳密平易、國史國文の參考書として又絶好の著述なり。

葛原 齒著

童謡の作り方

定價金壹圓六拾錢

送料金八錢

童謡作家として文壇と教育的兩方面から推稱せられ居る著者が飽くまで、兒童本位の立場から童謡の作り方を實例により懇切平易に講述せらるゝ、指導者の參考書として又兒童の創作手引として極めて好適なり。

文學士 小山文太郎著

男女學生の職業と學校の撰定

定價金壹圓五拾錢

送料金八錢

現代社會に於て男女學生の向ふべき職業なる各種職業につきて其の使命入門の概略等を詳述し、學生をして先づ自己の特性を判定して然る後學に向ふ資料ならしめしもの、附録として全國高等學校表を收む。

編 吉倉三木鈴・郎太林森士博學文
佑 冷淵馬・雄武村松士博學文

庫 文 伽 お 本 日 準 標

日	日	日	日	日	日
本	本	本	本	本	本
神	神	傳	傳	童	童
話	話	說	說	話	話
下	上	下	上	下	上
卷	卷	卷	卷	卷	卷
刊近	刊近	刊新	刊新	版五	版五

錢六料送) 錢十六金 冊各價定

てめ求を乳



畫 郎 治 萬 內 寺

クリスマス處女出版 児童文學界の新光彩

野邊地 天馬先生著

童話集 幼き日

四六版二百九十頁
定價 壹圓八十錢
郵税 八錢

童話の寶玉集である。幼いお子さん方々目的にして著者獨特の筆で書いたもの。

山村 暮鳥先生著

聖フランシス

四六版二百六十頁
定價 壹圓五十錢
郵税 六錢

聖者の生涯が詩的な筆でほんとうに子供の親しい女として描き出されてゐる。

村岡 花子先生著

島の娘

四六版二百二十頁
定價 壹圓八十錢
郵税 八錢

物語と童話とリス・マスのお嬢と綴綴する所二十五編悉く著者の精選に係る。

鈴鹿 正一先生著

舊約 エステル姫

三六版百六十頁
定價 壹圓四十錢
郵税 四錢

舊約に精通する著者が得意の域場で詩、麗い美くしいエステル姫の面目躍如。

上澤 謙二先生編著

児童説教 第一集 子供を眞中にして

四六版二百三十頁
定價 壹圓五十錢
郵税 六錢

新しい計畫と工夫の下に書かれたもので教訓や戒は勿論子供にも最も良の作例。

東京市神田區錦町一ノ八日本日曜學校協會内

あそびぞら社

振替 東京六九一五二番
電話 大手五五三八番

金の星 世界少年少女名著大系

星編 四 六 判 箱 入 美 本 定 価 各 冊 金 十 九 銭 送 料 金 十 五 銭

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定価で發賣するので、熱烈な歓迎を受け、増版又増版の有様です。皆さまの愛讀書として是非お揃へ下さい。

第一編 ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を畫いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

金の星 世界少年少女名著大系

星編 四 六 判 箱 入 美 本 定 価 各 冊 金 十 九 銭 送 料 金 十 五 銭

第五編 大人國小人國めぐり
カリバアー旅行記

カリバアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽なやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさんぐに目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

第六編 ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて、遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤン・ナイトといふ物語りは、世界の言語文學を通じていばれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシャ神話
オデッ セー物語

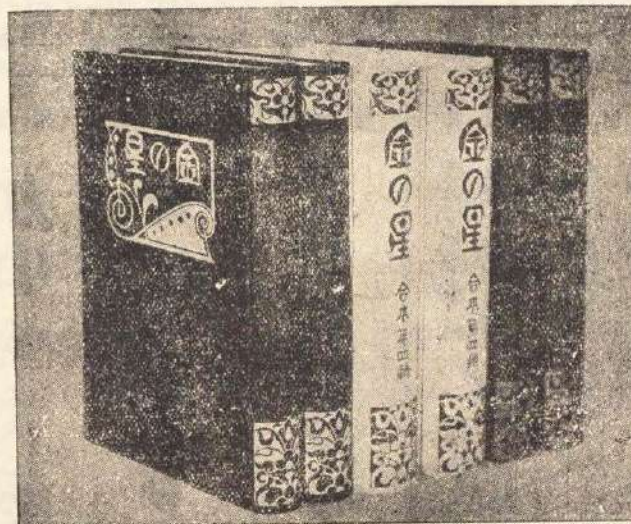
ギリツヤの詩聖ホーメーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセルが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シエークスピア物語

有名なシエークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のま』『エニスの商人』『カミーク』『女馴し』『眞夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

金の星

一月号



金の星合本

(總クロース金押美本)

二

輯

(五卷一號ヨリ
同六號マデ)

一冊定價金壹圓八拾錢

三

輯

(五卷七號ヨリ
同十一號マデ)

一冊定價金壹圓五拾錢

四

輯

(六卷一號ヨリ
同六號マデ)

一冊定價金 貳圓

何度讀んでも、讀み飽きのせぬ金の星を、揃へて書架に置きたいとの、皆様のお望みにより出來ました。「金の星合本」は、二輯、三輯、四輯、と取揃へて御座います、装幀は水島爾保布畫伯の意匠で、上圖寫眞の通り、それはく、目の覺めるばかり、美しい本となつてをります。歳末・新年の、少年少女の方々への適はしい贈り物と、好評を受けてをります。

證城寺の理囉

作曲 中山晉平
作謠 野口雨情

證しやう、證しやう、證城寺じやうじやうじ

證城寺の庭は

ツ、ツ、月夜だ
皆出て来い来い来い

己等の友達ア

ほんぼ、ほんのほん
負けるな、負けるな

和尚さんに負けるな

來し 來し 來し 來し 來し 來し 來し 來し 來し 來し
皆出て、來い 來い 來い 來い 來い 來い 來い 來い 來い 來い

證しょう、證しょう、證しょう城寺じやうじ

しやうじやうは 一巻
 豊城寺の萩は
 つれよ
 はなはか

己等の友達ア

ほんほ、ほんのほん

琴の歌

菊

2/4

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

[illegible]

社の梅

野口 雨情

一の鳥居を

くぐろしたりや

ホウホケキヨと

一聲啼いた

三の鳥居を

くぐろしたりや

ホケキヨホケキヨと

二聲啼いた

一の鳥居の

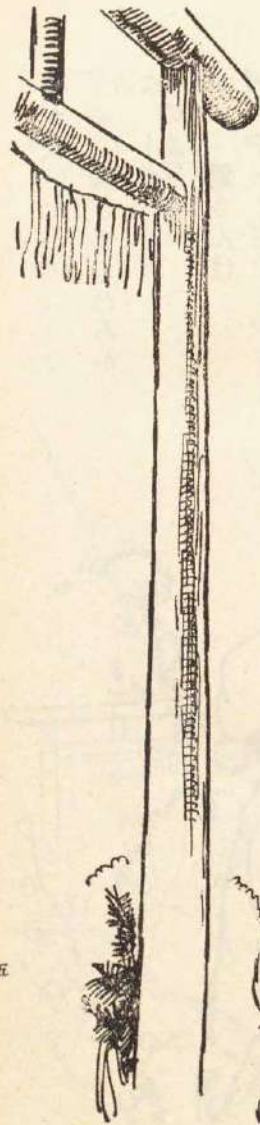
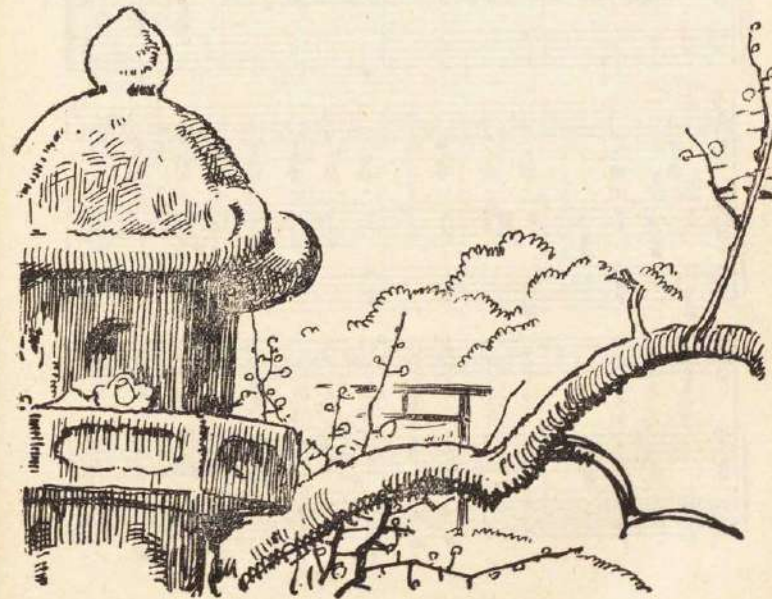
鶯さんよ

三の鳥居の

鶯さんよ

わたしやたづねる

社の梅は



花が咲いたか
咲きましたるか

一の鳥居の

鶯さんは

一つ咲いたと

申されました

三の鳥居の

鶯さんは

三つ咲いたと

申されました

三つ咲いたは

いつ咲きました

一つ咲いたは

いつ咲きました

一つ咲いたは

今朝咲きました

三つ咲いたも

今朝咲きました

三の鳥居の

鶯さんよ

花は十まで

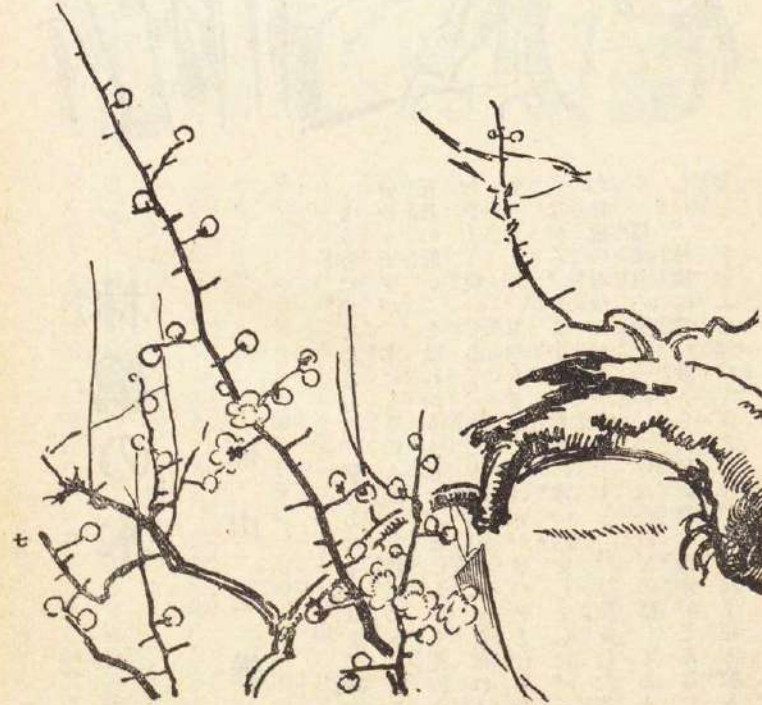
いつ咲きまする

一の鳥居の

社の梅は

花は十まで

明日咲きまする



林檎の木

八

楠山正雄



もう春は来てゐました。肌にあたる風はまだ冷たいやうですが、木にも草にも畑にも牧場にも、もう五月の近いことはわかりました。どこもかも花がうちや／＼咲いてゐて、中にも垣根の上にはこぼれるやうでした。ちやうどそこでは春がせつせと仕事をしながら、ある小さな林檎の木の話をしました。その林檎の木はたつた一本のでもそれは生々した花や、薔薇色の蕾を一杯につけた小枝をのばしてゐました。林檎は誰に教へられないでも自分がどんなに美しいかをよく知つてゐました。まつたく花も葉も

同じやうに美しいといふのは林檎の木をいふのでせう。

そこでその時、林檎の木の立つてゐるすぐ前、往來に一臺の綺麗な馬車が止まつて、車の上の若い伯爵夫人が、およそ見るもので林檎の木ほど美しいものはない。林檎の木はじつさい春そのものが一ぱん美しく飾り立てて現れたやうなものですと言ひましたが、これをきいても林檎の木は一かうへいきな顔をしてゐました。伯爵夫人はさやしやな手で小枝を折り取つて片手に持ち枝に日のあたらないやうに絹の日傘をさしました。それから伯爵夫人の一行はお城に馬車を急がせました。お城には天井の高い廣間や、眼の醒めるやうな部屋がいくつもありました。雪のやうに白いカーテンが開け放した窓のところにびらびらしてゐました。そして美しい花はきら／＼光る透き通つた花瓶にいてありました。その花瓶の一つには、今し方降つたばかりの雪に刻み込んだかと

思ふやうな光があつて、その中にはみづ／＼した山毛櫸の小枝が生けてありました。

さて林檎の枝はこの山毛櫸の枝の間に挿しこまれたのですが、どうしてなかく／＼みごとなものでした。そこで林檎の枝はとくになつてゐました。そこらはそつくり人間とおなじことでした。

いろ／＼な種類の人たちが大勢その部屋を通りましました。そしてめい／＼身分相應な感嘆をもらして行きました。まるつきり口に出しては一言もいはない人たちもありました。またあんまり言ひすぎるほどはめたてた人たちもありました。そこで林檎の枝は草や木に區別があると同じやうに、人間にも差別があることを知りました。

『装飾の役に立つものも、るし、食物の用になるものもある、またまるつきり無用なものもあるんだな。』と、林檎の枝は考へました。ところで林檎の枝はちやうど開け放した窓側におかれて、そこからは

庭も野原も大そうよく見通しがききましたので、十分に花や草木のことを考へて見る事が出来ました。草や花の世界にもお金持と貧乏人はありました。どうしてひどい貧乏人がありました。

「雑草といふやつ、可哀さうに、あれらはてんで相手にされないんだな。」と、林檎の枝は思ひました。「そこちやんと物の差別といふものがついてゐるのだ。わたしの仲間のものが物に感じるやうに、あれらも物に感じるとしたら、自分ながら随分情なく思ふことだらうな。全く物の區別といふものがちやんと出来てゐるのだな。けれども差別がついてゐるからいいので、もし差別がなかったら何もかも同じ様になつてしまふだらう。」

林檎の枝は憐むやうな目付で、野原や溝端にかたまつて咲いてゐる花の仲間を眺めました。誰もその花をたばねて花環を作らうとするものはありませんでした。その花は花環に作るにはあんまり澤山あり

すぎました。それどころではありません。その花は敷石の間にさへも生えてゐて、一番たちの悪い雑草のやうにどこにでも芽を出してゐました。そしておまけに「悪魔のきんぼうげ」といふいやな名前を持つてゐました。

「可哀さうに、輕蔑されてゐる草が。」と、林檎の木はいひました。「お前さんのそんなにつまらないありふれた草で、そんないやな名前をつけられてゐるのも、みんなお前さんのせいではありませんよ。いえ、それは草だつて人間と同じやうなもので、必ず差別といふものがなければならぬのです。」

「何が差別だ。」と、日の光はいひました。そして花を開いた林檎の枝にキッスをしました。けれども野原に咲いた悪魔の黄色いきんぼうげにもやはりキッスをしました。日の光の兄弟たちもみんな、貧乏な花にも、お金持の花にも、差別なくキッスをしました。



さて林檎の枝は神様のおかげで生きて動いてゐる萬物に向つて、神様が限らない愛をそゝいでゐて下さるわけを一度も考へたことはありませんでした。またその愛の中には澤山の美しいものや善いものが隠されてはゐるが、決して忘れてはつたらかしてゐるわけではないといふことも考へたことはありませんでした——でも實際さういふところも人間と同じことでした。

日の光の方がかういふことはずつとよく承知してゐました。

『君にはそれ以上のことはわからない。はつきりよくわかつてはゐないのだ——君がとりわけ可哀さうがつてゐる邪魔者扱ひの雜草といふのは何だね。』

『邪魔のきんぼうげです。』と、林檎の枝は申しました。『あの花は花束に編まれることもないし、靴の尖で踏みにじらされるし、またあんまり数が多すぎます。種になつて飛び出す時には、小さな毛糸屑のや

うに道の上を飛び廻つて、人々の着物にひつつきまです。なるほどあれは雜草です。けれども雜草だつてあつていけないわけではないでせう——まああんな花に生れつかなかつたことを、わたしはほんたうにありがたいと思つてゐます。』

ふと野原に一組の子供仲間がやつて來ました。その中でも一番年の若い子はまた大そう小さかつたものですから、ほかの子供におぶさつてゐました。黄色い花の咲いた草の間におろされた時に、その子はうれしがつて大きな聲を立てて笑ひました。そして足をもがいて、ぐる／＼轉げ廻りながら、黄色い花ばつかりを摘んで、可愛らしく無邪氣にその花にキッスしました。それより幾らか大きい子供たちは莖から花をもぎとつて莖で環を作りました。そして環に環を作つて行つてたうとう一本のリツパな鎖を作りあげました。一番初めに出來たのは首環でした。それから肩から胸の上まで垂れる鎖を作りました。

と、林檎の枝は申しました。

そこへ年とつたおつかさんが野原にやつて來ました。そしてなまくらな切れない小刀でその花の根のぐるりを掘り始めました。おつかさんはこの根をほり取つて、半分はコーヒーにませ、半分は藥にしてお醫者様に賣らうといふのでした。

『だが美といふものはもつと高尚なものですよ。』と、林檎の枝が申しました。たゞ神さまのお選びになつたものだけが美の王國に入ることが出来るのです。人間の間に差別があると同じやうに、草木の間には差別はゐるのです。』

そこで日の光は神様がそのお作りになつた生きものに對して、どんなに限りない愛情を持つておいでであることや、何によらずどんなにか公平におわかになることなどを言つて聞かせました。

『なるほど、それがあなたの御意見とあればいたし方がありません。』と、林檎の枝は申しました。

また頭に巻くのも如才なくこしらへました。これで見事な緑色の環や鎖が出來たわけです。けれども一番大きな子供たちは注意深くもう花の咲き散つてしまつた莖を摘み取りました、その莖の上には雪のやうな驚毛が集つてゐて、このふんわりした軽い羊毛のやうな花は、ごく上等な羽毛や粉雪やまたは胸毛で出來た可愛い細工物のやうに附いてゐました。子供たちはこれを口のところに持つて行つて一息に吹き飛ばしました。といふのはおばあさんの話によると、これをうまくやつたものは誰でもまだその年が暮れないうちに、新しい着物を手に入れることが出来るといふことでした。

輕蔑された花も、この場合はどうして一かどの豫言者でした。

『わかつたらう。この花の美とその力が君にはわかつたらう。』と、日の光が申しました。

『いかに子供たちにとつてはね。』



片手て失くした話

森 川 一 朗

「どうして私が片手を失くしたかと云ふのですか。と、ギリシャ商人のツアロイコス^{ツアロイコス}は、自分の周囲に集まつた同じ旅商人達を見廻して云ひました。

今日も旅商人の一行は廣い砂漠の旅に疲れて、夕方になつて露營の陣を張りました。晩飯の後では皆が交るゝに種々な身の上話をすることに決つてゐました。暑いばかりで何一つ眼を樂しませることのない砂漠の旅では、このことが何よりの楽しみだつたのです。

今晩は片手のないツアロイコスから、その失くした譯を聴かうとして皆が集まりました。ツアロイコスは一寸暗い顔をしました。

「私が左の手を失くしたのは、さア、その譯は——」

ところで今大勢部屋の中にはひつて來ました。そして林檎の枝を透きとほつた花瓶に挿したあの若い伯爵夫人も來ました。この花瓶にさし込んだ日も光が林檎の木に話をしたわけなのです。伯爵夫人は花とも見えるしまた花でもないやうなものを持つてゐました。それは三四枚の大きな葉で紙の袋のやうにかこつてありました。ふと思がかかつて風がそよと當つてもこはれてしまふといふやうに、それはうつかしい林檎の枝も受けたことがないやうな手あつて心遣ひをうけて運びこまれました。やがてごくそつとその大きな葉は取りのけられました。さて中からは何が現れたでせうか。どうですそれは黄色い輕蔑されてゐるきんぼ、げの小さな雪のやうな驚毛でした。それを伯爵夫人は大事にして摘み取つて、さも心配さうに持つて來たものでした。ですからまるで霧の被物をかいたやうな、ふうわりときやしやな草のわた毛の矢は、一枚も飛び散つてはゐませんで

した。伯爵夫人は傷つけずに取り、そのまゝ持つて來たのでした。そしてその美しくのびた姿や驚毛が風に飛び散る時の輕いさわやかな感じなどを褒めたへました。

「ねえ、でもほんとに神様はすゑぶん美しくこの花をお作りになつたのですね。」と、伯爵夫人はいひました。『わたしこれを林檎の枝と一緒に繪を書いて見たいと思ひます。なるほどこの林檎の枝もなかなか美しいでございます。神様のお作りになつたこの可哀さうな花だつて、これはこれでべつたの美しさがあるのです。これはどんな差別があつても、二つともやはり美の王國の子供であることに、かはりはないのです。』

日の光は可哀さうな花にキツスしました。そして花の咲いた林檎の枝にもキツスをしました。その時林檎の枝がばつと葉を赤くしたやうに見えました。

(をばり)

と云つて次のやうなお話をしました。

—

私はコンスタンチノブルで生まれました。私の父は土耳其朝廷の通譯官でしたが、別に香水や絹物を商つて可なり儲けてゐました。物識りであつた父は、私に種々な學問を教へ込んで呉れました。それから父はお友達の方さんの一人に頼んで呉れましたので、その上の學問まで教へることが出来ました。始めのうち父は、私を商人として後繼ぎをさせるつもりしかつたのですが、私の學問の出来がよかつたので、人の勧めに従つて私を醫者にしようと思ひました。何しろその頃私の國では醫者と云へば澤山の人から敬はれて、その上にお金もうんと儲かつたからです。

私の家へは澤山のフランス人が來ましたが、その中の一人が、醫者の學問をするなら巴里がよいと云

ひましたので、私はその人に連れられて、巴里に勉強に行くことになりました。何しろ外國が見物出來ると云ふので、その時の私の喜び方たらなかつたものです。そして一日も早く船に乗込んで、詩の國フランスへ行きたいと思つてゐました。

やがてその親切なフランス人は、土耳其での用を済まして、いよいよ私を連れてフランスへ出立することになりました。

その前の晩のこと、父は私を父の寢室へ連れて行きました。私はその机の上に美しい服と、一振りの短剣とがあるのに氣が付きしました。然し、それよりもつと私を驚かしたものは、机の上にうづ高く積まれたお金でした。私は生れてから、こんなに澤山のお金を見たことがありませんでしたから無理もありません。その時父は、私を抱いて申しました。

『これ件、お父さんはね、お前の旅の着物を拵へて置いたよ。それからそこにある短剣はお前にやる。こ

の品はお父さんが若い時分、外國へ旅立つた時に、お前のお祖父さんが下されたものだ。お父さんは、お前がその短剣を使ふことの出来るのをよく知つてゐるよ。だが無闇に使つてはいけない。この短剣は

お前が人に打ち掛られた時だけ使ふのだよ。そんな時は、勇ましくこれで打返してやれ。私の財産は澤山はないけれど、ほら、この通り三つに分けて置いた。一つはお前のもの、一つはお父さんの生活に費ふもの、残りの一つは手をつけずに置くお金だ。これは災難にでも遭つた時の用意にするのだよ。』

さう云つて父は眼に涙を流してゐました。私はこの時位、父がなつかしかつたことはありませんでした。この時限りで、私は一生父に會ふことが出来なかつたのも、多分蟲が知らせたとしても云ふものでせう。

船の旅も、陸の旅も都合よく運びまして、私達は六日の後に大きな都、巴里に着くことが出来ました。

一六

そこで親切なフランス人は、私に一室を借りて呉れました。そしてざつと二千圓ばかりのお金を、要心して使ふやうにと云ひました。

美しい都巴里で、私は三年の間を過ごしました。その間に私は醫者の學問を可なり學ぶことが出来ましたから、もう一かどの醫者としては充分となりました。さア、さうなると一日も早く故郷へ歸つて、父の喜ぶ顔が見たくて耐りませんでした。三年の間、ついで一度も、父からの便りを受けませんでしたから、尙更のことです。

所が都合のよいことが起りました。それはフランスの國からトルコへ公使がゆくことになつて、私はその公使に外科醫として隨いてゆくことになつたのです。さうして私は、三年振りになつかしい故郷のコンスタンチノブルに歸り着くことが出来ました。

所が、私が自分の家に歸つて見ますと、驚いたことには、家は戸閉めになつてゐて、人が住んでゐる

一七

らしくも思はれません。不思議に思つて隣の人に聞いて見ますと、私の父は三年前に死んだと話して呉れました。その時私の歸つて来たことを知つたと見えて、私が子供の時分學問を教はつた坊さんが、一つの鍵を持つて来ました。そこで、私は獨りばつちに取残された家の中に這入りましたが、家の中は昔のまゝでした。然し三年も戸閉めにして置いたので、すから、微臭い匂ひがして、どこやら荒れ果てた様子が見えました。家の中のものは大抵揃つてゐましたが、私の一番欲しいと思つた所の、父が私に残して置いた筈のお金が見當りませんでした。私が坊さんにそのことを尋ねますと、

『あなたのお父さんは、清い人としてお亡くなりになりました。それはお金を皆んな教會に譲つて亡くなられたからです。』

坊さんの答へを聞いても、私は何んだか腑に落ちませんでした。それかと云つて、私にはこの坊さん

を疑ふわけにも参りませんでした。何故と云ふに、私はこの坊さんを疑ふやうな、一つの證據も握つてゐなかつたからです。

で、私はせめて家や品物が残されてあつたのを、幸せとしなければならなかつたのです。

これが私の初めて出會つた不幸でした。それから後は何事もうまく行かず、不幸なことが重なりまして、醫者としての私の評判は一向よくなりませんでした。と云ふのは、私は大風呂敷を張つて廣告することは嫌ひでしたし、その上父が生きてゐれば、澤山の尊い人達に紹介せて貰へたのに、それが出来なくなつたからです。

また父が残して置いた品物の商ひもやつて見ましたが、これもお顧客がばら／＼に散つてしまひましたので、一向賣れませんでした。

獨りばつちになつて、すること爲すことうまく行かないので、私はつく／＼情けなくなつて参りました。

た。さうして考へ込んだ揚句、ふと思ひ當つたのは、私がフランスにある時分、よく街々でいろ／＼な品物を陳列してゐる自分の國の人を見たことでした。彼等は外國から珍らしい品物を持つて来たからと云ふので、フランス人は喜んでそれらの品物を買つてゐたことや、このやうな商賣は百倍も儲けることが出来るのだと云ふことを思ひ出したのです。

其處で忽ち私も決心しました。親譲りの家や品物を賣つて、そのお金の幾分かを、親しい友達に頼んで置き、残りのお金でフランス人には珍らしいが、さうな品物を澤山買込みました。肩掛だの、絹織物、香水、香油、その外いろ／＼ありました。

かうして私はそれらの品物を賣る商人となつて、フランスへ向つて二度目の旅に出ました。私が故郷のダルダネのお城を後にした時は、もう幸運が眼の前にやつて来たほどにも思つた位でした。

私の旅は無事に済んで、間もなくフランスに着き

ました。私は早速、到る所の大きな街や小さな町で品物を廣げました。所が到る處賣れ行きがよくて、品物を故郷の友達から送つて貰ふの間に合はない位でした。こんな譯で、私はお金がどし／＼と儲かつて行きました。こんな工合では、いまいに大仕掛けの事業が始められると思ふ位でした。私がこれ程に儲けたのは商賣ばかりでなく、私の醫者としての腕前も大分助けてゐました。このやうにして私は伊太利のフロレンスへ参りました。そして私はこの街の穩やかで美しい様子がすつかり氣に入つてしまひました。それに私も長い間方々を旅して歩きましたから、大分疲れも出てゐます。で、この氣に入つた街で暫くゆつくりして行きたいと思ひました。

私はサユタ、クローチエ區で一軒の店を借りました。そしてそこから遠くない所にある宿屋の上等な二室を借受けまして、毎日店へ通ふことに決めました。そこで、早速醫者と商賣との二つの廣告ビラを

街中に撒きました。

私が店を開けますと、またお客はどしどしとやつて来て、品物は高い値であるのに飛ぶやうに賣れました。

その上私はお客に愛想よくしましたし、親切にもしましたから、ほかの商人よりずつと賣れ行きがよかつたのです。

私はほく／＼喜びながらちきに四日を過ぎてしまひましたが、その四日目の晩のことです。私が店をしまつて鐵箱のお金を調べて置かうとしました時、ふと見覚えのない一枚の書付が還入つてゐるのに氣が付きしました。

開けて見ますと、それには『今夜正十二時にボンテ・ベツキオと云ふ橋の上に来て呉れ』と書いてありました。

私は考へました。一體知り人もないこの外國の街で、誰が私を呼び出すのだらう。だが私が醫者なの

で、その方の用でこつそり頼みたいのかも知れない。——さう思ふと、私は別に不思議にも思はなくになりました。併し、用心の爲めに父から貰つた短劍を腰につけて行きました。

書付に書いてあつた通り、私は正十二時にボンテ・ベツキオの橋の上に行きました。見ると此橋の上には人つ子一人見えません。はて自分を出した人はどうしたのだらうと思つて、暫く待つてゐました。

その夜は寒い晩で、磨き上げたやうな月が皎々と牙え渡つてゐました。私は橋の欄干に凭つて、遙かに遠くの方まで月の光にきらめいてゐるアルノー河の漣を見下してゐました。市の會堂の鐘は、正に十二時を知らせてゐました。

ふと私が身を起すと、私の眼の前に赤い外套を體を包んだ丈の高い人が立つてゐました。この人は外套の裾で自分の顔をかくしてゐました。



私は始め、ぎよつとしました。何しろいつとなく、音も立てないで眼の前に來て立つてゐたのです。

から、無理ありません。然し、私は氣を落付けて話しかけました。

『私を此處へお呼び出しになつたのはあなたです

か。さうならその用向を仰言つて下さい。』しかし、赤外套の男は私の方を振り向いて、たゞ、

『随いてお出で。』

と静かに云つて、もうそろ／＼と歩き出しました。

(つゞく)



小鳥は空に

(長篇)

加藤 武雄

まだ春は遠かつた。北郊の山々は雪に鎖されて、洛中の巷々さへ人通りも稀であつた。大文字山の麓、白川の流に沿うた鹿ヶ谷の、黒谷山にむかつた丘の

斜面に、このあたりには珍らしい赤瓦の洋館があつた。日あたりを受けて五坪ばかりのヴェランダをつたバンガラ風な建物ながら、幾年も手を入れた事がないのか、壁や柱のペイントがはげて、粗末なアメリカ松の素材が裸體になつて居る。それでも鋳扉を開いた硝子窓には、新しい褪黄色の佛蘭西縮が、暖かさうにとざゝれて居るのは、餘り貧しい人の住居とも思はれない。外の構造は西洋風だが、室の状況は日本風であつ

た。だが北向きの一室のみは洋式の畫室になつて居た。右手の壁に懸つた、五十號ばかりの油繪は、草花の咲き亂れた緑の野邊に、美しい若い母親が、愛兒を抱いて恍惚と蒼空を眺めて居るセガンティニ風な構圖と、モザイクのやうな美しい色彩であつた。左の壁には、側燭が切つてあつた。自然石を積み重ねてコンクリートで固めた、如何にも古風なものであつた。そして投げ込まれた松薪が今にも燃え盡さんとして、かすかな焰がゆらめいて居るのであつた。爐の前の腕椅子に悠然と背を埋めて長い編棒を動かして居る婦人の、鼻筋の通つた、頬の豊かな、その横顔が、まるで油繪の中から、抜け出したやう。だがが見ても畫のモデルが、腕椅子の婦人である事は知られるのであつた。婦人は臆て膝の上の編物を両手で摘んで眼の前に擴げた。それは高き子供のジャケットであつた。婦人は溢れ出る満足の微笑を見せた。そして、その

姿勢を崩さず、聲をあげて呼んだ。
『義ちやん、義ちやん。』
暫く目を澄したが、答へる者がなかつたので、編物はそのまま、椅子の上に残して窓際に歩んだ。だが、其處いらの田圃にも子供の姿は見えなかつたので、婦人は火照た頬を窓硝子に觸れて、冬枯した花園を見るときも眺めるのであつた。
花園の片隅に投げだされた薔薇の幾鉢かがあつた。その一鉢は、いちぢけた黄色い一輪の花をつけて居た。婦人は、その花をみて、不圖ひどく悲しげな表情を見せた。
『おや、もう首着の芽が萌えましたのね。』
だれにともなく、婦人は叫びた。今しがた冷い指でぎゅつと掴まれたと思つた心臓にも、霜解けの大地に萌え出る首着や蓑の芽生えを見ては、春が来るのだと、一脈の暖い血潮が流れるのを覚えるのであつた。それはど人々は永い冬に飽々して居た。

義雄は先祖の生活や家系に就ては何にも知らなかつた。父は、もともと京都の人ではなく、彼の生れた前の年、東京から移住して來たのだとは、駐在巡查の森田老人から聞いて居たが、親戚や祖父母の事に就ては話すものもなかつたし、また義雄は考へた事もなかつた。

父は大柄で眼が大きく、髯が短かつたことは覺えて居る。繪具と油に染まつた作業服を着て、スタディオから出て來ると、いつでも義雄を兩手で掴んで眼よりも高く差しあげた、そして、いつでも口癖に「何うだい、義ちゃん東京が見えるかい。」

と云つた。義雄は今でも其れを想ひ出すのであつた。父はスタディオで畫筆とパレットを兩手にしたまま倒れた。その夕方、義雄は高臺寺に居た父の友達の家で預けられた。それは彼が二歳の夏であつた。一週間程して、その家の「小母さん」に伴れられ

て鹿ヶ谷に歸つては來たが、もう父の姿は見られなかつた。

「母さま、父さまは何處へいらつしやつたの。」

「東京へいらつしやつたの。でもねえ、私達はまだ二人きりよ、母さまと義ちゃん二人きりなのよ。」

さう云つて母は泣いた。

「坊ちやま、坊ちやまは、おとなでいらつしやいませね。だから、もうお父さまの事はおたづねなさらない方がいゝの。」

高臺寺のをばさまが、さうそのとき口添したので、其れ以來、義雄は一度も父の事は云ひださなかつたが、いつの間にか父の死を知つたのであつた。

其れから、幾日も、毎夜のやうに父の夢を見た。

眼が醒めても、涙を母に見せまいとして、いつまでも蒲團を被つて泣いた。日を経るに従つて父の夢は遠くなつた。一週間に一度となり、一ヶ月に二度となつた。

義雄の母の信子は孤兒であつた。信子の父は植木屋であつたので、兩親に別れてのち、父の出入先であつた南部男爵の家に引きとられて、そして十六の春を迎へた。その頃、男爵は逝いて、未亡人の男爵夫人が家長であつた。信子は物静かないつても嬌羞

を包んだ内氣な娘であつたが、それが勝氣な男爵夫人の氣にいらなかつた。信子はいつても憂愁の中に暮して居た。義雄の父の義澄は男爵夫人の甥で、その頃まだ美術學校の學生であつたが、あるとき、信子が臉に涙

をいつばいたためて、グエランダに絡んだ常春薔薇の蔭に佇んで居る姿を見てから、どうしても、その伯母の侍女の面影を忘れる事が出来なくなつた。そして、いろいろの紛糾を重ねたのも二人は結婚した。

岩村伯爵家は四國のある小藩の藩主であつた。領地や財産は、さほどでもなかつたが、當主の義興伯は明治維新の功



臣であり、そして貴族院の重鎮であつた。だから、名譽と富とに對する信仰は人並すぐれて居たが、愛の生活に理解のあらう筈がなかつた。彼は「人類は萬物の靈長であり、華族は民衆の靈長である、同族以外の國民は家畜のやうなものであらう」と考へて居たのだ。それだから、三男の義澄が、植木職人の孤兒で、妹の小間使である信子と自分勝手に結婚したと云ふ事に對して、烈火の如く怒つたのも不思議ではなかつた。

「僕は、彼奴のやうなやくざ者の顔を見るのも否や。勿論、當家からは勘當だが、東京に居ては當家の名譽にも係る、相當の財産は分けてやつてもよいから、何處か遠方へ移住して貰ひたい。」と云つた。だが、三男の義澄が、伯爵家を後に行方知れぬ旅に出た日から七日ほど、この頑固な老伯は食事もせず、自分の室に閉ぢこもつて居た。義澄は、新しい妻の信子と共に、永いあひだ憧憬

て居た京都へと旅立つた。その當時、洛東麴ヶ谷附近は、まだ寂しい農村であつた。吉田山と東山の間に南北に開けた一帯の高地で、銀砂子を敷いた白川の細流には山鶯の長閑な唄もきかれたし、夏が來れば苺の花が咲くのであつた。それで適當な地所を買つて、自分の好みでバンガロウ式の小さな洋館を造つた。

義澄の秀麗な容貌と、強健で優雅な姿と、快活



義澄が死んだ。

父が死んでから、母の信子はお化粧ひとつしなかつたし、町へ出る事もめつたになかつた。父の生前には、父が歌つて母が奏でたピアノさへも、もう幾年か蓋を閉した儘であつた。

「奥さま、奥さまのピアノを久し振りできかせていたときたと思ひますわ。」

主人思ひのお美津が、何うにかして信子の氣を引き立てやうと、斯う云ひ出したとき、

「でも、もう線が錆びて駄目よ。」

たつた一言答へたのみであつた。

義澄は、母の心を知つて居た。哀愁に鎖された母

な笑ひ聲、そして氣持のよい明るい話し聲、その大膽と寛容、これらが不思議な魅力となつて誰でも彼に接するものは皆彼を敬愛せずには居られなくなるのであつた。

その多くの村人の中でも、特に岩村一家と接近して居たのは駐在巡査の森田平吉と、村の大工の谷口庄助であつた。

その翌年、長男の義雄が生れた。それで何かにつけて不自由だらうと云ふので大工の庄助は、妹のお美津を、給金なしで働かせてください、と云つて連れて來た。それから六年目に





の姿を見るたびに、彼の小さい心はとうにかしてお母さんを楽しくしてあげねばならぬと考へるやうになつた。

義雄は、幼い遊び仲間が門の外から呼ぶときにも、滅多に外へは出ずに母の傍に居る事にした。そして偶々森田巡査を訪ねては、世間話を聞いて歸つて、片言まじりに出来るだけの言葉を盡して、母に其れをして聞かすのであつた。

あの子ね、子供心にも一生懸命私を慰めやうとして居るのだよ。まるで、あの子の心の中には旦那様が生きていらつしやるやうだわ。

ある日、信子はお美津に斯様ことを云つた。

その義雄が、今日は何うしたのか朝から姿を見せない。母はそれが寂しいのであつた。

その見のために編みかけたデヤケットを、ためにしに義雄の軀に合せて見たいと思つて呼んで見たのだが返辭はなかつた。

それもその筈であつた。そのとき、義雄は駐在所の森田巡査を訪ねて居たのだ。

管内の巡回から歸つたばかりの森田巡査は動物園の象の様な肥満したからだを窮屈さうな制服に包んで古椅子にどかりと腰を下した。そして雪でも來さうな寒さだのに制帽を脱ぐと額は汗で濡れて居た。

「義ちゃん、犯人がまだ捕まらないぜ。」

事務机の隅にちよこんと腰をかけた、小さな義雄を對手に、ふと呟いたのであつた。

「犯人で何なの？」

「罪を犯した悪者なんだよ。」

「罪つて何なの？」

「法律を犯す事だよ。」

「法律で何なの？」

「困つたなあ、義ちゃんに話したつて解らないからなあ。」

そして日誌を擧げて、その半日の仕事を記入しやうとした。

「解つた。法律つて云ふのはモーゼの十戒の事だらう。」

突然、義雄が、びよんと卓子から飛び降りて、兩手を腰のあたりで組みあはせてそり身になつた。

「モーゼの十戒と云ふのは何だい、義ちゃん。」

今度は森田巡査が訊ねた。

「おや、おちさんはお巡査さんのくせに、モーゼの十戒を知らないのだね。」

小牧師は拳を固めてどんと卓子を叩いた。

(つづく)

童謡

舞踊小石

(前月掲載)
(曲譜参照)

振付 林きむ子
作曲 野口雨情
作詞 本居長世
表現 大橋榮子

(1) 前奏中



はすみをつけ、やゝ滑り出るやうな足どりで、進み出てよき所にきまる。

(2) ひかう横丁で



歌ひ出しから右足を先に、左足を右足と三歩、前方やう右方を指し其方向へ斜にすむ手は一歩ずつ毎に少しづつみて三度新に指す。即ち出足と合ふやうに。

(3) 小石を拾ふたーひろた



小石を、図のやうに、拾ふたで右手と左手と替へて、手ついで、後へすゝむ。後の拾たで又石へ、次に左と早間に斜に後方へ廻る。但し床に8字形を描き側面を見せて。

(4) 拾ふた小石を



右から三歩、前方へすゝむ。但し足は軽くすこしつまみながらの心もちで、へくびは日本式につかばす。

(5) 袂に入れりや



図のやうに左からはじめて水に右へ移る。但し右の時は上の手は袖の中に入る。そして背の下へ、奥即ち「や」で一歩純日本式に上手向ふを見る。

(6) 袂重うて振ろとてふれぬ



重うては、図の反對に同じ形をする。振ろとてふれぬは、いらがひに袂を上下して前向で後へ滑る足を、使ふ合の手の間、袂をもつたまゝ大きな8形を描きながら上手から後へ滑るやうに行く。

(7) 袂たゝんで



更めて靜に三歩前方に出て来る。出足は、のびしてつまみつやうかろく。袖は並べたまゝ足と同じに右左なかへる。但し肩とくびは使はず。

(8) お膝にのせたーのせた



お膝にで坐り、乗せたいのせたで、兩袖を靜にのせ終る。乗せたい袂で、わからぬやうにきまり、腰を浮かせながら、拍子をとつて袖でひざななく(たゝんで居たりやまで)

(9) 石はころげて



漸次に立上りながら、図の様に後へまける。但し低い三拍子に波形を描く気分。

(10) たもとは

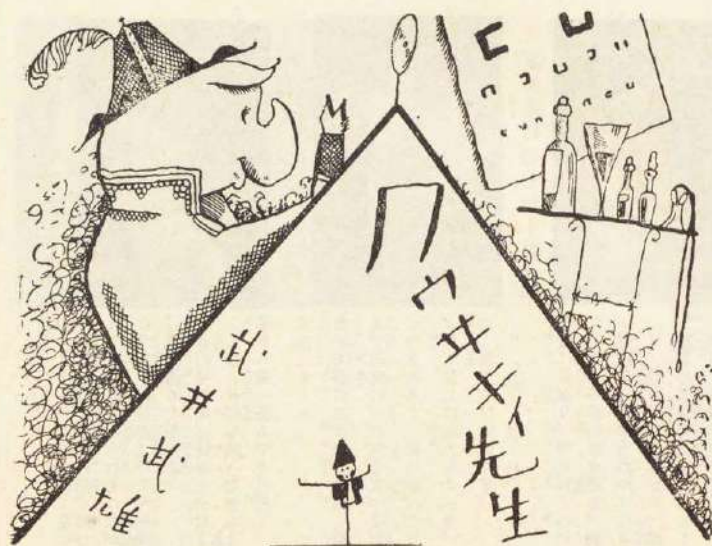


先のつゞきの後方から、袖を描くやうに袖を二本の指でつまみ、軽く上げて前向になり、図のやうに足をあげる。(足と袖は同時にふわりとくやうにあげる)

(11) のこるー



前に関子が半歩に移る時あげた足を真直に前へ出してねちり、入れ足にしてあげた袖をひるがへしながら図のやうな見えで納る。



私の歩く道には、いつでも豚の話ばかり落ちてゐるのだからやり切れませんね。今日も一つひろひましたよ。それはかうです。

一體この豚はもと鍛冶屋だったのですけれど、豆腐屋になつてさつぱり賣れず、もつとも賣れないわけですよ、あの聲ではね。それからやめ。今はお醫者さんです。どうしてなか／＼先生なのです。

さあさあ評判のクウキイ先生

四百四病が只の二分間でなほる。

世界に名高いクウキイ先生。

これが先生の門にかけてある大きな甲板だから驚くではありませんか。

ところが、この位名高いクウキイ先生が、さつぱり繁昌しないのです。もちろん下手だからではありません。何しろ豚などといふものは馬鹿に丈夫で、なか／＼病氣になんぞなり手がないからだ、といふことです。なるほどさう云へば豚は少し位腐つたも

どれ。

と、云つてゐるうちにブウキエフは一目散に逃出してしまひました。あとに残されたクウキイ先生は、ポカンと口をあいたまゝしばらく突立つてゐました。

二三日して、チラ／＼と雪のふる晩に、クウキイ先生がストーヴに火をたきつけてゐると、おもてのドアをいやにバタ／＼と叩く奴があります。

『どなたぢや、どなたぢや。』と呟鳴ると、

『私です、ブウキエフです、急病人をつれて来たから早くあけて下さい。』といふさわざです。

『御病人はお父様かな、それともおかみさんかな。』

『人間をつれて来たんですよ先生、早くあけて下さい。』

『ハアン左様か、どれ／＼。』

と、ドアをあけると、少雪のかゝつたボロ／＼の案山子をついだブウキエフが、バサ／＼とはひ

のでも平氣で喰べてゐます。そのくせ食當りで寢込んだといふ噂もつい聞かない位ですから。

クウキイ先生が退くつで困つてゐると、村のブウキエフといふ豚がやつて来ました。

『オホン、一つ拜見しませうかな。』

『先生をいっだけはまつ平です、私は病氣で来たのぢやないの。』

『いやお錢はいりませんぢや。何も商賣で診るわけのものではない。あんまり長く診ないでゐますとな、その、私の耳の方がきかなくなる、そこで一寸お前さんの體が貸して貰ひ度いと云つとるのぢや。』

『大切な體を先生、おもちやにされちやア第一親父にもすまないわけですからね。なにそれなら今に恰好な奴をつれて来ますから今日のところだけはまあ御かんべんを願ひますよ。』

『ハアン左様か、だがまあそんなけちな事を云はないでぢやな、一寸脈だけでえゝのぢやから、どれ

り込んで来ました。

「御病人とおつしやるはこの方ぢやな。」

「へい先生、それがその、どうも病氣の様にもあり病氣の様になし、その處をその、先生に見ていただき度いので。」

「オホンよろしいぢや。」

クウキキイ先生は出来るだけえらさうに、まづ脈を見て、聴診器を當て、一寸小首をかしげて、

「これはいけませんぢや。」

ブウキエフは一寸いやな顔をしました。

「大そうな下痢を起して居られる様ぢやな。」

クウキキイ先生はひよつと案山子の首のあたりを嗅いだ時、ブウキエフに背を向けてひとりニヤリと笑ひました。

實は、まだ青くて小さい南瓜の落ちたのに、紙をはりつけて顔をかいたのがこの案山子の首なのです。クウキキイ先生は妙に唾ばかり呑みはじめまし

た。

「この御病人は御親類の方ですか。だがお前さん、心配は無用ぢや。今晚はしておいてあげますぢや。ゆつくりとな。」

「でも先生、今晚の内にもとの處へ立て、おかない大變です。私は泥棒になりますからね。」

と、ブウキエフは案山子をかつきはじめるので、「おつとつとつと、そいつを持つて行かれては、その、どうも一寸、なにもう冬はこの人も田の中に立つてゐなくともよろしいぢや。」

と、漸くのこと引とめて、うまくブウキエフを歸してしまひました。

ストーヴに當りながら、ちつぽけな青い南瓜をうまさうにムシャ／＼食べてしまつてから、ふと氣のついたことは、さて／＼首のお代りをどうしたものだらう……といふ心配でした。ところがなか／＼うまい智慧は出て来ないので先生は、「さてこれは外



の案山子を探してくるに限る』といふことになり、寒い小雪の中をトボ／＼と探し出かけてまわりました。どうせ冬の今頃案山子の見つけかき様がありません。もう足が冷め度くなつて、さすがに名高いクウキイ先生が今にも泣きさうになつてゐると、折よく向ふからお使ひの歸らしい子供が一人提灯をさげてやつて來ました。子供は先生の話をすつかり聞いてから、

『そんなこと譯はないよ君、僕が案山子になつてやらア。どうせブウキエフといふ奴受取つたらもとの田の中に持つて行つて立てゝおくといふのだらう。それぢやその田の中から僕は歸つてゆくだけさ』

クウキイ先生は涙を流して喜びました。

『何分頼みますちや、何分頼みますちや。』

お話變つてこちらはブウキエフ、實はさつき田の呼を通じて、そこに立つてゐた案山子の首からふと

南瓜の匂ひを嗅いだので、『こいつはしめた、だがまてよ、あんまり見すばらしい姿だ、もし流行病でももつてゐたら喰べるのも危い。あゝさうだこの間の約束がある、クウキイ先生の處へ持つて行つて診て貰はう。そこで無病だと云つたら御馳走になるとしよう。』と、こんなことをきめてかつぎ込んだのを、下痢を起しと云はれて一寸がつかりしたが、今晩なほしておくと聞いて、又すつかり安心して唇をなめつりながら家へ歸つたのでした。そこで夜の明けるのを待ち切れないで又先生のところへやつて來ました。

『先生先生!! 病人はどうですなア、お腹は止まりましたか。』

『止まりましたちや、手際は見事のものぢや。アハン。』

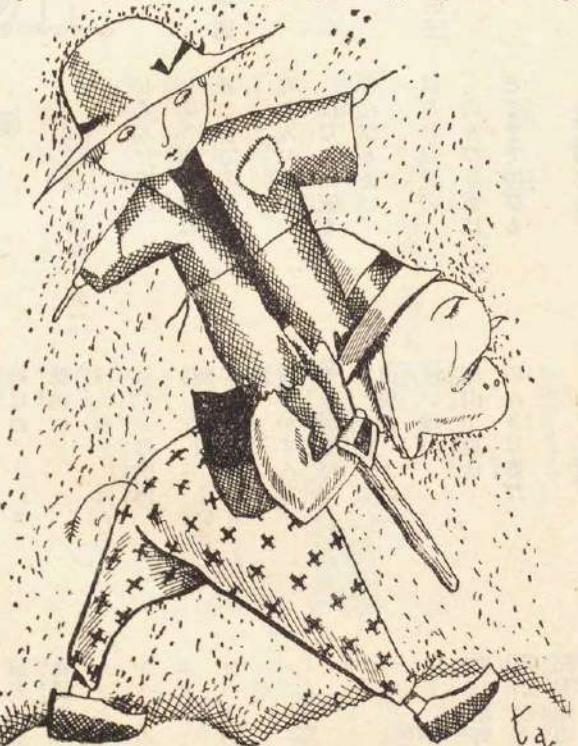
子供は破れ笠に『ぼろ』を着て、すつかり前の案山子になりすましてゐました。ブウキエフは大急ぎ

めるものでないなア。匂ひがすつかり抜けてしまつたわい。』

ブウキエフはいきなり案山子をはふり出したまゝ家へはひつて寢てしまひました。

お父さんは子供の歸りのおそいのを心配してゐましたが、やがて歸つてこの話を聞くと家中大笑ひでした。

(おしまひ)



でその子供の案山子をついで、よだれをタラ／＼垂らしながら家の方へ走りました。けれど、もう喰べ度さにたまりかねて家の前でそつと肩から案山子をおろして、首のところをニコ／＼しながら嗅ぎはじめました。

『おや?』

グービグービと『のど』を鳴らしながらブウキエフは一生懸命に嗅いでみて、すつかりしよげてしまひました。

『あゝあゝまづいことをした。南瓜だけは下痢を止



童 謠

野口雨情選

(大人篇)

落 葉

東京府 北千住 吉田 正三

からく落葉は
日和下駄
ころんで齒かくな

けがするな

雁

名古屋 東陽町 島本 夫二

ならんだ雁の
のんびり首は
どこまでのびる

ならんだ雁も
はなれた雁も
のんびり長い

はなれた雁の
のんびり首は
どこまでのびる

臺灣の春

臺北市 中島 光葉

峠はね よいさ

緋桃が

ほんろり ほんろり

きれいな吹雪

望けばね よいさ

青田が

廣々かすんで

千里が原だ

山鳩が よいさ

はいはい

海山千里は

のんきな春だ

落 葉

日本橋區 小傳島町 宮崎 輝城

おててつないで
母様と

おまゐりすんだ

かへりみち

カサカサ落葉も

がへりみち

蜀黍畑の

お月さん

廣松市 田中村 中村ひさし

廣い裾野に

風が吹く

蜀黍畑の

お月さん

畑にちろく

こほろぎが

小さい聲で

ないてます

月のうさぎ

關 西 大場 繪津

三日月様は

なせ細い

もちつき兎は

なせぬない

三日月様には

なせぬない

お月の お月の

小うさぎよ

どこの お山へ

とんでつた

綿 虫

とんできた

京都市 關田町 三須 英三

綿虫ア綿一貫

しよつてく

とんで来た

綿一貫おくりやんせ

横町の親なし

またないた

赤帽子

高知市 菅屋町 羽田 敬和

ピロピロピロ

ひよこピロピロ
お道がせまい



ちよつびり帽子は
赤帽子

今朝着たばかりの

赤帽子

風が吹きや帽子が

氣にかゝる

ちよつびり帽子が

ナヨと氣にかゝる

ピロピロピロ

ひよこピロピロ

お道がせまい

ひるの風

青森縣 八戸町 和泉幸一郎

小雨でぬれた

背戸のねむ

小麦畑は

ひるの風

ホシローヒル

(蛸突きの巻)

真田幸雄
七郎画

オ正月ニ
ナツテハカニ
ボク
アツタカイネ
今日アタリ
タコノヤツ日向
ボツコシテ居ル



2

一番目ニシテヤハ
僕ガクツテニ番目
ニシテヤハ
オ父サン
ニアゲテ



4

オコノヤ
ガシラナイ
マツテヤ
ヨシ



3

三番目ニシテ
ヤツハコマルナ
オ母サンハタコガ
キライダカラ
チーイポチニマツマエ



5

コノ
意え



6

ナールホト
一番目ハ
大キイゾ

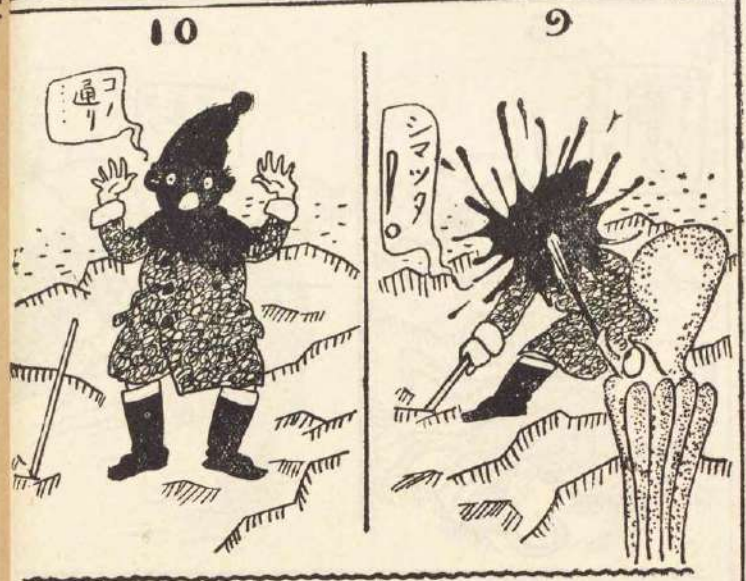
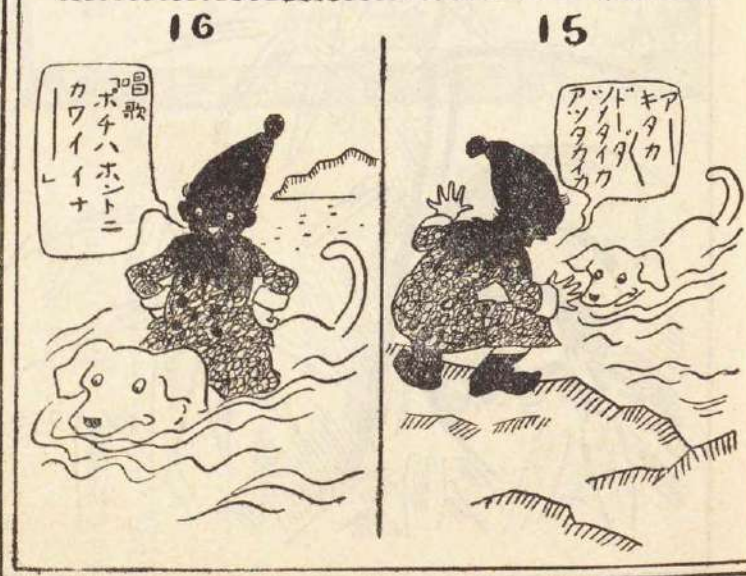


7



8





かぐや姫 (推薦)

小西行夫

こんこんこ敷の
かぐや姫 かぐや姫
お姫は子供と遊びたい
こんこんこ敷にや
誰が来る 誰が来る
誰も来なくて竹のなか
こんこんこ敷の
かぐや姫 かぐや姫
お姫は一人で遊んでる



四四



人
米屋の権太郎
権太郎の妻
米屋の正兵衛
狐
所
第一場 権太郎の家の入口
第二場 正兵衛の家の入口
第一場 権太郎の家の入口
狐。 こんにはは...こんにはは...
(狐が出てくる)
権。 だれだい。(大きな聲で叫んで出てくる)
おやア、お前かい、なんの用だい。
狐。 腹がへつてゐるもんですから、正兵衛
ぢいさんのとこの鶏を、取つてたべてや
らうと思ふんですよ。
権。(笑つて)ウン、そりやよからう。おれは

四五



正公が大きらひだ、お前も知つてらう。

狐。え、知つてますとも、ですからね、私に一寸手つだつて鶏を取らして下さいな。

権。おれに何ができるだらう？

狐。私のからだのマッ白になるまで、粉をふりかけて下さるんです。すると鶏の奴、私を米屋だと思ふでせうから。

権。ナールほど、ちや粉を取つてくるせ、お待ちよ。

狐。(權太郎家の中へ走り去る)

権。ちや、お前の身體を眞白にしてやらう、誰が見ても米屋らしく見えるやうにしてやらう。(狐)

に粉をふりかける) ハ、ハ、正公のこの鶏は、お前と正公とをまぢがへるせ。さ、行つてこいうんと食つてやれ。(狐出てゆく)

あ、好い氣持だ、おれは正公が大きらひだ、正公の鶏だつてきらひだ、狐の奴に食はれてしまつたら奴いまだ、あハ、ハ、

(權太郎家の中へ入る)

妻。權太郎さん、權太郎さん、きて下さい。

権。ナンド、ナンド。

妻。うらの鶏が狐にやられましたバカを云へ、正公の鶏がやられたんだらう、うつふつふと笑さ

い、え、い、え、うちのがや



られたのですよ、草の上に死んでます。行けば分りますよ。

(權太郎びつくりして走り去る)

(おかみさんをついて入る)
權太郎の聲。あッ、こりやたいへんだ、うちの鶏を……うちの鶏を……ワアワア。(ト泣く聲)

第二場 正兵衛の家の入口

狐。(狐出る)
ごめん下さい。ごめん下さい。

正。(出てきて) どなたです？ おやお前さん。何か御用かね。

狐。お腹がすいてたまらないんです。一つ權太郎さん、この鶏でも食てやらうと思ふんです。正。それで、なせ私のうちに來たのだい？

狐。あなたは權太郎さんがおきらひでせう？

正。よく知つてゐるねえ。知つてますとも一寸私に手つだつて鶏をとらして下さい。

正。私に何ができるだらう？

狐。粉をふりかけて下さい、私がマッ白になるまですると鶏の奴私を米屋とまちがへますから。

正。ナールほど、旨い考へだ、お待ち。(正兵衛家の中へ入る)

狐。粉を取りに行つたな、あは、は。

(正兵衛持つて出てくる)

正。行つてしまへ、こいつめ。

狐。えつ、なんですつて？ 私はこの權太郎の鶏をたべますよ。



正。ウン、然しほんとうは、この鶏を取るつもりだらう出てゆけ、出てゆかないとなぐるぞ。
(狐逃げてしまふ)

おしまひ

シバキはやりやう一つで、面白くもなり、つまらなくもなりますから、やりやうを一つをしへてあげます。一度この通りやつて、それから、いろ／＼工夫して下さい。此の『二人の米屋』は、元はドイツのおはなしです。それをアウグスタ、スチーブンソンといふ人がアメリカの子供達ができるやうにと、シバキに直したものです。それを私が、また日本のみなさんにできるやうにと直したのです。

此のシバキは二幕あります。然しかういふかんたんなシバキは、背景をこしらへたり、道具をこしらへたりしない方が面白い。二幕あるからと云つて、途中で幕を止めることもありません。からかみをあけたり、しめたりして、それで家の中へ入る、出てくるといふふうでいいのです。入口の戸もなんにもありません。第一場では権太郎が出たり入つたりする入口と狐が出たり入つたりする入口と二つあります。権太郎のおかみさんは、狐と同じ所から出いゝのです。第二場では正兵衛さんの出たり入つたりする所と、狐の出たり入つたりするところと、やつぱり二つ入口をつけます。



正兵衛さんも権太郎も着物を裏返しにきて、前かけをしめます。正兵衛さんをおちいさんにする面白。正兵衛さんは手拭で頬冠りして出ます。然しどろぼうのやうな、頑冠りではいけません。権太郎は手拭を腰にダラリと下げます。これは怠け者らしく見せるためです。正兵衛さんが頬冠りをすのは、一生けんめい働いてるらしく見せるためです。頬冠りをするわけは、米屋ですから粉が身体中かゝるから防ぐのです。権太郎は始め出てくる時、煙草を手につけてきても面白い。但し吸つてはいけません。又、二度目に出てくる時は持ちません。二度目の時は、どんぶりか何か持つて

きます。ほんとうに粉をふりかけなくていいのです。綿をちぎつて振かけていいのです。又は白いきれを首にまいてやつてもいいのです。一ぱいに白くなつた氣持で。狐はお面をこしらへてかぶつて下さい。狐は権太郎に話す時より正兵衛さんに話す時の方を、ていねいにやります。これは正兵衛さんはなか／＼欺されない、利口な人だからです。狐も用心して話しかけるのです。——此のシバキを稽古なする前に、役を分けて、大きな聲で、自分々々の役の言葉を讀んで見て下さい。残念なところは如何にも残念らしく、欺すところは、如何にも欺すやうに。すると、きつと面白くやれます。



江戸奇談
お寶賣り
西川喜平

五〇
江戸の小石川水道端に、神影流
劍道指南の看板を出して、劍術の
道場を開いてゐる、黒坂武左衛門
と云ふ先生がありました。
もとは北國邊の浪人でありまし
たが、五六年前に江戸へ上つて、
此所へ道場を開いたのでした。
この先生は、劍術が上手ばかり
でなく、捕り物早繩に妙を得てゐ
ると云ふ評判なので、一時は朝か
ら夜まで、竹刀の音の絶え間のな
い程の繁昌でした。
ことに早繩は、この先生の工風
になつたと云ふので、内々お上の
役人などの中に、教へを受けに來
る者もありました。
ところが、その繁昌も、三年ば

かりは續きましたが、追々と弟子
が減つてしまつて、道場が淋しく
なつて來ました。

それはどういふ譯かと云ふと、
この先生に悪い道樂があつたから
です。その道樂と云ふのは、大酒
を呑むのと、賭事の勝負が好き
なことでした。

それで風體の賤しい者などが、
道場へ出入りするやうになりまし
たので、身分のよい人や、心ある
弟子は、だん／＼足が遠くなつて
遂に來なくなりまして、道場
はげつそりと寂れてしまひまし
た。

ある年の暮、もう五六日で、正

月にならうと云ふ時でした。

外では春の支度の注連飾りなど
に忙がしく、餅搗きの音も賑やか
に、往來の人足も繁くなりました
が、この道場は、相變らずの閑で
した。この日も、一とわたり稽古
が済むと、先生は弟子の五六人と
酒を呑みはじめました。

上座にある、色の蒼黒い、瘦形
で丈が高く、眉毛の濃い、目のギ
ヨロリとした、年の頃は四十五六
と見えるのが、この道場の先生、
武左衛門で、前に車座に並んでゐ
るのは、弟子達でありました。

「先生、しばらく噂のなかつた辻
斬りがまたはじまつたさうです。」
「ムム、二三日前にそんなことを

聞いた」

「昨夜も揚場で殺られたさうです
餘程の手利きと見えて、たつた一
と打ちにやられて たさうです。」
「それは、中々の腕利きと見える
な。」

弟子達はそれからそれと辻斬の
噂をしました。

弟子の甲「この間赤門前で、その
奴らしいのを見つけ、手先が大勢
でかゝつたところが、とう／＼手
に合はず、逃がしてしまつたと云
ふ噂だ。」

弟子の乙「その働きの素捷い
には捕り方の役人も舌を捲いたと
のことだ。」

弟子の丙「そんな奴は先生でも出

て捕へなければ、中々手先などの手には會ひません。」

弟子の甲「先生一とつその奴を捕へて、世間へ腕前を見せてやつてはどうです。」

先生「ムム奉行でも頭を下げて、頼みに來たら、出てもやらう。」
武左衛門は大きなことを言つてゐました。

この話の辻斬りと云ふのは、二月程前の冬のはじめ頃から、山の手の淋しい場所で、夜更けに、金でも持つてゐさうな者が通りかかると、物陰から黒の頭巾で面を包んだ武士が現れて、物をも言はず、抜き打ちに斬り倒して、懐の金や持ち物を盗るのですが、その

盜賊は餘程の腕利きと見えて、大抵の者は、一と刀で殺されてしまふと云ふことでした。それでだんだん山の手から下町へかけて、一

昨日の晩は何處へ出た、昨夜はあそこでやられたと、毎夜のやうになりましたので、奉行所付きの捕り方の役人も、苦心をして捕へようとしたが、中々に手に會はず、捕へることが出来ませんでした。

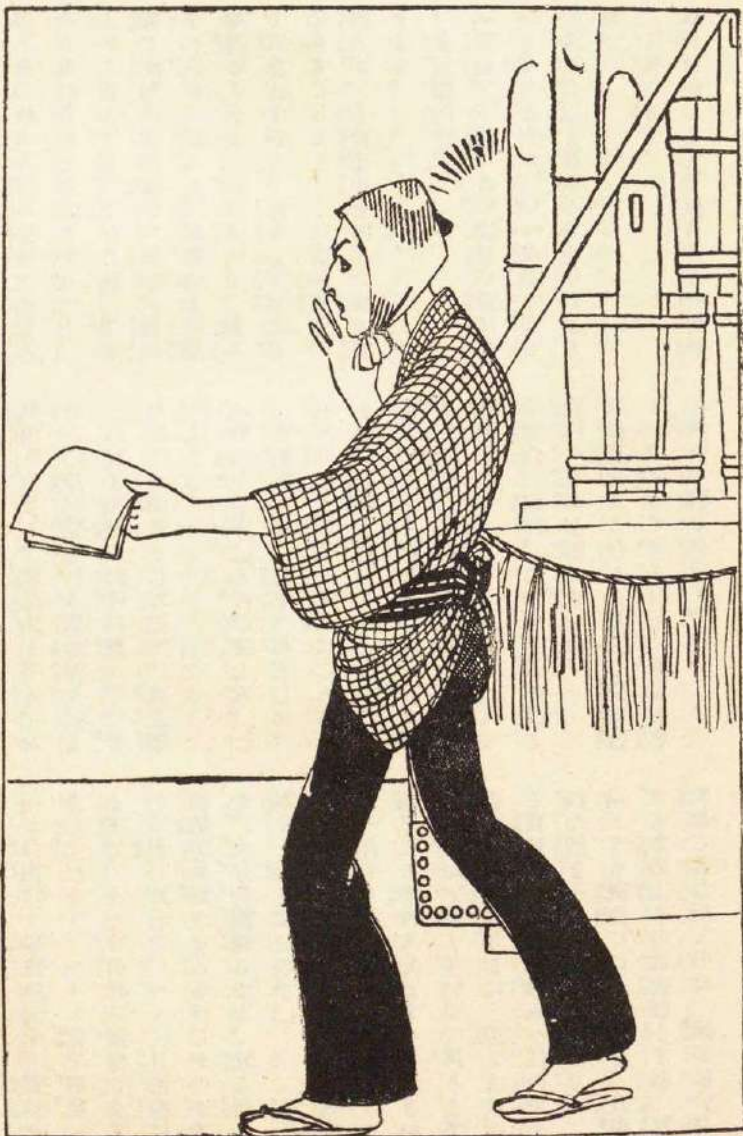
その中に捕り方の手配りが嚴重のせいか、一時バツタリ辻斬りの噂も止まりましたが、また年の暮れになつてはじまつたので、江戸市中の大評判になつて、山の手も、下町も、淋しい場所は、夜になる

と、人足も絶えるやうになりました。やがてその年も明けて、正月になりました。

淋しい武左衛門の道場へも春は來て、鳥追ひの三味線や、萬歳の鼓、獅子舞の太鼓の音も陽氣に聞えて、武左衛門も懐工合がよいと見え、氣も暢びりと、よい機嫌で元日から酒浸りになつてゐました。恰度二日の夜になりますと、

『おたから〜、寶船々々。』と、勢のいい賣り聲をして、商人が多勢通りました。

この寶船と云ふのは、正月二日の夢は初夢といつて、寶船に七福神の乗つてゐる畫に、『ながきよ



のとをのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」と、上から讀んでも、下から讀んでも同じ文句の歌を書いた紙を、枕の下へ入れて眠ると、縁喜のよい夢を見ると云ふ、云ひ傳へて、家々で買ひますので、毎年正月二日の夜になると、この寶船賣りの商人が、大勢市中を呼んで賣り歩きます。

武左衛門は、
「寶船か、暮には毎晩悪い夢ばかりを見てゐたが、いゝ初夢を見たものだ。」と獨りごとをいひました。

と外の方で、
「おたから、縁喜のよい寶船

辨天さまでも、大黒さまでも、お好みの夢が見られる寶船々々。」とこれはまた變つた呼び賣りで、面白さうに聞きましたので、武左衛門は、
「寶船や。」と呼びました。

寶船賣りは、窓下へ來ました。

「はい、寶船の御用はこらさまで、有難う存じます。よいのを選つてさし上げますから、おあかりを拜借。」と言ひますので、武左衛門は、
「面白い奴だ、こつちへ入れ。」と

表のくぐりを明けました。

「御免をかうむります。」と寶船賣りは、入つて來ました。見ると色の黒い小柄な男です。

「お目出たう御座います。寶船をさし上げます。はいお代で御座いますか、イエ口明けて御座いますから思しめして、へ、旦那様は御酒が大好きで入らつしやいますか。大分御機嫌さまで、私も酒とさくとも目がないので。」

「ナニお前も酒が好きか、そんな一杯呑め。」

「どうも恐れ入ります。さつきから咽喉がグビ、いつて居りますので、御遠慮なしに、頂きます。」と寶船賣りは、湯呑みへ注いでくれた酒を一口グツト呑んで、

「どうも減法にいゝお酒で、旦那さま方の上るのは違ひますね。私共はこんないゝのは、減多にいた

だけません。」と言ひながらまた一口呑んで、

「キユツと腹へ浸みわたります御馳走さま、有難う御座います。口明けからいゝ景氣になりましたへ、左様なら、有難う御座います。」と表へ飛び出して、

「おたから、寶船々々」と大聲で呼びながら、行つてしまひました。

二三日たちますと、武左衛門の道場へ、また寶船賣が來ました。「このあひだは有難うございした。此方さまで口明けを願ひましたので、お蔭さまでスツカリ賣り切りました。よい儲をいたしました。チョイトお禮に伺ひました。」

と門から聲をかけて行きました。

それから、二三日目ぐらゐに、門を通つたと言つては寄り、近所へ來たと言つては寄りますので、だん／＼懇意になりまして、時には酒の相手をして、世間話などを面白くするので、武左衛門もいゝ呑み友達が出来たと喜んで、顔を見ると酒を呑ませました。で、寶船賣りの方も、たまには、酒の徳利を土産に下げて來るやうになつて、しまひには、案内なしに上り込んで、家の中の手傳ひまでして働きますので、武左衛門は、調

法な男が來たと喜んでゐました。それで武左衛門がこの男の話しを聴きますと、名は勘七と云つて

場末の本所邊に住んでゐる獨り者で、平常は人の使ひ走りを頼まれり、小買物の用を足したりして暮らしてゐると云ふことでした。その中に二月になつて、梅の花もボツ／＼咲き出し、龜井戸や、向島の梅屋敷の噂をするやうな陽氣になつて來ました。

ところが勘七の姿が、十日ばかり見えませんので、武左衛門は心淋しく思つてゐますと、ある朝、勢よく、勘七は大きな聲で、
「先生お早う。」と言ひながら入つて來ました。

「勘七どうした、身體でも悪かつたか。」

「イエ先生、私の親類が松戸の在

にありますので、そこに祝事があ
りまして、喜びかた／＼手傳ひに
まゐり、それで御無沙汰をいたし
ました。これは田舎料理でお口に
は合ひますまいが、持つてまゐり
ました。それからこの酒は兩國へ
廻つて「四方」で買つてまゐりまし
た。久しぶりで御一しよにいた
かうと、楽しみにして來ました。」
と言つて、料理の折と酒の徳利を
出しました。

「イヤそれは氣の毒な、こんな心
配をしてくれば困る。」と言ひな
がら武左衛門は待つてゐた勘七が
來たので、大へんに喜びました。
「それに先生、耳よりの話があ
るので、これは先生にウント、御

馳走をして貰はなけれやあならな
いこつてす。」
「大分旨さうな話したが、何んな
事だ。」

「まア呑み乍ら、ゆつくり話しま
せう。」と、これから二人で呑みは
じめて、だん／＼酔つてきました。
「勘七、耳よりの話とは何んだ
氣が／＼りだな。」

「先生かういふ譯です。松戸の親
類の息子ですが、百姓のくせに武
藝が好きなので、何んでも千住邊
の道場へ時々出掛るやうですから
私がこつちの先生の話しをしてわ
つしの親分は日本一の先生でと。」
「日本一はいゝか親分は困るな。」
「劍術が上手な上に、早繩の名人

「時に先生、その息子に話したん
だが、わつしは先生の劍術は見た
が、早繩は見ないんで、一とつ見
せて下さいな。」
「見るつて繩をかける相手がな
い。」

「ナニわつしがかりますよ。ち
よいとやつて見せて下さい。」

「そんならかけてやるぞ。」と、武
左衛門は、酔つたまぎれに繩を取
り出し、手早く勘七の身體をすつ
かり縛りました。

「先生、なる程旨いもんだね。驚
いたもんだ。しかし何んだかゆる
いやうだな。」

「それは型だけ見せるので、ゆる
く縛つたんだ。これから最期の一

トベが肝心なんだ。いゝか。」と、
グツとぐましたので、勘七は
「アツ痛い／＼、先生酷いことを
するね。」

「アハ、これが最期の一トベと
云ふんだ。」

「なにしろ、エライもんだ。しか
し先生、これやあ、わつしにも、
出來さうだが、チョイト教へて下
さいな。」

「教へてやるのはいいが、繩にか
かる者がない。」

「先生のお身體をちよいと拜借し
ませう。」

「馬鹿を云ふな、己は繩にかゝる
のはいやだ。」

「いやだつて、稽古だからいゝち

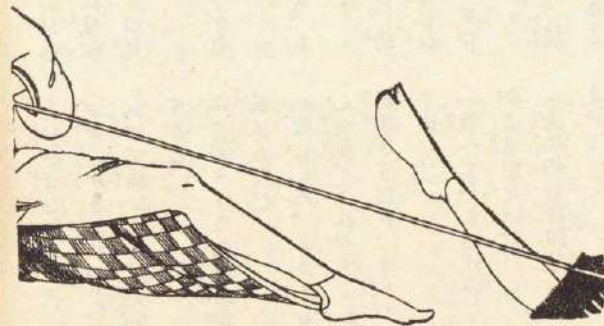
だと言つたら、そいつは面白い、
是非お弟子入りがしたいつてんで
何にしろ、彼の近在では指折りの
大盡なんぞ、先生が氣に入りやあ
道場ぐらゐに建て／＼くれますぜ。」
「大分話が旨過るではないか。」
「旨すぎるなんて、もつといゝ話
しがあるんです。明後日頃、その息
子と、同じ道樂の連中を一しよに
此所へ伴れて來るんで：いよい
よ寶船が正夢になつたんですぜ。」
「ナニ明後日此所へ來るのか。そ
れは有難い。」と、武左衛門は大へ
んに喜んで、前祝ひだと言ひな
から、酒を澤山に呑みましたので、
すつかり酔つばらつてしまひまし
た。

やありませんか、ねえ先生。」
「それやあ己の身體を貸してもい
いが稽古なら明日でもよからう。」
「いけない／＼、明日松戸へ行つ
て、明後日引張つて來るんで、福
の神を伴れて來るのに、話しが出
ても困るんだから教へて下さいね
え先生：それぢやあ、福の神が
來なくつてもいいんですか。」

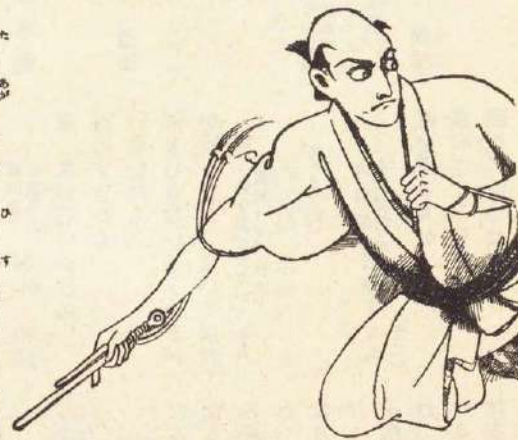
「氣早な男だな、仕方がない、か
けて見ろ。」武左衛門は、稽古とは
云ひながら、繩にかゝるのはいや
だが、今勘七の機嫌を悪くして
は、大切な弟子を取り損ふかも知
れぬと心に思ひましたので、盡々
承知をして自分で一々教へながら
繩にかゝりました。

勘七は、教はりながら、不器用な手つきで縄をかけてみましたはどうにか、かうにか縛つてしまひ

ました。
『先生なる程面白いもんだ、よく縛れるもんだね。』



五八
『それやあ、己がデットしてゐるからだ。動いたら誰が来たつてかけられるものか。それに最期の一とべは教へたつて容易に出来ない。この通りだ。』と、武左衛門は左右の手を振つて見せました。
『口惜しいなあ、出来なくなつてやつて見ますぜ。』
『やつて見ろ、これが出来たら、首でもやるぞ。』
『エッ先生の首、有難い。』と言ひながら、勘七は武左衛門の後へ廻つて、『ヤッ!』と一ト聲、掛けますとぐつと縄が緊りました。
武左衛門は『あッ!』と驚いて、『こら勘七!』と叫びましたが、さつと顔色が變つて、



『やられたッ!』と立ち上りました。

勘七は、懷から朱總のついた十手を出して『武左衛門御用だ、神妙にしろッ。』と、縄尻を取つて

引き据ゑようとした。
武左衛門は、兩手の自由は利きませんから、
『なにッ。』と勘七を蹴倒さうとしますと、勘七は武左衛門の足を拂

つて、逆に捻ぢ倒して、呼ぶ子の笛を『ビリ、ビリッ』と、吹き鳴らしました。すると、表、裏からドヤノ!と入つて来たのは、商人や、職人の風をした、捕り方の手先で、とうとう武左衛門は、奉行所へ引かれて行きました。
やがてお奉行の調べで、辻斬りの盗賊は、武左衛門の仕業と判りました。程なく重いお仕置になりました。

勘七と云つたのは、實は源七と云ふ捕物の名人で、寶船賣りの謀で、難なく武左衛門を召し捕つた手柄によつて、澤山の御褒美をいたゞき出世をいたしました。

(をばり)



幼年詩

若山牧水選

火事(賞)

島根縣小 岡崎 澄衛

ポンプがきたぞ
はしがきたぞ
とびぐちかついだ
父さんもきたぞ

評 澄衛君は何を獨りで感無
つてゐるのだ(牧水)

たいこの音(賞)

福岡縣下 川口 國雄

なんだかたいこの
音がする

草

山形縣樺 山川 平一

にいさんが草をかる音
しづかなたんばにきこえ
る

午後の日かんかん光つて

郵便屋さん

千葉縣八榮 藤代 正良

郵便やさんが
かうもりかぶつて
そろ／＼ゆく
ぬれた足袋はいて
そろ／＼ゆく

もす

千葉縣八榮 野瀬 眞一
第一校尋六
ないた／＼もすは
ななめに飛べよ

だんだんたいこに
なつてきた

評 「だんだん太鼓になつて来
た」(素庵々々(牧水))

こほろぎ(賞)

福岡縣下 塚本 松江

夜 私が石のかげの
石のすきから
のぞいたら

何もしらないこ ろぎが
かほを見せてないて居た
評 「風を見せてないてゐた
素庵々々(牧水)」

ざくろ

山梨縣 田中すゐみ
小淵澤村 (十二)

道を通る人が
家のざくろを
眺めて通つた

コスモス

井戸端のコスモス
私の洗面器に
うつつてる

評 いかにも女らしく優しく
美しい(牧水)

たるみこし

千葉縣久留 太田 貞三
里枝尋五

たるでこさへた
たるみこし
みんなでもめもめ
わつしよ／＼
たるでこさへた
たるみこし
子供どうしで
わつしよ／＼
たるでこさへた
たるみこし

六〇

おとさぬやうに
わつしよ／＼

評 もひとつおまけに、わつ
しよ／＼(牧水)

夢

東京府千 近藤 國男
駄ヶ谷町 (十四)

弟は夢を見て
まだ續きがあるかと
聞きました

評 あんただつて時々さう思
ふでせう(牧水)

濡れ麥の匂ひ

東京府 平林 武雄
大崎町 (十五)

濡れ麥の匂ひは
よい匂ひ
夕方の道に
月は出てくる
評 子供はなれのした詩です
(牧水)

のぼり

香川縣米 三浦 繁雄
上校高一

公神さんの
のぼり
朝露で重さうに
一寸も動かない

お天とさん

山梨縣樺 龜岡 しげ
澤校尋六

竹やぶへ

日がさした

夕方まで

日がさしてゐた

お月さま

山形縣樺 岡崎庄之助
澤校尋三

すず蟲が
なき出した
お月さまは
とほくに見える



風も吹かない
しづかな時に
柿の葉が

柿

福岡縣下 中村クニエ
妻校尋三
うちのひまはり
うつくしい
ちらうとしてゐる
ちらないよ

東京府 伊藤 駿二
目黒町 (十四)

柿の實が風船だつたら
柿の木は
飛んでちやつたゞらう

柿の葉

山形縣樺 高橋 きん
澤校尋三

ばたばたおちた
さびしいな

出目助さん道中記

(篇 長)

川 霜 島 三



六二

「どうせ、馬方をするなら、そんな跛の馬なんぞ索かないで、何故、もつと好い馬を飼はないのだ」仲間の馬子たちは、出目助さんの馬を見ますと、よく然う云つて、たづねました。一つは、からかふためだったのです。

すると、出目助さんは、いつもの通り、にこ／＼して、『でも、「ごん」は、筋目が好いのだよ。膳所の殿様の乗馬だったこともあるのだからな』

と、定つて、然う云ひました——別に、それを自慢しようといふ積りではなかつたのですけれど。

「いくら殿様を乗せてゐた馬でもな、街道筋に出て、駄賃馬になれば、駄賃馬だよ。跛では、馬一匹の役には立たないぢやないか」

馬子たちは、然う云つては、「ごん」に、けちをつけました。しかし、出目助さんは、なか／＼、そんな

ことに凹まされてはゐませんでした。

「だけれどもナ、おいらは、子どもだよ。おつゝ荷物も、半分つけて、駄賃も半分……それでも怠けないうで稼ぐのでナ、結構、毎日「ごん」に、豆を五合と、麥を一升、飼料に入れて、たべさせてゐるよ。見なされ！ この毛なみを……ほら、てらてらと、まるで天鵝絨のやうぢやワ」

さう云つては、出目助さんは、やゝとすると、その馬の鼻頭を撫で、遣つてゐました。それほどに、出目助さんは、その馬に親しんで、そして、可愛がつてゐました。

出目助さんは、その馬に「ごん」といふ名をつけてゐました。そして、飼料でも、手入でも「ごん」がまだ、膳所のお城のなかにゐた頃と同じやうにして、それは／＼大切にしておりました。で、「ごん」に見えますと、昔と違つたことゝ云へば、只、その厩が、だいふ汚くなつたことゝ、それから、毎日毎

日、街道筋に出て、ちやらん／＼、腰の鈴を鳴らしながら、荷物を擔つて歩くだけのことでした。

けれども、出目助さんは、「ごん」の昔のことを考へて、それを、真ん中に可哀さうだと思つてゐました。そして、「ごんよ、お前は運が悪いな。跛にさへならなかつたら、今でも殿様を乗せて、威張つて歩いてゐられたのだが、こんな駄賃馬になつて了つては、爲様がないな。だが、辛抱しろよ、おいらが、一生懸命、大事にして遣るからな。お前も、獨りばつち、おいらも獨りばつち……いつまでも／＼、おいらが大人になつても、一緒に居ようよ」

と、しみ／＼と、「ごん」に云つて聞かせてゐるやうなこともありました。さうして、豆や麥、藁、枯草の飼料の他に、夏は、朝のうちに、「ごん」の好きな青々とした草——薄やなどを、露のまゝに刈つて來て、たべさせたり、また、夕方になると、厩に蚊いぶしをして遣つたり、冬になりますと、厩へ、新

ら弓で射て獲つてゐらつしやいました。するうちに、「ごん」があんまり燥つて走つたので、岩角に躓いたと思ふと、前へ踏るやうになつて轉びました。けれども、殿様は、馬上にかけては、なか／＼の達人——「ごん」が踏つた途だんに、ヒラリと飛下りて、格別お怪我はありませんでしたが、「ごん」は、大事な前足を片一方、足首のところを挫いて了ひました。で、もう、乗馬のお役には立たなくなりました。

それから、二年ほどの間、「ごん」は、膳所のお城のなかの厩で、『捨飼』になつて居りました。そして、毎日、たゞ、秣だけをたべて、それは退屈して、それは淋しい日を過ごして居りました。

すると、出目助さんが——それは、十二年のことでした。が、「馬借」と云ひまして、今で申しますと、恰度運送屋のやうな家でございます。その「馬借」の馬子に雇はれて、一人のお祖母さんに、たい

らしい薬をどつさり入れて、寢床を暖くして、そして、始終、その薬を取替へて遣つたり、それから、晩方に歸つて來た時などは、うんと湯を沸かして、大きな盥で、體ぢうを洗つて遣つたりして、それは／＼、手の届くだけのことをして遣りました。それで、「ごん」は、跛でこそあれ、いつも綺麗で、そして、肉づきなども、しつかりして、元氣の好いこともすてきでした。

まつたく、「ごん」は、誰が見ても、好い馬でございました。どんな殿様が、お乗りになつても恥しくない馬でございました——跛にさへならなかつたなら……

それは、ある時、「ごん」の以前の殿様が、「ごん」に金覆輪の鞍を置かせて、それにお召しになつて、山狩においでになりました。そして、谷や、崖や、河や、森のなかを乗廻して、勢子どもに、狐や兎を追出させては、それを小氣味の好いほど、片はしか

そう孝行してゐるといふことが、膳所の殿様のお耳に入りました。それから、その小つぽけな馬子めが、すてきに、聲が、きれいで、馬子唄が上手だといふことも、いつか、お耳に入れておゐでした。そこで、出目助さんは、お城に呼出されて、『格別、孝行のかどに依つて』と、いふので、御褒美を戴くことになりました。

——念のために云ひそへて置きますが、膳所のお城と申しますのは、琵琶湖と、近江八景とで名高い近江國、その八景の一つの粟津ヶ原のすぐ傍にございました。さうして、そのお城は、繪のやうに、きれいで、遠くから見ますと、お天主や石垣などが、まるで浮城のやうに、湖の上に浮んで見えるのが、名物になつて居りました。

この、古い「物語」にでもあるやうな、きれいな、お城の、つい近くに、番場村といふ、古い在所がございました。出目助さんは、この番場で生

まれて、そこに、小さな家もありました。そして、阿父さんも、やつぱり、大津の宿の「馬借」の馬子をしてゐたのでございますが、出目助さんが、七つの年に、東海道の草津宿と石部宿との間——その目川といふところの竹藪のおひかぶさつた街道で、何者にか殺されて死んで了ひました。この阿父さんの殺されたこと——これは、どうぞ、お忘れにならないで下さい。

二

當前ですと、この御褒美を戴きますのは、お役人に出されて、村の五人組の人たちが附添ひになつて、お奉行所へ参るのでございます。そして、三貫文位のお金を戴いて「下がれ」と、云はれて、歸るのですが、出目助さんだけは、「一人でお城に來い」とのお指圖でした。しかも、殿様が、御自分に直直、「御覽」になることになりました。もちろん、「お

目通り」とは違ひます。「御覽」になるだけのことでございます。で、殿様は、三尺ほど高いお座敷に、曲糸を引きよせて、坐つておゐでになりました。出目助さんは、お縁側の下の地べたに、蛙のやうに小さくなつて、縮こまつてゐました。

この出目助さんが、名の通り、出目で、恐ろしく頭でつかちでした。その剃り立ての青坊主のやうな頭に、野郎鬘が、ちょつとびりこと、慈姑の芽のやうになつて見えました。それに、少し、ちんちくりんでしたが、丸つちいほに、くり／＼と、よく肥つて、日焼けはしてゐても、その顔が、それは無邪氣で、愛くるしいのでございました。

殿様は、出目助さんを「御覽」になりまして、にこりにこりとお笑ひになりました。そして、「そちは、出目助か」と、おたづねになりました。

「へい」

と、ちと、頓狂ではありましたが、きさくに、大きな聲で、御返事をして、びよりと、頭を下げました……

が、それが、あんまり、勢いが好かつたので、地べたに、おでこを、打つつけて了ひました。そして、顔を上げたときには、額の眞ん中に、砂が、お饅頭ほど、くつついてゐました。

殿様は、また、にっこりとお笑ひになりました。

「そちは、馬子唄が、上手ちやさうなが、左様か」と、かう、追つかけて、おたづねになりました。

今度は、出目助さんも、まごついて了ひました。

どう、御返事申上げたら好いのか——それが、解らないで、キョトンとして、それから、もじ／＼してゐました。

すると、縁側のところに、上下をつけて、奴風のやうに、しやツちよこ張つて、坐つてゐたお侍が、「こりや……、御上意ぢやぞ。そちが、街道筋で、うたふ通りに、存分に、うたへば可いのぢや、

よいかな。遠慮は無用ぢや」

と、物やさしく、云つてくれました。

「殿様が、馬子唄を聞くなつて、をかしなこつた」と、出目助さんは、うつかり、さう云ひかけました……

が「殿様の御前だ」と、氣がつくと、グツと呑みこんで、「へい」と、云つて、うつむいて了ひました。そして、肚のなかで、「これは、どうも、少し具合が悪いぞ」

と、考へました。で、少し、てれて居りますと、

「どう致したのぢや、疾くうたはんか」

と、お侍が氣を揉んで、今度は少し、急立てるやうに云ひました。

「へい……」と、云つて、出目助さんは、一ぺん、殿様の顔を見ました。その眼には、もう「やるぞ」といふ決心が輝いてゐました。そして、その眼をお侍の方に向けて、「では、立つて、やつても、可うございますか」

と、たづねました。それが、きびくとして、出目助さんの、ふだんのまゝ——恰度「馬借」の親方にでも云ふやうな調子でした。

此の「ふだんのまゝ」が、不思議なほど、殿様のお氣に適りました。また、にっこりなさいまして、「可い……」そちが思ふやうにして、うたふがよい」と、お侍よりも、いつそ物やさしく有仰いました。

出目助さんは、すつかり安心して、無難作に立ちあがりました。そして、少し含羞みながら、うたひ馴れた馬子唄を、殆ど、ふだんの通りに、「坂は、照るく、鈴鹿は、曇る。土山、あひの。あひの土山、雨が降る」

と、うたひました。鄙びてはゐますが、シンミリとして、どつかに、人の涙が滲みこんでゐるやうな唄——それが、出目助さんの、きれいな聲に優しくうたはれて、聞いてゐるうちに、おのづと、ほろり、ほろりと、泣かれて来るやうに、思はれまし

た。

殿様は、曲糸に凭れながら、じつと、聞いておるでになりました。縁側のお侍も、殿様の後ろに刀をさへげてゐるお小姓も、うつむいて、じつとなつてゐました。そして、いづれも、出目助さんが、うたつて了つたときに、唘ッとしたやうな顔つきでした。

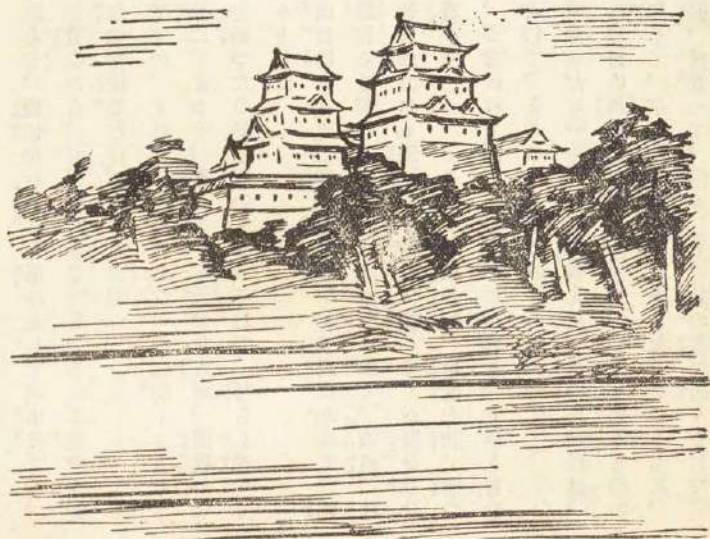
「ム……」と、殿様は、軽く、うなづいて、少らく何んとも有仰いませんでした。が、やがて、「もう、一度……」

と、お望みになりました。

出目助さんは、前よりも、一そう、氣輕に、やり出しました。まつたく、ふだんの通りでございました。それで、前よりも、少し聲が高くなりましたが、それだけまた「力」と「自由」とがございました。

「面白い！」

と、殿様は、感歎なさいました。そして、「もう、一度」と、お望みになりました。さうして、出目助さ



んは、都合、三度まで、うたひました。それで、少し、ガツカリして、また、縁側の下の地べたに、蛙のやうになつて、うづくまりました。

「褒美を取らずぞ。何んなりとも、そちの思ふ物を望め」

と、殿様は、いかにも愉快さうに、さうお言葉を下されました。が、あひにくにも、出目助さんには、その「思ふ物を望め」と、いふお言葉が、ハツキリと解りませんでした。

「へたな御返事をしてはならないぞ——出目助さんは、さう思つたものですから、『へえ……』と、お叩頭を一つしたきり、もどくして、少らく黙つて居りました。

『こりや、有難いお言葉やぞ。何んなりと、そちが欲しいと思ふ物を、疾う申上げるがよい』と、縁側のお侍がまた、親切に云つてくれました。今度は、出目助さんにも、よく解りましたそれで、

たいそう、親切なお侍だと思ひまして「小父さん、何を貰つたら、可いだらうな」と、きいて見やうかと思つた位でした。

ですが、それは、やめました。他に聞くよりも、自分に、よつく、考へてから云つた方が、間違がないと思つたのでございます。そして、暫らく考へて居りました。

出目助さんは、赤ん坊の頃から、馬に馴れて、馬が好きでございました。で、お城に来て、頃刻、待たせられてゐる間に、下校人に頼んで、お厩を見せて貰ひました。そこには、乗馬が、恰度七頭、揃つて、つながれて居りました。いづれも、ぐいと首を反らして、えらさうな馬ばかりでした。

「すてきだな」と、出目助さんは、世のなかには、こんな好い馬が、こんなにも、どつさり居るものかと思つて、びつくりして了りました。そのうちに、一頭、目立つて、悄々して、跛の馬が居りました。

「跛の馬を……」と、殿様は、「變なことをいふ奴だ」と、いふ、お顔つきでございました。そして、

「跛の馬を何んに致す」と、おたづねになりました。「駄賃馬にして働かせるのだよ。その代り、精一杯、大事にして、いつも、おいらが口を取つてやつて、もう怪我なんぞさせないよ。飼料も、今の通りにしてやるよ」

と、出目助さんは、實に、しんげんでございました。

殿様は、何んとも有仰らないで、暫らく考へておゐでございました「左様か。働かせると申すのぢやな」

「へえ……、大事にしてやつてね」

「可い。遣はすと致さう。今日にも、索いて歸るが可い」

と、殿様は、重々しく、さう有仰いました。そして、お近習の一人に、何やら耳打ちをなさいました。

お近習の一人は、する／＼と座をすべつて、それ

「かはいさうだな」と、出目助さんは、つく／＼と、さう思ひました。そして、挫いた足首のところなぞ、見たりして、下役人から、その馬が跛になつたときの話やなども、ざつと聞きました。それが「ごん」でございました。——出目助さんは、今、ふつと、その跛の馬のことを思ひ浮べました。

「さうだ、どうせ殿様がお乗んなさらない馬だ。あの、馬をくれないかな。ナニ、跛だつて、あの位なら、結構、荷物はつけられる。云つて見やう」と、さう考へました。そして「そんなら、好きなものなら、何を云つても、可うござりまするか」と、まづ、念を押して見ました。

「可い／＼」と、殿様は、やはり、にこ／＼して、さう云つて下さいました。

「では、殿様…… おいら、あの、お厩に、跛の馬があるでございませう。あの、馬が欲しいのだがね」と、出目助さんは、はき／＼と云ひました。

から、そこを立つて行きました。

出目助さんは、望みが、かなつて、吻つとして居りますと、殿様が、「そちの親は、たしか、とん／＼の三吉とか申したな」

と、ふいと、かう、おたづねになりました。

「然うだよ」

「六年前に、目川で殺されたのぢやな」

「然うだよ」

「その、殺した奴が、今以て、解らんのだやな」

「然うだよ」出目助さんは、やはり、頓着なしに云つて、「よく知つてゐるな」と、思ひながら、ひよいと、殿様の顔を見上げました。

殿様は、その顔を御覧になつて、また、にこり、にこりと、お笑ひになりました。そして、もう一人の、お近習の者へ、何やら、ちよつと目くばせをなさいますと、お近習の者は、銀の長い煙管に、煙草をつめて差上げました。殿様は、それをお取りにな

つて、一服、ゆるやかに吸ひになりました。それから、ふいとまた、『そちは、親の讐を討ちたいとは思はんか』

と、おたづねになりました。

『え……』

と、出目助さんは、怪けたやうに、問反しました。

『讐討をしたとは思はんかといふのぢや』

と、殿様は、たゞみかけて、おたづねになりました。

そして、金蒔繪の煙草盆を引きよせて、ボンと、煙管の吸殻をお落しになりました。

出目助さんは、何んとも返事をしないで、うつむいて了ひました。少し、どうも返事に困つたといふ様子でございました。

殿様は、もどかしくてならないやうに、『そちは殺した奴を、憎いとは思はんか』と、是非、さうあるべき筈だ！ と、いふやうに有仰いました。

『それア、憎いよ。でも、おいらは、馬子だ。劍術

を知らないよ』

——だから、讐討なんか出来ないよ。と、いふやうに、出目助さんは、済まアして云ひました。

『劍術は、習へば覚えられる。どうぢや。劍術を教へて取らすが、讐を探出して、討つ氣はないか』

殿様は、然う云つたら、多分、出目助さんが、悦んで、はすんで来るだらうと思つておるでのやうでした。ところが、出目助さんの方は、うつむいて、いつまでも、返事をしづつてゐました。

『讐討をしたくないのか』

殿様のお聲が、だいぶ尖つて參りました。それでも、出目助さんは、落ちついてゐました。そして、にこ／＼しながら、『でもね、讐は、お上で、きつと取つて下さるつて、お祖母さんが、いつも、さう云つてゐるよ』

『ム……』と、殿様は、少々、面白くない顔つきをなさいました。が、すぐに『だが、若しも、お上で

讐を討つて下さらんと、如何致すな』

『その時ア、仕方がないよ。一生懸命に、阿父さんの同向をするだけさ』

『然らば、讐の奴が、そちを殺しに參つたら、如何致す』

出目助さんは、大きな頭をかしげて、ちよつと考へました。そして、『逃げるよ』

と、一言、無難作に云ひました。

『たはけものッ！』

殿様の大きな聲が、ぐわんと、出目助さんの脳天へ響いて來ました。ハツと思つた、とたんに、殿様の手が、煙草盆にかゝつたと見ると、煙草盆が、もんどり打つて、出目助さんの向面へ飛んで參りました。出目助さんは、首を縮めて、蛙のやうに、バツと、縁の下へ飛込みました。

そこらには、灰が、もや／＼と、煙のやうに舞ひあがつて、暫らく何も見えませんでした。さうして、

煙草盆は、遙、かなたに飛んで、地べたに、ひつくりかへる。お侍も、お近習も、お小姓も、ど臍を抜

かれて、さつと顔色を變へて居りました。そこへ、先きに立つて行つたお近習が、小形の廣蓋をさげ

て出て參りました。

そのとき、出目助さんは、縁の下から、少しばかり頭を出して、そつと、そのらの様子を窺ひました。

それから、首を伸ばし氣味にして、ゆつくりと縁側の上を見ました。その頭の恰好、その様子——恰度、小犬が、ちよつと、びつくりさせられた時のやうに、キョトンとしてゐました。それが、妙に、ひようきんに見えました。

どこへ行つたかと思はれた出目助さんが、さうして、ひようきんな頭を見せたので、殿様は、また、にこり、にこりとお笑ひになりました。

『こりや／＼、戯れたのぢや。出い／＼』

と、殿様は、前の通り、氣輕に、お呼びになりました。



「何あんだ、おどかしたのか」と、出目助さんは、少し、忌々しく思ひましたが、しかし、スツカリ安心して、ソロ／＼出て参りました。そして、殿様の顔を見て、ヤッぱり、にこ／＼してゐました。

「なか／＼、すばやい奴ぢや」

殿様は、さう云つて、お讃めになりました。

廣蓋を持つて来たお近習は、それを縁さきのところへ持つて参りました。廣蓋のなかには、一兩の小判が三枚、びか／＼光つて居りました。殿様は、もう、警討のことは、何んとも仰有いませんでした。かうして出目助さんは、鼓の馬と、三兩の小判とを戴いて、お城を退つて來ました。

それから、出目助さんは、毎日、大津の宿から、京へ三里、龜山へは十八里——その東海道筋を、何處かの立場へ姿を見せて、駄賃を稼いで居りました。鼓の「ごん」には、成だけ重い荷物をつけないやうに



して、そして、その口をしつかと取つて、どうかすると、馬子唄をうたひながら、新しい鈴の音をちやら／＼と、宿から宿へと往つたり來たりして居りました。それが、他から見ると、いかにも悦しうで、何んの屈托も心配もないやうに見えました。さうして、半年ばかりしますと、一人のお祖母さんは、老病で、ぼつくり歿くなつて、出目助さんは、眞んとの獨りばツちになつて了ひました。その當座、出目助さんは、馬子唄をうたふどころではありません。駄賃の稼ぎも斷つて、一人、シク／＼、家の隅つこで泣いてゐることもありました。

すると、そこへ、西國大名、都筑家十五萬石のお姫様が、お國から江戸へお下りの途中、大津の宿でお泊りになることになりました。そして、旅のつれづれのお慰みにと、出目助さんをお召しになつて、「宿の名物」の其の馬子唄をお聞きになることになりました。

(つゞく)



あッはッは

うッふッふ

小島政二郎

上

昔江戸の日本橋に、砂糖屋と瀬戸物屋とが軒を並べてゐました。或春のうら／＼と晴れた日に、砂糖屋で、店先一杯に黒砂糖を並べて日に乾してゐました。すると、恰度その時、瀬戸物屋の小僧が表で水を撒いてゐましたが、どうしたはすみにか、柄杓の首がポーンと飛んで、黒砂糖の上へチャーと水が掛

つてしまひました。

それを見た砂糖屋の小僧は、
「番頭さん、大變です。」と店の中へ駆け込みました。

「何だ、騒々しい。どうしたのだ。」

「あのウ、隣の瀬戸物屋の小僧が砂糖の上へ水を打つ掛けたのです。」

「そりや成程大變だ——旦那様、大變です。」

「何だ、騒々しい。どうしたのだ。」

「あのウ、隣の瀬戸物屋の小僧が、砂糖の上へ水を打つ掛けたので……」

「そんな事を黙つて聞いてゐる法があるか。隣へ行つて掛け合つて來なさい。」

「はい。」

そこで番頭の久助は、片肌を脱いで向針巻、裾を三方ダイト騰げて、

「やい、今日は。」と瀬戸物屋へ押し掛けて行きました。すると、折よく向うの主人が店に出てゐて、

「これは／＼、誰かと思つたら久助どんか。エライ勢だな。人の家へ這入つて來るのに向針巻裾揚げ、片肌脱とは禮儀を知らんな。一體何をしに來なすつた？」

「何をしに來たとは失禮な。用があるから來たのぢや。あのな、貴様のところの小僧が私の家の砂糖に水を掛けたのだ。濕つてゐてはならぬから日に乾し

てゐるのに、それへ水を掛けられては砂糖が溶けて賣り物にならん。さあ、素々通りにして返せ。」

「そりや濟まぬ事をした。粗相でしたのだから許してやつて下され。」

「ナニ許してやつてくれ？ これ、謝つて物が濟むと思ふのか。」

「謝つて濟むかと云つて、家の小僧が粗相をしたと云ふからこそ、家家の粗相は主人の粗相、そこで私が許してくれと謝つてゐるのぢや。謝つて濟まなければ、どうしろと云ふのだ。」

「素々通りにしたら宜いのぢや。」

「一體その砂糖は何處に乾してあつたのぢや。」

「店先の往來に乾して置いたのぢや。」

「アハハハ……。さうか。それぢや家の小僧は一向悪くない。」

「悪くない？ これ、砂糖に水を掛けて置いて、一向悪くないとはどう云ふ譯だ。」

「分らなければ云つて聞かせてやる。それ程大事な砂糖なら、なせ家の中の、藏の中へでも乾して置かなかつたのだ？」

「阿呆。藏の中へ乾して置いて砂糖が乾くと思つてゐるか。」

「私の云ふのはそこちや。」

「何處だ。」

「乾かないからと云ふので往來へ乾したのだらう。これ、往來は天下の往來だぞ。自分勝手に表へ物を



乾す事は許されてゐないぞ。云はゞ、往來をば泥棒してゐるのと同じ事ぢや——よう開け、俄の夕立でも降つてビツシヨリ砂糖が濡れたからと云つて、お天道様を掴まへて、貴様は文句が云へるのか。」

「阿呆らしい——そんな文句が云へるものか。」

「云はれないだらう！ さあ、どうだ。ぐつとでも云つて見ろ。」

「ぐッ。」

久助はとう／＼云ひ詰められて、スゴ／＼歸つて行きました。すると、主人が待ちかまへてゐて、

「どうぢや。何と云つた。」

「ぐッ。」

「ぐッとは何ぢや。」

そこで久助は、瀬戸物屋の主人に云ひ負かされた話をしますと、主人は益々怒つて、

「よし、そんなら今度は私が敵を取つてやる。」

その日一日、砂糖屋の主人は砂糖を濡らされた舉

しまひました。

「久助。」

「へエ——お早うございます。」

「隣の瀬戸物屋は起きてゐるか。」

「外の家は皆寝てをりますが、瀬戸物屋だけは早く起きてもう店を開いてをります。」

「よし、今日は久助、昨日のグーの仕返しをしてやるぞ——家の犬は居るか。」

「庭にまだ寝てをります。」

「お前、犬の頭を棒で一つ殴つてくれ。」

「悪さもしない犬をどうして殴るのです。」

「まあ、いい。かう云ふ智慧があるんだ。久助、ちよつと此處へ来い。」

主人は久助の耳に口を寄せて、何やら囁くと、急に久助が嬉しうに、ニコ／＼笑ひ出しながら、

「へエ／＼、成程。大丈夫でございますとも、定吉と二人で旨くやつて御覽に入れます。」と云つて庭へ



句云ひ負かされた事を思ふと、腹が立つて腹が立つて、夜床へ這入つてからも、眠られませんでした。ゴロリ／＼寝返りを打ちながら、「どうして敵討ちをしてやらう。」と考へ明かして、とう／＼朝になつて

降りて行きましたが、いきなり寝てゐる犬の頭を、ボカリと一つ殴りました。

『キャン／＼』

犬は驚いて表通りへ逃げて行きましたが、そこには定吉と云ふ小僧が、棒を振り上げて待ちかまへてゐて、『來れば打つぞ。』と云ふ恰好をして見せましたから、再び驚いて左の方へ逃げやうとすると、いつの間にか久助が待ちかまへてゐて、

『おのれ、この犬め！ 瀬戸物屋へ這入らんか。』と棒を振り被つて威しました。

もう逃げ場がありません。犬は瀬戸物屋の店へ夢中で身を躍して逃げ込みました。驚いたのは店飾りをしてゐた小僧です。

『わッ。』と叫び聲を上げたので、犬は尙更めんくらつて暴れ廻り、茶碗の上だらうが火鉢の上だらうが無我夢中で逃げ廻つたから堪りません。ガラ／＼ガチャンと忽ち瀬戸物の山が崩れて粉微塵に割れまし

瀬戸物を皆償つて返せ。』

『冗談を云ひなさんな。何も私が犬の手足を持つて割らしたのではない。犬が毀したのだ。』

『それでも、貴様のとこの犬が毀したんだから、飼主の貴様が償ふのが當り前ぢや。』

『それは其通りぢや。併しあの犬は私の處の犬ぢやない。どこからか此町内に迷ひ込んで來た犬だ。云はば町内中の犬ぢや。唯私の家はお前の家とは違つて、贅澤で肴をよく食ふものだから、犬もよくそれを知つて、お前のところの掃溜へは行かないで、私のところにはばかり來るやうになつてゐる。それまでの事ぢや。今朝も來てゐたが、餘所から貰つた魚を下女が臺所に置いた儘にしてあつたのを、あの犬めが攫つて行かうとしたので、私が見つけて叱つた。それを奉公人が棒で打つたのぢや。そこで犬は逃げて出たが、近所はどこも締まつてゐる。お前の店が一軒、朝起きは三六の徳と云ふので、店を開いてゐた。

た。

今度は瀬戸物屋の主人の怒る番です。目を怒らし、て『源助、源助。』と番頭を呼んで、『隣の犬がこの始末だ。早く隣へ行つて掛け合つて來い。』

『こんな亂暴をされて黙つてゐられるもんですか。すぐ行つてまゐります。』と出掛けて行きましたが、『やい、砂糖屋。』と店先から嘯鳴つて飛び込みました。

すると、向うでは主人が待ちかまへてゐて

『源助どんか。エライ勢だな。』

『貴様のとこの犬が家の店へ暴れ込んで來て、店中の瀬戸物を滅茶滅茶に割つてしまつた。あれでは今日から商賣が出來ん。素通り償つて返せ。』

『それはヒドイ事をやつたな。――併し、アハハハ……』

『併しアハハ。』だと。そりやどう云ふ譯だ。何がをかしくつて笑ふのだ。笑つてゐる暇があつたら、

そこへ逃げ込んで割つたのだらう。何も私が割らしたのでも何でもなし。犬が勝手に割りたくつて割つたのだから、文句があるなら犬に云つておくれ。私は知らぬから。』

『これ、馬鹿を云ふな。犬に文句を云つてそれが分るか。犬が物を云ふか。』

『馬が物を云つたら、犬も物を云ふだらうよ。文句は犬に云つておくれ――どうだ、一言もあるまい。何か云ふ事があるなら、ぐつとでも云つて見るがい。』

『ぐッ。』

とう／＼云ひ負かされて、源助はスゴ／＼歸つて行きました。その後を見送つて、

『ハハハ……どうだ、久助。昨日の敵を旨々と取つてやつた。これで胸がスツとした。いゝ氣持だ。』

さあ、これからと云ふものは、この砂糖屋と瀬戸物屋とが仲たがひをして、寄ると觸ると喧嘩はか

りしてゐました。初めは五日に一度位づつの割りで喧嘩をしてゐたのが、三日に一度、二日に一度、一日に一度、仕舞には、一日に二回、三回、四回、一時間に一同と云ふ工合に、だん／＼喧嘩が激しくなつて行くばかりでした。これには近所の人達が迷惑をして、とう／＼家主さんへ、

『どつちか一軒を立ち退かせて下さい。』と頼みに行きました。その譯を聞いて見れば尤もなので、そこで早速家主さんは砂糖屋へ出かけて行つて、
『今月一杯にこの家を明けて下さい。』と申し入れました。すると、砂糖屋も快く承知をしましたが、
『お家主さん、隣の瀬戸物屋も引越を承知致しましたか。』と聞きました。

『いえ、初めからあの瀬戸物屋へは店を明けてくれ、引越してくれとは云ひ込んでない。瀬戸物屋はあの儘ちや。私が明けて貰ひたいのは、貴方の家です。』

『さうですか。ちやあ折角ですが、私は引越す譯にはまゐりません。』

『どうして？』

『どうしてと云つて、私と瀬戸物屋とは今喧嘩の真最中です。この真最中に引越せば、喧嘩に負けた事になります。向うがどこかへ引越せば、私はすぐ又その隣へ引越して行つて喧嘩を續けるつもりです。向うが引越した先の隣が空地なら、そこへ私は家を建てます。若し生憎隣に人が住んでゐたら、借金をしても其家を買ひ取つて、瀬戸物屋の隣へ住まうには置きません。若し又この喧嘩の勝負が私の一代で片が附かないやうなら、子供に遺言をして、代々喧嘩をやらせる考へでをりますから、どうぞ其おつもりに願ひます。』

これには家主さんも呆れ返つて、何も云はずに歸りましたが、とても自分の手では収まりが附かないと思つたのでせう、御奉行所へ「仲裁をして下さる



やうに」と願ひ出ました。

下

そこで奉行所からは、早速砂糖屋甘造と瀬戸物屋堅吉へ對して、

「明日の午前十時に出頭せよ。」と云ふ御命令が降りました。二人は驚いて、着物を改めて出頭すると、すぐお白洲へ通されました。

お白洲と言ふのは、砂利が一杯敷き詰められた廣場で、二人はその砂利へ直に坐らされました。見ると、正面のお座敷に、嚴しい顔付をして御奉行様が、大勢の家來を從へて坐つてゐられて、

「砂糖屋甘造、瀬戸物屋堅吉、兩人頭を上げい。」と、これから何故二人が喧嘩を始めたか其素の原因から今日の事までをお尋ねになりました。一通り聞いておしまひになつてから、

「兩人とも不埒な奴ぢや。手を出せ」

は、

「あの仲の悪い二人に手を引き合はせて歩かせるなんて、お奉行様も面白い方だ。」と笑ひ合ひました。

併し甘造と堅吉の身にとつては、顔を見るのも厭な相手と手を引き合つてゐるので、胸が悪くつて胸が悪くてつ堪まりませんでした。顔を背向け合つて歩いてゐましたが、砂糖屋が、

「これ、瀬戸物屋。ちよつと待つてくれ。」と聲を掛けました。

「何ぢや。」

「私は小便がしたい。」

「したければ勝手にするがいい。」

「勝手にするがいい」と云つても、お主が付き合つてくれないでは出来ない。」

「私はしたくない。」

「したくないと云つて、お主だつていつか小便せにやならぬ事があるから、瀬戸物屋さん、待つておく

八四
兩人有り難う存じます。喧嘩をして御褒美を戴くと
は……」

「控へろ。」

「へえ。」

「兩人手を出したか。然らば、手と手と握り合へ。」
すると、砂糖屋が、

「さ、貴様の手で私の手を握れ。」
すると、瀬戸物屋が、

「いやぢや。貴様の手で私の手を握れ。」と、又しても喧嘩を始めました。お奉行様も、よく／＼仲の悪い同志と見えるとお呆れになりながら、手錠で二人が手を握り合つたところをビーンと締めておしまひになりました。さうして、家主をお呼び出しになつて「この兩人を手錠のまゝ其方に預け置くぞ。追つて沙汰に及ぶ。今日は立ちませえ。」

三人はお白洲を出ました。家主が先に立つて、仲の悪い二人が並んで歩いて行く姿を見て、町の人達

れ。」

「そんなら待つてゐてやるから、早くおし。」

「もし、誠に濟まんが、着物の前を捲る手傳をしてくれぬか。」

「困るなあ。」

「けれど、捲つてくれなければ着物が小便だらけになつてしまふ。」

「ぢやあ仕方がない、捲つて上げよう。」

「有り難う——ああ、助かる助か——やれ、助かつた。フーッ。」

ところが、半丁ばかり行つてから、今度は瀬戸物屋が、

「これ砂糖屋。」

「何ぢや。」

「ちよつと待つてくれ。」

「何ぢや、小便か。」

「いや、鼻がかみたい。」

「さつさと拭みなされ。」

「では、私の懐から紙を出しておくれ——手傳つて擧げておくれ——そつちから鼻を押へてゐておくれ——フン、フン——ああ、拭めた——有り難う。」
やがて二人は自分の家の前まで歸つて來ました。すると、砂糖屋は砂糖屋の家へ這入らうとする、瀬戸物屋は瀬戸物屋の家へ這入らうとするので、
「砂糖屋よ、さう引ッ張つては駄目だ。私の處へ這入れ。」

「ウンニヤ、足が腐つても貴様の家なんかへ這入るものか。私の處へ這入れ。」
「貴様の家なんかへ這入つて堪るものか。こつちへ來い。」

見兼ねて家主が、

「さう争つたつて、二人ともいつまで表に立つてゐられるものぢやない。お奉行様も「家主に預ける」と仰しやつた。私の處へ來なさい。」と宥めて二人を



自分の家へ連れて來ました。

これから、二人の仲悪同志の一緒に生活が始まりました。先づ困つたのは食事の時です。お箸を持たば茶碗が持てず、茶碗を持てばお箸が持てません。仕方がなく「瀬戸物屋さん、貴方茶碗を持つて、私の口へ當てがつてゐて下さらんか。」

「よろしい。その代り、これが濟んだら、今度は貴方箸を持つて私に飯を食はして下さいよ。」

「お安い御用です。」

着物を着る、帯を締める、何でも二本の手で助け合はなければ出來ません。殊に、夜中、片方が小便に行きたくとも、片方が起きてくれなければ行く事が出來ません。さうなると、二人は喧嘩なんかしてはゐられません。兩方で助け合はなければ、一日も生活して行けない事が二人によく分りました。或日の事、

「なあ、瀬戸物屋。」

「何ぢや、砂糖屋。」

「仲直さうか。」

「お前が仲直さうかと云ふのに、私の方から喧嘩しよう云ふ譯はない。仲直さう。」

「併し唯口先で仲直さうと云つただけでは後の證據にならぬ。何かあるまいか。」

「そんなら、お互に笑はうか。」

「ぢやあお主一つ先へ笑へ。」

何と云つて笑はう。」

「笑ふのに註文があるものか。」

「それぢやアハハ……」

「ウフフ……」

「ハハハ……」

「カラ……」

家主がこれ聞いて喜んで早速お奉行所へお知らせしたので、二人はすぐ手錠を許されて、これから後は仲よく暮しましたとさ。(をばり)

おやつ時^ど

若山牧水

ぬくぬく日^ひざしの

お部屋^{へや}のおくて

ぼーん、ぼーん

午後二時^じです

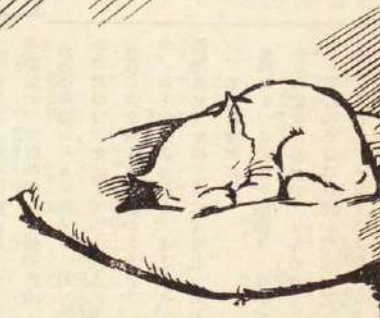
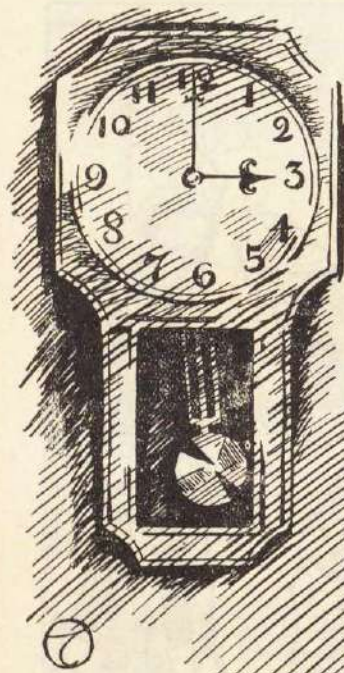


ぼーん、ぼーん、ぼーん

午後三時^じ

恰度^{ちやうど}おやつの

時間^{じかん}です





獨逸古譚 シーグフリード王子物語

山内萬治郎市譯

王子シーグフリードは、ライン河のほとり
の大きなお城の中で生まれました。お父さんも
お母さんも、シーグフリードをこの上もなく
可愛がりましたので、すくすくと育つて、もう
愛らしい少年となりました。母のお妃は、シ

ーグフリードに美しい着物を着せて、お城の
外へ連れて行きました。そこには、武士達が
大勢立って、お城を守つてゐますが、王子の
可愛らしい姿を見ると、思はずにくく笑ひ出
して、王子にやさしい言葉をかけるのでした。

甚六の東京見物

長崎 五六

一、伯父さんの家

甚六「御免なさい、伯父さん。」
伯父「誰だ、オ、甚六か。よく来たな、一人
か、感心々々、よく道がわかつたな。」
甚六「停車場から、人に聞きく来た。」
伯父「サカカ、何時に着いた、ナニ九時……も
う盡だか、大層時間が、掛つたな。」
甚六「停車場から人に聞きく行つて言ひつ
かつたので、此所まで六十八人に聞いた。」
伯父「六十八人とは驚いたな、マアい、
や、親父の手紙か。よし、チツト世
間を見せてくれ、人にもまれければいいな
い、尤もの事だ。」
甚六「おとくさん、始終さう言つて居るよ。」
伯父「親父はお前のことを心配してゐるのだ
今に孝行をしなればいけない。」
甚六「伯父さん、チョイト上野の山まで行つて



或時、戦争が起つて、シーグフリードの國
へ敵が攻めて来るようになりました。國中大
騒ぎとなつて、敵を防ぐ支度にかゝりました
が、王様は、もしや戦争に負けて、可愛い
王子が捕虜になるやうなことがあつては大變
だと考へたので、シーグフリードを森の奥へ
隠すことになりました。
その森にはマイマーといふ小人の鍛冶屋が
住んでゐました。マイマーは、ニイベルンゲと
いふ小人の種族の一人で、この種族の小人達

は大抵鍛冶屋で、みんなトンカン／＼鐵の種
をふるつて働いてゐました。
王子シーグフリードは、そのマイマーの仕
事場へ、假りに弟子として入ることになりま
した。元氣なシーグフリードは、マイマーの
弟子となつても、快活に鐵の種をふるつて
朝から晩まで熱心に働きました。
シーグフリードの元氣な鐵の音を聞いては
森の獸も、鳥も、恐れて逃げ出しました。

二、上野公園

甚六「伯父さん、行つて参りました。」
伯父「大層早いな、どうした。」
甚六「上野の石段を上つて西郷さんが犬を連れ
てゐるのを見た。毎日ア、やつて立つてゐる
のは、草臥れるだらうね。」
伯父「あれは銅像だからな、そんな事は無い
それから何を見た。」



シグフリードは、マイマの仕事場で働いてゐる内に幾年かたつて、立派な青年になりました。

今では力が強くて、十人分の力があるといふ程ですから、力にまかせて段々亂暴になりました。

師匠のマイマのいふことをきかなくなつたばかりでなく、力のあるに任せて、悪いいたづらをしては、マイマを苦しめました。

或日のこと、シグフリードは角笛を吹きながら森の中を歩いてゐました。と、大きな

鹿が飛び出して來たので、いきなりそれを捕へて、ひよいと鹿の背中に飛乗りしました。それから、鹿の口へ口輪をはめて、はい／＼と馬に乗つたやうに走らせました。

鹿はシグフリードを乗せたまま駆け出して、マイマの仕事場へ駆け込みました。マイマは腕をつぶして逃げ出しました。

シグフリードはい／＼面白がつて、鹿のお尻をたゝいて、マイマを追ひかけさせました。

マイマはヒイ／＼いつて逃げました。

甚「それから、あの崖つちで方々が見えた。浅草の御蔭様から、三越呉服店、日本銀行も見えたし、よく世間が見えたよ。」

伯父「馬鹿だなあ。」

甚「遠眼鏡のおばさんに世間が見えるかつて聞いたら、よく見えますよ、これで見るとお利口になりやすつて言つたよ。」

伯父「ます／＼呆れたね。」

甚「それから電車に乗つたよ。なるだけ、大勢乗つて、こむのを待つて乗つた。」

伯父「ナンテそんなにこむのに乗るんだ。」

甚「おとさんから人にもまれるつて——から無理に乗つてもまれてゐたら、大變なことなしやつた。」

伯父「どうした。」

甚「小遣ひの入つてる錢入れを失くした。もまれるつて言ふのは損なしだね。」

三、芝居見物

甚「伯父さん、芝居へ行つて來た。」

伯父「よく一人で出掛けるな。今日やつた小遣ひをまた失くしやあしないか。」



マイマは、シグフリードの惡戯に、ほとと困りました。もうかうなつては、どうかして一日も早くシグフリードを追ひ出してしまひたいと思ひましたが、力が強いので力づくで追出すわけにも行かず、困り切つてゐました。そこで、い／＼考へた末、森の奥に住んでゐる大蛇に、喰はしてしまはうと決心しました。

そこでマイマは、シグフリードを呼んで、これから森の奥へ行つて、仕事場で使ふ炭を集めて來るやうにといひつけました。

シグフリードは、大蛇に喰はれに行くとばかりで、大元氣で出かけて行きました。

シグフリードは森の奥深く入ると、腰に下げた角笛を取り上げて、一と聲勇しく吹き鳴しました。

すると、その時、俄かに森の樹々が揺れ動いて、地面から火が吹き出したやうに見え、目をして、それは、大蛇が角笛の音を聞いて、目を覺して、シグフリードに向つて來たのでした。

伯父「馬鹿にされたんだ。」

甚「それから中へ入つて見ると、饅頭の大將が馬に乗つて出て來た。皆んなが、世界一つて言ふから、已れも世界一の上等つて言つたら、側に居る人が、モット大きい聲でつて言ふから、一生懸命に、世界一——」

伯父「ア、吃驚した。此所でそんな聲を出しちゃいけない。」

甚「モット寝る／＼つて言ふから、三度寝めたら、お菓子をつ貰つた。」

伯父「面白い奴だな——」

甚「今度は昨を貰はうと又寝めたが、呉れない。」

伯父「下司ばつた奴だな、意地の汚ないこと



樹が揺れたのは、大蛇が這つて来た爲めでした。地面が火を吹くやうに見えたのは、大蛇が大きな口を開いた爲めでした。
しかし、勇敢なシーグフリードは、大蛇を見て、平氣でした。
『何といふ醜い怪物だ！ さア殺してやるぞ』と、大蛇に叫びました。
大蛇は火を吹きながら、恐ろしい牙をむき出して、太い尾を振りながら向つて来ました。シーグフリードは、ひらりと大蛇の背中を跨りました。そして、いきなり腰の剣を抜

いて大蛇の胸をぬいて、ぶつくりと突刺しました。流石の大蛇も、一とたまりもなく死んで了ひました。
しかし、その拍子に大蛇の血が、さつとシーグフリードの身体一面にかかりました。ただ一個所肩のところに、剣の葉が上から落ちたので、血のかからない處がありました。大蛇の血を吸ひたシーグフリードの身体は、不思議にも忽ち鐵のやうに岩丈になりました。もうどんな槍でも突ても、王子の身体を射すことが出来なくなりしました。

七福神の餅

昔から『なくては七福神、あつて四十八福』と云ふ通り、人には一人として、福のないものはありません。その多くの福の中に、『ごいかつぎ』と云ふのがあります。
『餅は、何でも物事を氣にするので、朝、鳥の鳴き方が悪いから、病人が出来はしないか、夜、霧が鳴いたから、火事があるだらうなどと心配をします。また、四の数は善が死に通じるからいけない、八は恥をかく』
『伯父、仕様のない奴だな。』
『甚、その赤い顔のおぢさんが、肩を持つて踊りなをどつたら、皆んなアア／＼言ふから、已れも、日本一のヨイヨイ様』と褒めたらとう／＼外へ引張り出された。』



シーグフリードは、それから再び鍛冶屋のマイマーの仕事場へ歸つて來ましたが、マイマーが自分を殺さうと謀んで、森へやつたといふことがわかつたので、血氣なシーグフリードは、たうとうマイマーを殺して了つて、旅に出ました。
方々の國々をさまよつてゐる内に、シーグフリードは、イセランドといふ國へ來ました。この國の女王のお城は、海邊に建つてゐて、七つの大きな門で守られた、實に立派なお城でした。

女王は大層高慢な人で、自分と試合をして勝つた者でなければ、自分の解しなないと威張つてゐました。女王はお城の窓から下を眺めてゐましたが、筋骨の逞しい青年が通りかかつたので、家來をやつて城内へ呼入れました。この青年は、勿論王子シーグフリードでした。シーグフリードは女王の前に呼出されました。
女王は自分の秘蔵にしてゐる『魔法の馬』を見せたりして、自分と試合をせよといはねばかりの態度をしました。

九は苦しむと云ふので延喜がわるい、などと自分勝手の理窟をつけて、いやがります。
ある『ごいかつぎ』の御主人の家へ、奉公に來た女中が、初めて留守りをした時、御主人から『留守りには何處へ遊びに行つた』と訊かれ、女中は考へながら、ボツ／＼と
『エー、よばの……よめいまへの……よんらいと……およばへいつて……おもよろかつた』と言ひました。女中は御主人が『し』といふ言葉をいやるので、『し』といつたのです。サア何んだか、サツパリ判りません。そこでだん／＼よく訊きますと、
『芝の神明前の、總類とお芝居へ行つて、面白かつた』と判り、大笑ひになりました。
これからのお話は、やつぱり『ごいかつぎ』のことです。
江戸時代のことですが、日本橋の商人の店で、ある年の暮れに、家例になつてゐる餅搗きをしました。御主人は番頭さんを呼びました。
『番頭どん、今日は家例の餅搗きで、御苦勞でした。』



シークフリードは、この戦争好きの女王と勝負をして、勝つてこの國の王とならうと思ひまゐりました。

しかし、この高慢な女王を懲してやりたいと思ひました。

自分が、女王の家來の中の誰よりも強いこと、又自分は魔法の力を持つてゐるから、女王の「魔法の馬」でも、自分の力で自由自在に盗み出すことが出来るといふことを、見せてやりたいと思ひました。

そこでシークフリードは、いよいよイセ

ランド國を出發するといふ前日、女王の城へ出かけて行つて、自分の力を見よとばかりに、七つの門をまちやくちやに打ち壊しました。

それから既へ行つて「魔法の馬」を呼びました。馬はいそ／＼と王子の後にいつて來ました。

シークフリードは、悠々と「魔法の馬」をひいてお城を出ました。女王の家來の内誰もシークフリードに及ぶ者もありません。シークフリードは、再び旅を續けました。

シークフリードは、或る大きな山に差しかかりました。すると、二人小の人が、互ひに何か言つて喧嘩してゐるのを見ました。小人の廻りには、十二人の巨人が取り巻いてゐます。巨人達は、二人の相役になつてゐますが、何れも困つたやうな顔をして、小人の喧嘩を見てゐます。

二人の小人は、小人の國の王子でした。父親の王が、この頃死んだので、後に残つた二人の王子が、財産の分配のことから喧嘩を始めたのです。あたりには一面に、小人の寶

物である黄金や寶物が散らばつてゐます。殊に小人の王子が寶物であつた名銀バルムンダもそこにありました。

小人の王子は、シークフリードの立派な姿を見て、どうか仲裁をしてくれと頼みましたので、二人の間に適當に寶物を分けてやりました。しかし小人の王子達は、それにも不服で、直ぐに又喧嘩をはじめました。そこでシークフリードは、怒つてそこにあつた名銀バルムンダで、二人の小人を殺してしまひました。(以下次號)



「へいお餅揚ぎも、滞りなくすみまして、お目出たう存じます。」

「おすわり(神様へ供へる餅のこと)も、皆んな出来ましたか。そして厨半餅は何枚出来ました。」

「へい、のし餅は、四十九枚出来ました。」

「ナニ四十九枚……」

御主人の顔色がサツト變りました。

「番頭どん、四十九枚などよく言へたものだ。お前はいふ年をして、頭まで禿かして。」

番頭さんは、頭をツルリと撫でて、

「どうも恐れ入ります。自然と禿ましたので。」

「イヤ禿のこともやあない、餅のことだ。よく考へて見なさい。四十九は、始終苦しむと云ふことだ。家例の餅揚ぎに、しじうくるしむなど云ふ數が出来たのは始めてだ。ア、イヤナ心持ちになつた」と、大へんな威嚇で、店者の例の御主人の癖とはいひながら、何んとか機嫌を直したいと、心配なしてゐました。ところへ、ヒツッカリ、

「今日は御免よ」と言ひながら、店へ入つて來たのは、日頃此家へ親しく出入りをしてゐる學者先生です。御主人もこの先生とは、格別懇意の間柄ですから、何んとか機嫌を直して貰はうと番頭さんは譯を話して頼みました。すると先生は、

「アハ……主人の例の病氣が始まつたな。わしが直してやる、心配さつしやるな」といつて奥へ行きました。

「時に御主人、今店で暮いたが、吉例のし餅の數が、目出度い數で、ます／＼産寶繁昌の兆が現はれましたな。」御主人は苦い顔をして「先生御冗談を仰つてはこまります。四十九枚など、云ふ不吉な數で……」

「イヤ／＼その數が目出度いのだ。一寸紙と筆を貸して下さい。」やがて紙へサラ／＼と書いて出したのを見ますと、

「七つづつ、七福神に、配らばや數も、七七、四十九の餅」

とありますので、御主人は喜びです。「先生有難う存じます。番頭どん、よく先生へお禮を申上げて下さい。こんな目出度いことばない」と、忽ちに機嫌が直り、目出度いお正月を迎へました。(なほり)

不意の敵

沖野岩三郎

今から百二三十年前まで、北海道の國境は、まだはつきりしてゐませんでした。で、寛政十二年に幕府から近藤重藏と、高田屋嘉兵衛とをエトロフ島へ遣つて、島の有様を視察させました。

二人は多勢の漁夫や船頭をつれて、エトロフ島へ行つてみますと、其所には、もういつの間にかロシ



九八

ヤ人が来て、十字架の杭を建て、ありました。それは此の島をロシヤの領地だといふしるしであつたのです。

それを見た重藏と嘉兵衛は、其の十字架の杭を引抜いて、別に『天長地久大日本属島』といふ杭を建てました。そして島に住んでゐる土人に、漁業用具や日用品を與へて、十七ヶ所に漁場を開いてやりまし

ただでして。だから戸田又太夫は、そんな不便な所へ、あまり行きたくはありません。行きたくはありませ

んでしたが、幕府の命令ですから、お断りするワケには参りません。

或日又太夫は下役人を呼んで、

そこで幕府は此の島に、御番所といふのを設けて、戸田又太夫といふ人を其所の御奉行に致しました。御奉行様といへば、大變偉さうに聞えますが、同じ御奉行様にも、いろ／＼あつて、蝦夷の果のエトロフ島の御奉行様は、あまり威張られない御奉行様でした。その上、今ですらエトロフ島といへば、随分偏僻な所ですのに、其頃はまた交通の便といふものが、殆ど無いと云つて善い位で、天氣のいゝ波の静な日に、土地の漁夫が小舟に乗つて、蝦夷へ往復

「拙者は今度、エトロフ島の御奉行を言ひつかつたのであるから、あらへ行けば、どんな政治をするのであるか、一應調べて戴きたい。」と申しました。すると下役人は、早速蝦夷やエトロフ島の事を能く知つてゐる人の所へ行つて詳しく調べてまゐりました。そして、こんな事を申し上げました。

「エトロフ島にゐる人間は、みんな無學文盲な漁夫



九九

はかりですから、御奉行様の御政治も頗る簡單で、

一、外國人に従ふ者は罪重かるべし。

一、人を殺したる者は死罪たるべし。

一、人を疵つけ又は盜する者は咎あるべし。

といふ三ヶ條だけが、御法度の悉皆でございます。

それを聞いた戸田又太夫は安心したやうに、ここに笑ひながら、

『うん、さうか。外國人に従ふなといふのは、オロシヤの人に備はれて魚を捕るなといふ事だらう。それは此の拙者が行つて、オロシヤの人間が来て、どんな高い賃錢で傭ふからと云つても、決して傭はれてはならないと云へばそれで善い。それから、人を殺した奴を死刑にするのは當然だが、まさか人殺しをするやうな亂暴な漁夫も居る。高々喧嘩をする位が、關の山であらう。もしも喧嘩をして訴へて来る奴があつたなら、双方共ひどく叱り飛ばしてやればそれで善い。又た人を疵つけたり、物を盗んだり

する奴は、頭の一つも、はり飛ばしてやれば済むだ。よろしい、そんな世話の無い所なら、拙者は喜んで行くでしょう。』と申しました。すると下役人は、

『小い島の事でございますから、御政治は其様に簡單で相済みますが、あちらへ参りますには、二つの大敵がございますから、それを防ぐ御用意が肝心だといふ事でございます。』と申し上げました。

『二つの大敵、それはどんな敵でござる？』

又太夫は心配さうに訊きました。すると下役人は、

『第一の敵は、寒さといふ恐ろしい敵だと申す事にござります。』と答へました。

下役人の答が、あまり案外だつたので、又太夫は、『なんだ、そんな詰らない敵か。それなら恐ろしい事も、何にもありはしないぢやないか。』と言って笑ひました。けれども下役人は、眞面目な顔をして、『それは決して侮るべき敵でございませぬ。御承知でもございませうが、蝦夷千島と申しますと、

又太夫は又た笑ひながらたづねました。

間の口から吐く息さへ、棒のやうに凍るといふ程、寒い所でございますから、あちらへ行らつしやるには、頭巾、耳袋、手袋、足袋、毛靴、其他防寒の支度を十分になさる必要がございます。』と申しました。それを聞いた又太夫は、

『人間の息が凍るといふのは、ちと信じられない話だが、兎に角寒い所であらうから、防寒の用意は十分に致さう。今一つの大敵と申すは何である？』と問ひました。

『今一つの大敵と申すは、退屈と申す敵ださうでございます。何しろ大きな島に数少い土人がゐるばかりでございますから、まるで、島の有様は、空家同様ださうでございます。』下役人は相變らず眞面目に申しました。

『エトロフの島の景色は空家見たいだと申すのか。たはけた事を申すものである。して、退屈が大敵だとは、どんなワケでござる？』

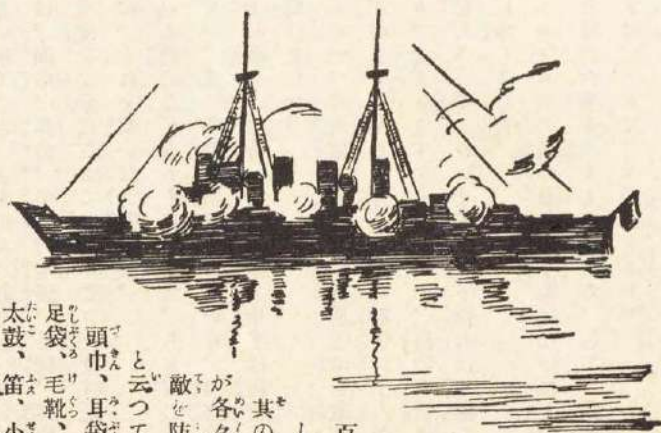
『島が空家みたいでございますから、御奉行様は見ても樂みなさるものも、聞いて樂みなさるものも、何にもございませぬ。だからあちらへ行らして、ものゝ半年もお暮しなさると、毎日毎晩欠伸ばかりなすつて、おしまひには退屈病といふものに取遷かれるさうでございます。だから、退屈病におかへりにならないため、面白い御本だとか、樂器類だとかを、うんと御持参なさるが肝心でございます。』

下役人の申し上げた言葉を聞いた又太夫は、暫く考へてゐましたが、

『成程如何にも其方の申す通りであらう。では拙者を始め其方達一同のため、其の二大強敵を防ぐ用意を十分に致せ。』

と申し渡しました。

そこで下役人は、みんな總がかりで、防寒の用意、退屈病に罹らない用意をいたしました。ところが、



エト
ロフ
島へ行
きます
又太夫の
下役人は
みんな
百五十人
で
したから、
其の百五十人
が各々に二大強
敵を防ぐためだ
と云つて、綿入、
頭巾、耳袋、手袋、
足袋、毛靴、三味線、
太鼓、笛、小説本など
をうんと十分に用意した。

しましたので、さア、御奉行様御一行のお荷物といふものは、大變なもので、箱に詰めたり行李に入れたりした荷物が、何千個といふ澤山の數になりました。

そして、いよいよお仕度が出来たので、戸田又太夫は百五十人の下役人を伴れて、威風堂々とエトロフの島へ出かけて参りました。すると、御奉行様がお出でになるのだといつて、港へお迎ひに出ました島の漁夫達は其の澤山の荷物を見て、みんなびつくりしてしまひました。けれども、其の箱や行李の中に、どんな物が入つてゐるかといふ事を知つた者は、一人もございませんでした。

ところが、御奉行様の一行は、島へ着いてみますと、聞きしとは違ひまして、なか／＼景色もよく、晝だつて夜だつて、別に空家のやうでもありませんから、誰も退屈はしませんでした。それに時候もまだそんなに寒くはありませんので、持つて來た荷

物はみんな其のまゝに、御奉行所の倉の中へぎつしり詰め込んだまゝにして置きました。

ところが或日の事、オロシヤの國の人が、大勢大きな船に乗つて來て、此の近海で鯨を取るのだから、手傳つて呉れない

かといふ事を、島の漁夫達に申込み

ました。けれども漁夫達は、オロシヤの船へ働きに行つても善いか

といふ事を、御奉行様にお伺ひ

しなければなりませんので、恐

る／＼其の事を伺ひ出ますと、

戸田又太夫は、

「外國人に従ふ者は罪重かるべ

しとは、畏れ多くも日本將軍様

の御命令であるぞ。たとへ一人

たりともオロシヤ人に傭はれし

ならば、決して其のまゝには差



「許さぬぞ！」といふ厳しい命令を下しましたので、漁夫達はみんな縮みあがつてしまひました。

そんな事とは露知らぬオロシヤの船では、漁夫達が手傳ひに来て呉れるものと思つて、港へ碇をおろして待つてゐましたが、待つても待つても、一人も土人も出て来ないので、様子を探させますと、出て来ないのは御奉行様の嚴命だといふ事がわかりました。其事を聞いた船長や船員は、大變腹を立てた見え、突無御奉行様のゐる御番所へ、どん／＼と鐵砲をうちかけました。

驚いたのは戸田又太夫でした。エトロフ島へ来たなら、寒さと退屈との大敵があるといふ事は心得てゐましたが、鐵砲をうちかけるやうな恐ろしい強敵が来ようとは夢にも考へてゐませんでした。しかし荷にもエトロフの島を守る御奉行様です。敵に鐵砲打かけられて、其まゝに逃げ出すワケには參りません。で、『假令鐵砲は打かけるとも、相手は高の

一〇四
知れたるオロシヤの漁夫共でござるぞ。いざ、一同に甲冑を着用に及び至急應戰仕るべし！』と聲高々に號令をかけました。

百五十人の下役人達は、御奉行様の御命令ですから、早速御番所の倉を開けて、甲冑を納れてある箱を取出さうと致しましたが、あまり澤山の荷物なので、どれが甲を入れた箱だやら鐵砲を入れた荷物だやら、さつぱりわかりません。けれども、オロシヤの船では、どん／＼と鐵砲が鳴ります。

戸田又太夫始め、下役人達は大周章に周章で、片一方から手當り次第に荷物の箱や行李の蓋を開けてみましたが、甲だと思つて開けてみれば太鼓が轉げ出したり、鐵砲だと思つて開けてみると三味線が飛び出したり、どうしても戰道具が揃ひませんでした。其のうちにオロシヤ人が、ワァ！ワァ！と関の聲をあげて攻寄せて來ましたので、御奉行様の戸田又太夫は、眞先に裏の山中へ逃げ込みました。主

人が逃げるのを見た下役人達は、『待つてゐました。』といふやうに、一人残らず散々ばら／＼になつてしまひました。暫くして、鐵砲の音が聞えなくなつたので、戸田又太夫は下役人を伴れて、山から這ひ出してみますと、折角持つて來た、綿入も頭巾も耳袋も手袋も足袋も毛靴も三味線も笛も太鼓も、小説本も、おまけに鐵砲も刀も、何一つ残らず、すつかりオロシヤ人を持つて行かれてゐました。

戸田又太夫は、地圍太踏んで口惜しがりましたが、今更どうする事も出来ませんでした。ところが、不思議な事は、あれ程鐵砲をうちかけられたのに、土人にも役人にも、誰一人負傷した人がありませんでした。

拙者は確かに脊中を打ち貫かれました。』

拙者は確かに後から頭をやられました。』

拙者は肩の所を……』

拙者は、刀に手をかけた時、右の手を……役人達は口々に、そんな事は申しましたが、さう

いふ連中は、みんな生きてゐて、かすり疵一つ受けてゐません。

どうしたワケだらう？と云つて、其後段々調べてゐるうちに、土人がオロシヤ人の持つてゐたらしい、鐵砲彈を容れた袋を一つ拾ひました。

中を調べてみますと、中には十八個の彈がありましたが、しかしそれは、みんなウドン粉を煉り堅めて、黒く染めた彈丸でありました。

オロシヤ人の射ち出した鐵砲彈が、ウドン粉の煉玉だと知つた戸田又太夫初の百五十人の下役人達は俄かに勇氣を出して、

『オロシヤ人の千人や二千人攻めて來たつて、吾々はびくともしないぞ！さあ何時なりと攻めてござれ。目に物見せて呉れん！』と言つて腕をたゝきながら、強がりましたといふ事です。まさか、そんな事はありますまいが、或古い書物に、此のお話を面白く書いてありました。(をばり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

天の川

東京府 目黒町 伊藤 駿二

天の川はさあむいなお星がキラ／＼

てうちんさげて

わたつてく

はだしであんよが

冷たかろ
三日月お舟に
のつてわたれ

寒い

山梨縣多
摩郡 篠原 良信

お空がくもつて

寒い風

山で木を切る人だちが

とろりとろりと
火を燃やす

鈴のうた

神奈川県 逗子町 河邊すみ子

りーんりーん

りーんりーん

鈴蟲うたふ

鈴のうた歌ふ

りーんりーん

りーんりーん

お月もきいてる

お星もきいてる

わたしもきいてる

すーらん

千葉縣東
葛飾郡 中村 政恵

すーらん／＼鈴ならせ

ちんから／＼鈴ならせ

すーらんすーらん

鈴ならせ

おぼろ月夜に鈴ならせ

死んだ金魚

東京都府立
舞鶴高女 松本 衣子

一〇六

お池の金魚が

死にました

まつかい夢見て

死にました

何も云はずに

死にました

まつかい夢みて

死にました

となりの屋根

奈良縣神
原郡 藤田 一枝

とりのり

おうちの

屋根みれば

野原のやうに

草だらけ

時どき

すゝめが
あそんでる

こたつ

山梨縣多
摩郡 近藤 晃

かんかんおきてる

こたつのひ

三人だまつてあたつて

らんぶがかんかん

ついてゐる

案山子

山梨縣
小淵澤村 田中 富重

つるは切れても

おどしの案山子

弓に矢ついで

立つてます

寒いおくにの風が来た

熊本縣
宮地町 渡邊 徹之

雨だれ

高知縣
中村町 永橋 大介

ボツチリ／＼

夜中の雨だ ボツチリコ

タスキのかあさん

傘さして

あまざけかひに

どとかひに

秋の夜

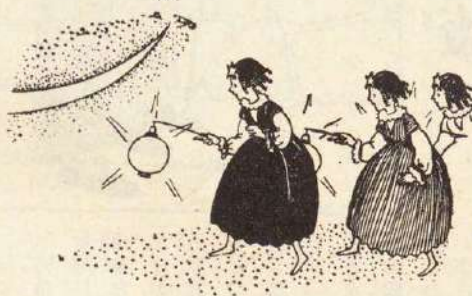
臺北市
旭校 武藤 珍子

たたみがつめたい

きりこがとんで

きてないた

あきのよる



風は北風 北の國
北のお國の葉を落し



奇名鳥譚 名曲 嘆きの薔薇

三井 信 衛

一〇八

その一 銀籠さげて

1 音楽の弾き手は？

神戸の山手にある市田家の廣いお邸には、逸雄といふ十三になる少年と、それから河野といふ忠僕だけが住んでをりました。逸雄の父も母もすつとの昔にこの世を去つて、お邸はいつも閑りとした寂しさに包まれてをりました。だが折々、得も言はれぬやうな美しいグアイオリンの音が、まるで遠い夢の國からの消息のやうに、高く低くひびいて來るのでした。何十年を経た老木が、お邸の周りをすつかりと包んで、何處にお家があるのやら、それさへも分り

ません。その木々の周りを歩いてゆく人たちが、圖らずも美しい音楽の音をきいて、

「あゝ、何といふ好い曲であらう」と語り合つても、一體それが誰の手で弾かれるのやら、少しも見當がつかなくつたのでした。その曲こそは、今から十年前グアイオリンの名手としてその名を謳はれた、逸雄の父市田四郎が弾いてゐると、何の違ひもなかつたのです。だが、父の死んでから十年経つた今、何者が其曲を弾いてゐるのでせうか？少年逸雄でせうか？それとも忠僕の河野でせうか？さて話變つて、ある暖い春のことでした。お邸の近くを、ひそひそと話しながら歩いて來る二人

の青年がありました。その一人は日本人で、もう一人はドイツ人——大きな驚のやうな鼻には、セルロイドの鼻眼鏡をかけてをりました。恰度二人が市田家の門前に來た時、お邸の中からは、あの美しい曲が流れて來ました。

「成程、まるで死んだ音楽家の、市田四郎が弾いてゐるやうだ」ドイツ人は流暢な日本語で言ひながら、しばらくはちつと耳を傾けてをりました。

「さあ、シュライツ君、行かう。」日本人がかう言ふと、二人は夢から醒めたやうに、急ぎ足で門の中に入つて行つたのでした。二人が玄關に立つた時、そこへ偶然出て來たのは、市田四郎の忘形見—

少年逸雄でした。その美しい大きな眸は、父とそっくり生き寫しでした。

「おゝ、坊ちゃん！」不意に呼ばれた少年逸雄は、思はずびりと立ち止まりましたが、不思議さうに二人の姿を眺めたのでした。

「君が逸雄君かい？」

「えゝ、僕逸雄です。あなたは？」

「僕は森と言つて、この人はシュライツ君と言ふんだ。變なことを訊くが、時々このお邸から聞えるグアイオリンの音は、一體誰が弾いてるんだね？君かい？」

「あゝ、あのグアイオリンですか……」聞いて逸雄は、さも面白さうに「はゝゝゝ」と笑つたのでした。

「あなた方はそれが知りたくつてわざ／＼行らつしたんですか。」

「あゝ、さうだよ。」

「そんなら、今お目かけますよ。直ぐこゝへ持つて来ますから、待つて下さい。」

言ふなり逸雄は、飛ぶやうに石段を上つてお邸の中へ入つてしまひましたが、それを眺めた二人は呆氣に取られて佇んでをりました。今言つた逸雄の言葉から察するとあの名曲を吹き込んだ蓄音器でもあるのだらうか……？

と、その時、廊下にはたゞ／＼足音がして、再びそこに現れたのは逸雄少年。その姿を見た二人の青年は「あつ！」と同時に聲立てたまゝ、暫くはそこに棒立ちとなつ

てしまひました。

少年逸雄の右の手に提げてゐたものは、姿も美しい一匹の九官鳥。銀籠の中にバタ／＼と羽ばたきながら「イッヲ！ イッヲ！」と啼いてゐるではありませんか！
「うう……九官鳥！ 二人は聲を揃へて、唸るやうに言ひました。」小父さんたち、グアイオリンをやつてゐたのは、この鳥ですよ！ 逸雄はさう言つて、二人の前に鳥籠を置きました。

2 名鳥の名曲

父の市田四郎が亡くなつたのは今から十年の昔、恰度逸雄が三つの時でした。けれどもそれから十年の間、父に別れた逸雄もこの鳥

の唄ふ曲を聞いては、亡き父の面影を偲んでゐたのです。この九官鳥は名を「珊瑚」と言つて、父が遙々遠いオランダの國から、たくさんのお金を出して買つた名鳥でした。そんな名鳥でしたから、とりわけ音楽なら、人の唄つたり弾いたりしてゐるのと、寸分の違ひもなく真似ることが出来ました。しかもこの「珊瑚」は、父の彈いてゐたグアイオリンの音を、来る日も／＼聞かされてゐたので、十年の月日の経つた今も、父の弾く曲と少しの違ひもなく唄ふことが出来ましたから、まるで音楽家市田四郎が、再びこの世に生れ變つたと思へない程でした。

さて、九官鳥の「珊瑚」をつく

づくとき眺めてゐた森は、今更のやうに言ひました。

「ふう、九官鳥！ 九官鳥とは全く驚いたね。どうだね、シユライツ君。」

「僕も驚いた。九官鳥とは意外だ！」ドイツ人のシユライツも、思はずドイツ言葉でかう言ひました

が、やがて森は言葉を改めて、「逸雄君、僕達に一つ頼みがあるんだが聞いてはくれないかね？」突然さう言はれた逸雄は、一寸面喰つて黙つてをりました。

「僕に頼みつて何なの？」
「外でもないが、この九官鳥をほんの暫く——さうだな、一週間か十日間程、僕たちに貸してはくれないかね？」

「さあ……」

熱心な森の願ひに、逸雄も困つてしまひました。こんな頼んでゐるのに、このまゝ断るのは氣の毒になつてしまひました。

「ぢやあ一寸待つて下さい。一度河野に訊いて見るから……」

さう言ふと逸雄は、二度ばかり大きく「河野！ 河野！」と呼びました。父母が死んだ後は、何事も忠僕の河野がお邸の萬事を司つてゐたからです。今、逸雄に呼ばれて玄關口に現れたのは、鼠色の背廣を着た河野——年のころは三十五六でしたが、長年さまざまの艱難を過して來たせめか、もう四十以上にも見えしました。玄關の石段に立つた河野、そこに置かれ

た九官鳥の籠を見ると、思はず「あツ！」と聲立てたのでした。

「お、逸雄さん！ むやみと「珊瑚」をお出しになるんぢやありません。さア、早くお藏ひなさい。」

「この小父さん達がね、九官鳥を暫く貸してくれつて言ふんだよ。」

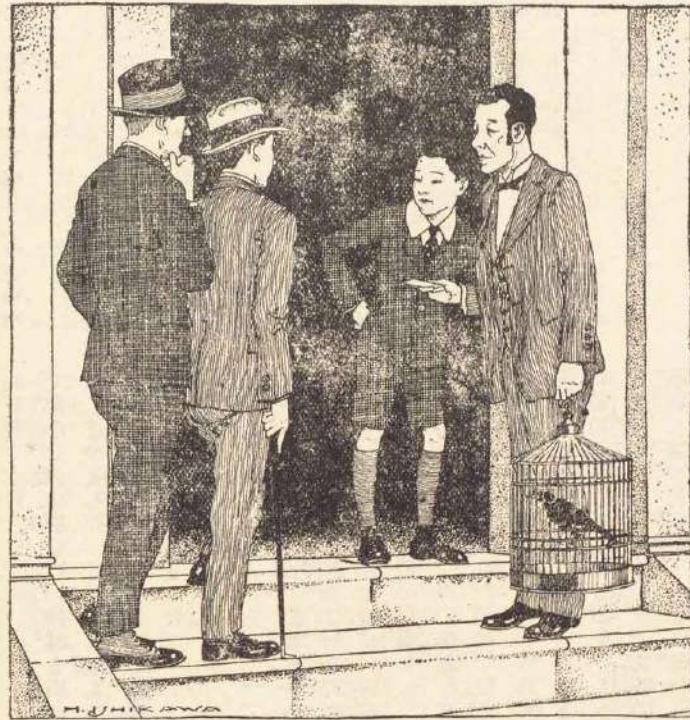
「め、滅相もない」河野はびつくりして、二人の前に近づきました。

「お二人方、折角だがこの鳥は、お邸の外へ出す譯に行きません。」

「うゝ……」と森とシユライツは失望の聲を出しました。

「お氣の毒だが、お貸し申す譯には参りません。……だが、一體あなた方は、この九官鳥を借りて何うなさらうと言ふん……？」

「あゝ、其お疑ひは御道理です。」



森は今更氣づいたやうに、ポケットから名刺を取り出しました。それを手にとつた河野の側に、逸雄も近づいて眺めました。そこにはかう書いてあつたのです。

森 昌 吉

東京市日本橋區一丁目
亞細亞蓄音器會社

『ふう、亞細亞蓄音器會社……』河野は獨り言を云ひました。亞細亞蓄音器會社と言へば東洋でも一二を爭ふレコード製造會社です。『外でもありませんが……』再び語り出したのでした。『亡くなられた市田四郎さんは日本はおろか世界でも有名なグアイオリニストでした。ところが市田さんは蓄音器に吹き込むといふことは、なぜかお断りになつてをりました。しかし、あの市田さんのお弾きになつた名曲の「嘆きの薔薇」が、もう聴かうとして聴かれないのは、何といふ残念なこととせう！』

その時、森の語つた「嘆きの薔薇」といふ聲をきくと、籠の中の九官鳥は、得も言はれぬ美しい聲で、一つの曲を奏し始めたのでした。おい、それこそは今語られた「嘆きの薔薇」の一曲！ 居合す四人の人々は、その美しい咽び泣くやうな旋律に、思はず聲をのんで、おいと聴き入りました。

3 初めて知つた芳雄少年

「あゝ、何といふ巧みな曲とせう

か！ しかも九官鳥の奏するその曲には、朗らかなピアノの伴奏さへ入つてをりました。さすがにこの九官鳥の『珊瑚』は、名鳥と言はれるだけありました。だが端なくもこのピアノの伴奏が、何ヶ月かの後に、一つの事件を解決させるに至るとは、果して何人が氣づき得たでせうか？

話は元に戻つて、九官鳥が奏し終ると、夢から醒めたやうに、河野は言ひました。

「森さんとやら、あなたの御希望はわかりました。つまり、この鳥の聲を蓄音器に入れて、そのレコードを世の中に賣り出したいと仰有るんでせう？」

「さうです。恐れ入りました。」

まんまと胸中を見ぬかれて、森はすつかり恐れ入つてしまひました。シユライツも顔を赧くして、笑つてしまひました。今は河野も逸雄も、二人の青年の訪ねて來た理由もわかつたので、前よりは餘程親しみを持つことが出來ました。さうして顔を赧くして恐縮してゐる森とシユライツの様子は、決して悪い人には見えませんでした。から、河野はやがてこの二人を應接間に入れたのでした。

やがてそれから二十分、三十分、逸雄はお庭の運動場で、只一人遊動圓木に乗つてゐました。

すると、不圖遊動圓木にゆられながら五六間の方を見ると、こんもりと茂つた木々の間に、一人の

少年が花を摘んでをりました。この市田家のお邸でも、逸雄の運動場になつてゐるこの邊りは、ほんの低い四つ目垣が廻らしてあつたので、時々近所の子供たちや山手に住む西洋人の子供などが、栗や柿の實をとりに来たり、春になると花を摘みに入つて來ました。今、一心に花を摘んでゐた少年は、不圖逸雄の方を振り返ると、につこりと笑つてお辭儀をしたのでした。年のころは十七八で、雪のやうに白い運動服を着てをりました。

「だつて、君に言はないで花を摘みに入つたんだもの。」
「いゝんだよ。花なら幾らでもやるよ。もつと摘み給へ。」
「有難う」少年は嬉しうに言ふと、逸雄の方に近づいて來ました。
「僕にも乗せてくれ給へな。」
「あゝ、いゝよ。」
逸雄が運動園木を少し緩めると少年は直ぐにそこへ飛び乗つたのでした。

「君はお父さんやお母さんがあるの？」逸雄は自分の身に較べながら訊きました。
「いゝやゝゝ」寂しうに芳雄は目を伏せるのでした。
「ないの？」
「哀しげに背いた芳雄を見ると、逸雄も哀しくなつてしまひました。『僕はね、こんな大きなお邪にゐるけど、只つた一人ぼつちなんだよ。……君の家は何處？』
けれども何故かしら芳雄は、そ

れにはハッキリと答へなかつたのでした。するとその時芳雄は、こゝんもりと生ひ茂つた森の中で、聲高らかに唄ひ出しました。
「僕の可愛い弟は黒い瞳に紅い唇人形のやうな頬をして抱かれながら眠ります」
「あゝ、その歌は僕聞いたことがあるよ。」
逸雄は思はずかう言ひました。たしかに芳雄の唄つたその歌は何處かで聞いたことがありました。しかもその歌の聲さへ、逸



雄には何處かで聞いたことが、あるやうに思はれてなりません。けれども一體何處で聞いたのやら、少しもわかりませんでした。
「今に君にも分る時がくるよ。」
何となく謎のやうな芳雄の言葉抑々この芳雄といふ少年は、何者でありませう？
不圖逸雄がこの疑問を抱いた時、玄關の邊りから、逸雄さん！と呼ぶ河野の聲が聞えて來ました。

4 蓄音器會社へ
圖らずに親友になつた芳雄と再會を約した逸雄がバタ／＼と玄關に騙けてゆくと、恰度そこには先刻の二人の青年——森とシユライツとが、嬉しうに微笑みながら立つ

てをりました。さうしてその後からは河野が、九官鳥の籠をさげて行んでゐるのでした。

「逸雄さん、このお二人が熱心にお頼みになるんで、今日一日だけ九官鳥をお貸しすることにしましたよ。しかし、大切な鳥ですからこの方にお渡しはいたしません。」

「ぢやあ何うするの？」

「この方々をお疑ひするやうで悪いが、今こちらから持つて、伴いて行くといふことにお約束しました。恰度、神戸の海岸通一丁目は亜細亞蓄音器會社の支店があるので、そこでレコードに吹き込むことにしました。」

さう言つて河野は、逸雄の前に一箱の誓約状を見せました。そこ

には、吹き込んだレコードには九官鳥の名を記すことや、さては又九官鳥を携へた市田家の人が、レコード吹込場の有様を口外してはならないことなどが認められてありました。これはレコードを吹込む時には、誰もが誓約する事柄なのです。

「ぢやあ河野、こちらかこの鳥籠を持つて、亜細亞蓄音器會社へ行くんだね」

「えゝ、さうです。」

「それなら僕が行かうか？」

「逸雄さんで大丈夫ですかね？」

「大丈夫だよ。」

やがてシユライツと森とが、くれぐれも河野に頼んで歸つて行く、市田家の自動車庫からは、一

らそこに行かうと言ひ出したのも至極道理のことです。

やがて爆音と共に自動車が停ると、そこは早くも海岸通一丁目、亜細亞蓄音器會社の門前でした。たくさんの人たちは門の前に立つて、鳥籠を提げた逸雄を出迎へに來てをりました。逸雄の姿を見た森とシユライツは、

「いろ／＼と有難うございます。

さあ、こちらへお通り下さいまし」と言つて、逸雄をとある一室に

案内したのでした。そこはレコードの吹込室で、さまざまの設備のうちに、大きな吹込喇叭が部屋の中程に突き出てをりました。

「それでは逸雄君」と森は言ひました。嘆きの薔薇を一つお頼み

しますよ。」

言はれて逸雄は、銀籠の中から九官鳥を取り出して、それを兩手に抱きながら吹込喇叭の前に立つたのでした。いつものやうにちいつと抱きながら、名曲「嘆きの薔薇」のヴァオリンの體を、口笛でいくさり唄ひました。長い間逸雄と河野に慣らされた九官鳥の珊瑚はいつもかうしていくさり最初の節を唄ふと、直ぐに美しい聲で、その後をつづけるのでした。

だが、一體どうしたといふのでせう。いつもは朗かに唄ふ珊瑚が、今はまるで啞の鳥のやうに、ちいつと黙つたまま、ばた／＼と羽ばたきをして、逸雄の手から逃れようとするではないか！

臺の自車が門前に廻されたのでした。びか／＼と光る銀籠を提げた逸雄は、やがてその自動車に乗りました。

「ぢや逸雄さん、氣をつけて行つしやい。」

「あゝ、大丈夫だよ。」

逸雄の聲と共に自動車は滑るやうに、お邸を離れて行きました。常日頃から珍しいものが好きで、わけでも新しい科學的の知識を得ようと熱心になつてゐた逸雄は、レコー吹込の有様を見ることが出来るといふので、どんなにか喜びました。吹込場の設計といふものは、會社々々によつて皆獨特なもので、その獨特の内部を見ることが出来ると思ふと、逸雄少年自

「珊瑚や、珊瑚や。」

と含めるやうにさう言つた逸雄が、何氣なく九官鳥の姿を見た時俄かに「あッ！」と、その場に危ふく倒れかゝつたのでした。これは又何といふ奇怪な出來事

でせう！ 今が今まで珊瑚だとはかり思つてゐた鳥は同じ九官鳥ではあつても、汚い羽を持つた見も知らぬ鳥ではありませんか！

逸雄の叫び聲によつて、シユライツと森とは同時に駆け寄つて來

ました。

「逸雄君、どうしたんだ！」

「あゝ……」と逸雄は眞青になつて「森さん、何うしたつて言ふんでせう！ 僕の九官鳥ぢやないんです。珊瑚ぢやないんです……」

懸賞大募集

◇牛の郷土童話◇

金ペー　こ（一等當選）……荒井正巳
 主人を助けた牛（二等當選）……刈田謙三
 たらちね明神（三等當選）……土橋力
 牛沼物語（佳作）……松尾芳男
 蜜蜂と牛の戦（佳作）……西依ひでを



「えッ！」と二人は驚いて、今更のやうにその鳥を眺めました。

「お邸を出る時も、自動車の中も僕は膝の上に鳥籠を置いたまゝで

した。だのにいつの間にかこんな鳥とすり替へられてあるんです。」言ひながら、その側に置いた銀籠を眺めると、それは珊瑚の入つてゐたのと寸分の違ひもない鳥籠でした。

森とシユライツは同時に叫びました。俄かに蓄音器留社の中は大騒ぎとなりました。何萬圓もする貴いオランダの名鳥、第二の市田四郎とも言ふべき得難い名鳥、それを盗んだものは何人であらうか。

逸雄は直ぐさま自動車に乗つて警察に届け、さうしてお邸へ向つて進みました。揺れてゆく自動車の中で不圖逸雄の目に浮んだものは、森とシユライツと、さうしてあの少年芳雄の顔！　だが、果して犯人は森であらうか？　シユライツであらうか？　盗まれた一びきの九官鳥によつて、端なくも意外の大事件が、市田家を包むこととなるのです。（つゞく）

選後に

沖野岩三郎

最後に残つた四篇のうち、私は荒井氏の「金べこ」を第一位に推しました。牛が大の代りになるといふ話頭が、既に人の好奇心を唆るに十分な上、話題が意外から意外へと進んで行くのが、大變面白く思ひました。金兵衛爺さんと熊の子とは、元々仇敵同士であるべき筈なのに、却つて其の熊の仔が金兵衛爺さんを助ける事になるといふ筋に、牛の行爲が挟まつて、少しの無理もありません。書き方にも、少しの嫌味がなくてよろしいございました。日本の角力といふものが、牛の角突合を見て眞似出したのだといふ傳説など思ひ合せて、私は此のお話を第一位に推しました。「主人を助けた牛の話」と「たらしね明神」の二篇は殆ど甲乙をつけかねました。「たらしね明神」は文章も確かだし、叙述も面白いが、何となく讀んでゐるうちに、恐怖と氣味悪さとが伴つて來ます。夫れからこれは、餘りに數ある傳説のタイプである事が、筆者の損になります。「主人を助けた牛の話」は、總てが、かつちりと纏つてゐます。實際に牛といふものを知つた人でなければ書き得ない筆つきです。私はいろいろと思ひ迷つた末、たう

とう
一等 金べこ
二等 主人を助けた牛
三等 たらしね明神
荒井正巳氏
劉田謙三氏
土橋力氏
といたしました。此外に松尾芳男氏の「牛沼物語」といふ大變面白いものが、何度も、讀返されながら、私の机の上に載つてゐましたが、たうとう夫れは選外佳作といふ事にいたしました。



金べこ

荒井正巳

昔、磐城國松枝村と云ふ處に、金兵衛爺さんと云つて、大層爺の好きな爺さんがありました。この爺さんは一匹の牛を飼つてゐて、爺さんが獵に行くときには、この牛を犬の代りに連れて行くのでした。そして歸りには鹿や猪等澤山な其の日の獲物をこの牛に負はせて來るのです。この牛も又奇妙に獵に行くのが大好きで、獲物が多ければ多程如何にも嬉しうにして、輕々とその獲物を背中に載せて、元氣よく家路に著くのが常でした。
或る年の暮のある朝のことでした。爺さんが何日もの様に早く起きて見ると、野も山も一面の銀世界で、獵にはもつて來いなので、すつかり喜

んでしまつて、牛の乳を搾つてしまふと、早速牛を連れて山の中へと奥深く進んで行きました。ところがどうしたことか、今日に限つて一つも獲物がありません。爺さんもすつかり気が焦々としてしまつて、思はず、今迄に來たことの無い奥深い所まで踏み込んでしまひました。

夕暮近くなりあたりの樹々の蔭が段々と薄暗くなる頃になつて、はじめて爺さんが氣がついてさて歸ることにしようと思つてすつかり悄けながら、俛れてゐた頭をあげて、ふと前の方を見ると僅か數十歩ばかり前のところに、一つの大きな洞穴があるのに氣が付きました。

『めめた！ 熊だく。』

爺さんは思はず、口の中であう呟きました。長いこと獵をしてゐる爺さんには、直ぐそれが熊の穴だと云ふことがわかつたのです。そこで爺さんは足音を忍ばせながら、その穴に近づいて薄暗い中を覗い

て見ると、案に違はず何か黒いものがむく／＼と動いて居ります。そして、爺さんが覗いてゐるのに氣が付くと、靜かに身を起して、低い咆哮聲を出しながら此方へ近づいて來るのです。けれども爺さんは落著いて、やをら弓に矢を番ひ、狙ひを定めて射放ちますと、流石の熊も爺さんの手際には一堪りもなく月の輪を射抜かれて、其の場に斃れた儘息が止つてしまひました。

爺さんはすつかりはく／＼してしまつて、牛を連れて洞穴の中へ入り、獲物を牛に載せようとする、洞穴の奥の方で何か又物音がするではありませんか。爺さんはハツとして、狼狽へて弓を取りあげ、狙ひを定めてよく見ますと、これはしたり、未だ眼の開かない二匹の仔熊が此方へ向つて這つて來るのです。その姿があまり可愛いので、爺さんも思はず、引きしぼつた弓の弦を緩めて、此方へやつて來るのを待つて居りますと、仔熊は親の殺されたのも知ら

ずに金兵衛爺さんの牛の方へやつて來て、その足にからみついて宛然親熊に乳を求めてゐる積りでゐるのです。すると牛も又、その仔熊をかはる／＼、抵めてやつて、やはり親熊が仔熊を可愛がる様な風なのです。

『やれ／＼可哀さうに。』

と爺さんも考へましたが、今更どうとも仕様がなないので、仔熊をそのまゝ穴の中に残して急いで家路に著きました。ところが、今日に限つて牛は何だか元氣なさうに首を俛れて、いつもの様にまるで躍る様にして歸るのとはまるで違ふのです。爺さんも不思議に思ひましたが、多分獲物が少いからだらうと思つて、別段あまり氣にも留めず、歸ると直ぐその日の疲れでぐつすり眠り込んでしまひました。さて翌朝になつて金兵衛爺さんは、何日もの通り起きると直ぐ、牛小屋へ行つて乳を搾りに取り掛かりました。ところがこれは又どうしたことせう。昨日

まであんなになみ／＼と桶に溢れる程出た乳が、一滴も出ないぢやありませんか。

爺さんはすつかり驚いてしまひました。爺さんは毎日この牛の乳のお蔭で暮してゐるのですもの、驚くのも無理はありません。でもまあ爺さんは、明朝になつたら出るのだらうと諦めて、その朝はその儘にして野良に稼ぎに出掛けました。

さてその翌朝になつて、爺さんが例の通り乳を搾りに牛小屋へやつて參りますと、これはしたり、これも又昨朝と同様一滴も出ないぢやありませんか。

爺さんはもう少しで泣き出しさうになりましたが、又その翌朝こそはと思つて、その翌朝になつてやつて參りますと、これも又前と同じことです。

『これは夜中に誰か來て、乳を盗んで行くのに違ひ無い。よし、今夜は一番番をしてゐてやらう。』

爺さんはかう獨り語を言つて、三日目の夜になると牛小屋の傍にかくれて様子を窺つてゐました。や

がて十二時を告るお寺の鐘が鳴り響いてあたりがシンと静まりかへる頃になりますと、今迄牛小屋に凝としてゐた牛がひとりで牛小屋を抜け出して、野原



に茂つてゐる甘さうなやはらかな草になんか目もくれず、やがて野原を通り越して爺さんが何日も獵に行くと天明山の麓の暗い森の中へと歩み續けるではあ

の方へと夜露を踏み分けて歩き出しました。
「彼奴め、腹が減つて草を食ひに出掛けるんだな。」
爺さんは心の中であう獨り合點しながら、向も跡をつけて行きますと、驚くことには、牛は野原一面

りませんか 爺さんは益々不思議になつてしまつて向も跡をつけて行きますと、やがて森を過ぎ、溪に添うて、向も奥へへと進んで行くのです。月の光はこんもりと茂つてゐる樹々の間を通して、行手に

斑な影を投げ、谷川の流ればすつと上流の方では瀑をつくつて、ゴ—と云ふ物凄い響きを立て、直ぐ目の前では月の光にキラ—と金色や銀色に光つて、数知れぬ魚が白い腹をちらつかせながら泳いでゐる様です。爺さんは寂しいやら氣味が悪いやらで思はずづつとして、白い月の光が薄ら寒い夜風と一緒に

も又、牛を自分の親のつもりで一生懸命うまさうに乳を飲んでゐるのです。
これを眺めた爺さんは、思はずほろりとしてしまひました。

やがて氣をとみなはして、向も牛の跡をつけて行きますと、牛はやがて峻しい崖を踏み越えては又森を過り、森を過つては又溪を渡りして、何時の間にか金兵衛爺さんが前に熊を射止めた洞穴のあるところへやつて参りました。爺さんは胸を掻かせながら、岩の陰にかくれて牛の様子を窺つてゐますと、牛はやがて洞穴の中へ姿をかくしました。

その中に里の方で鶏が鳴いて東の空が明るくなり出しますと、牛はさも名残り惜しさうにして仔熊を舐めてやりながら、仔熊が乳房にしがみついてゐるのをふりはなして、洞穴を出ようとしみますと、仔熊は向もあとについて來ますが、牛は急いで里の方を指して下りて行きました。

爺さんもそのまゝ家に歸りましたが、牛には何事も知らない振りをして、別段夜に牛を繋いで寝ることもせず、そのまゝに放して置き、自分はそれから一切獵を止めて、ひたすら仔熊が大きくなつて乳をのまない様になるのを待つてゐました。

それから暫く経つてその翌年の暮になりました。この頃ではもう仔熊も大きくなつたと見えて、牛も

りませんか。牛は宛然自分の仔でも可愛いがる様にして、二匹の仔熊に乳を飲ませてゐるのです。仔熊

も

元の通り澤山乳が出る様になり、爺さんも元の様に暮しも樂になつたので、大層喜んで居りました。

ところがこゝに一つ、爺さんにとつて一大事が起つたのです。それはこの地方の習慣として毎年雷神様のお祭りの當日には、その境内で各村から選ばれた強い牛に喧嘩をさせることになつてゐるのです。ところがこの三年と云ふものは毎年立谷村の甚兵衛爺さんの黒牛と言ふ有名な強い牛が勝ち續けて、金兵衛爺さんの住んでゐる松枝村で選んだ三匹の牛も毎年この黒牛のために負かされてしまつたのです。さて今年は一體誰の牛にしたものだらうと云ふので、松枝村の人達はよるとさばると此の噂でもちきつてゐるのです。皆は毎年々々黒牛にはかり勝たれるので、口惜しくて堪らないが誰も自分の牛を出さうと云ふ者がありません。

「今年はお出さぬことにしようか。」と誰かと言ひますと、又一方では

「さうするより他に仕方があるまい。眞野村なんかも出さないさうだから。」

とこれに賛成しますと、又他の一方では

「いや出さないと云ふのは松枝村の恥だ。」

と言つて中々纏りません。すると誰言ふとなく、「金兵衛爺さんとのこの金牛はどうだらう。」と申しますと、

「うむ、金兵衛爺さんとのこのなら、體も大きいしするから、大丈夫だらう。」

と他の一人が之に應じて、もうすつかり金兵衛爺さんの牛が一番いいと云ふ事に決めてしまひました之を聞いた金兵衛爺さんはびつくりしてしまつて「滅相もない、わしにはたつた一匹の大事な牛ですよ、眞平御免だ。」

と言つて斷りましたが、村の人達はもうすつかり金兵衛爺さんの牛でなければ駄目だと決め込んでしまつて中々承知しません。その中に今度は公に庄

屋様から、今年はお村の代表として金兵衛爺さんの金牛を出せ、と云ふことを申し渡されたとき、爺さん



はもうすつかり顔が眞蒼になつて、ぼろり／＼と涙を落してゐましたけれども、村のためとあれば仕方

が無いと諦めて、せめてその日までとも牛を大事に可愛がつてやりました。

さて、いよいよその日になつて、爺さんは庄屋様に件はれながら牛をひいて村を出ることにになり、と、村の子供達はそれとからぞろ／＼ついて來て、

金牛

立谷の牛に

負アけんな

と皆して囃し立てゝ呉れました。けれども金兵衛爺さんは、元氣なく頭を低れてゐました。金牛も又自分の悲しい運命を知つてゐるかのやうに、やはり首を低れて爺さんに引かれて行くのは見るからに可哀さうでした。雷神様の境内に著きますと、もう竹矢來の圍りは人で一ぱいになつて居り、口々に今年も又黒牛が勝つたらうとか、金牛が可哀さうだとか、云つてがや／＼騒いでゐましたが、金兵衛爺さんや

金牛の可哀さうな姿があらはれますと、皆黙つて静かになつてしまひました。

その中に、用意の一番太鼓が鳴りはじめました。所がどうしたものか、相手の立谷村の黒牛が何時まで経つても影も形も見えません。又見物人がざわめきはじめました。どうしたのだらう？と思つてゐると、そこへ立谷村の使ひの者が息せき走つて来て「昨夜、甚兵衛さん所の黒牛が突然小屋から見えなくなつて終ひました。村中の者が、今朝から總出になつて尋ねましたが、何所にも見つかりません。しかし不思議な事には、甚兵衛さんの小屋の附近には大きな熊の足跡が一面に残つてゐました。で、多分熊にでも擔いで行かれたのでは無からうかと申してゐるのでございます。今迄私共の村へは、唯の一度も熊の出たことはないのですが、足跡から察しますと、どうもさう思ふより外はありませぬ。全く不思議なことでございます。だから、今日の金べ

こと黒べことの立合ひは、お見合せ下さいませやうに……」と申しました。これを聞いた金兵衛爺さんの喜びはどんなでしたらう。思はず人をかきのけて神主の前に進み出て、金牛が仔熊を養つたことから多分その仔熊が大きくなつて恩返しに自分の牛を助けてくれたのだらうと云ふことを詳しく物語りました。これを聞いた神主は、すつかり感心してしまひました。其日は立谷村の黒べこが出るので、どの村からも黒べこを恐れて一疋の牛も来ませんでしたから、神主はたつた一疋だけ来てゐた金兵衛爺さんの牛を全勝者と云ふことにして、澤山の御褒美を下され、金兵衛爺さんは面目を施して歸りました。今でも松枝村の子供達は、牛を見ると直ぐ、そのあとからついて来て

牛 牛 金牛
立谷の牛に負けんな

と言つて囃し立てます。

(作者住所 水戸高等学校寄宿舎内)



主人を助けた

牛の話

刈田 謙三

皆さんは金で有名な佐渡は知つてをられませうが、竹で有名な佐渡は御存じないこととせう。その佐渡は又強い牛が出るので名高い處です。身體は小さいけれど賢くて、大變役に立つ牛です。長く太い竹を山のやうに積んで、主人のために一生懸命に働く強い牛なのです。

昔、この佐渡に一人のお爺さんがをりました。大變親切で、いつもにこ／＼してゐて、島の人には誰でもそのお爺さんが好きでした。どんなに苦い顔をし

た人でもお爺さんの顔を見ると、お母さんの顔を見た赤ん坊のやうに、急ににつこり笑はずにはゐられませんでした。島の人が皆持つてゐるやうに、お爺さんにも一匹の大事は牛がありました。どんな人にも親切なお爺さんは、この牛を一番可愛がつてゐました。お爺さんには子供がなかつたので、一人息子のやうにこの牛を大事に養つて來たのでした。毎日仕事をすまして、家へ歸つた時には、きれいに身體を洗つてやつたり、美味しい草を澤山食べさせて、柔

かい葉の上に寝かしてやりました。ある時には、牛の大好きなお餅をやることもありました。それで、牛もまた、お爺さんの恩に感じて、どんなにつらい仕事でもいやがらずに、お爺さんをお金持にするため、一生懸命に働いてゐました。

それは氣持のいいお天氣の日でした。お爺さんはいつものやうに、山一つ越えた向うの港へ竹を賣りに行く用意をしました。牛の背中へ今日は少し餘計に竹を積んで、お辨當は自分で持つて行くことにしました。出かける時、お爺さんは牛の耳元へ口をよせて言ひました。

『いゝお天氣だなあ。今日はどつさり儲かつて歸らうよ。さあ行くぞ。』

牛は一聲高くウオーと吠えて歩き出しました。お爺さんも牛も今日はまた大變にいい氣持でした。何かいいことがありさうな氣がして、お爺さんは佐渡の端唄を軽く歌ひながら山路を歩いて行きました。

家にも、海の船にも、灯のつき始める時刻でした。

お爺さんは又牛を市場の小屋の所へつれて来て、澤山の草を食べさせました。だが、自分では家へ歸つてから食べる積りでをりました。それで、お爺さんは牛の脊中に乗つて言ひました。

『大分晩くなつたな。家迄もう一奮發しておくれ。』

然しどうしたものか牛はいつものやうにウオーと叫びませんでした。それでも温順しく元氣に歩いて行きました。お爺さんはそんなことに氣が付きませんでした。朝家を出る時考へたやうに、どつさり儲かつたのですから、晩くなつたのも氣になりませんでした。併しこんなに晩くなつたのは初めてでした。今度はどんなに晩くても、家の門口に着いた頃に、お日様が海に落ちて行くのが見られました。

牛は黙りこんで、聲を出さずに歩いて行きました。お爺さんは牛の脊中で、いゝ氣持で今日の商賣のことを夢のやうにばんやり考へてゐました。恰度山の

夏の始めだつたので、どの山も緑色をしてゐました。遠い海から吹いて来る風も、樹の間で啼いてゐる小鳥も、皆元氣よく笑つてゐるやうに、お爺さんには思はれたのでした。

山を越えて、港に着いたのは恰度お晝の御飯時でした。市場の小屋の傍に牛を繋いで、お爺さんは側の石に腰を掛けて御辨當を食べました。賑やかな人通りを眺めてゐると、大變御辨當が美味く思はれました。牛も澤山な草を食べて、時々ウオーと元氣に叫んでゐました。

それからお爺さんは、牛を引いて竹を賣り歩きました。お爺さんを知つてゐる港の人達にはこゝしなから『いゝお天氣ですね。』と言つて通り過ぎて行きました。海の方には二三艘の帆船が泊つてゐて、人夫達の元氣な掛聲が聞えて來ました。一船には澤山の竹の積んであるのが見られました。お爺さんが竹を皆賣つた時、お日様は山の彼方に落ちて、町の

頂上を越えて、下り坂を少しばかり來た時でした。

急に牛が前足で土を掘り返し始めたのでした。お爺さんがびつくりして、手綱を一生懸命に握つて、

『おーい、そんな處を掘つたつて何もありやしないよ。さあ晩いから、歩くんだ歩くんだ。』と言つても

牛は相變らず黙りこんで、掘り返してゐましたが、終ひに大きな穴をそこにこしらへました。それから

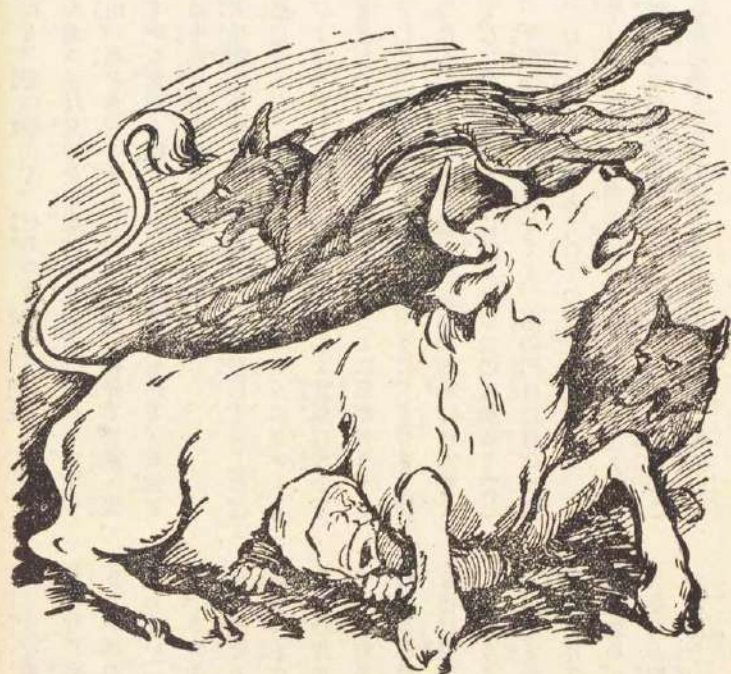
牛は身體を揺ぶり始めました。お爺さんが腹を立てて『此奴めが！』と叫んでも駄目でした。たうとう

お爺さんはその穴へ落ちこんでしまひました。すると牛は急に腹這ひになつて、穴の中のお爺さんの上に

に塞がりました。お爺さんはやつとのこと、土と牛のお腹との隙間から首を出して見ると、牛は傲然と

首をあげて四邊を見廻はしてをりました。お爺さんは此奴めが自分を殺すんぢやないかと思つて、下から牛のお腹を殴りましたが、何の甲斐もありません

でした。



それから少したつてからでした。すぐ近くで、ウオーと牛とはまるで違つた、大きな叫び聲が聞えました。お爺さんは穴の中で、思はずブルブルと身體を震はせました。その聲は、確かに狼の聲であるのをお爺さんはよく知つてゐたのでした。それから續けざまにウオー、ウオーと叫ぶのが聞えました。狼は二三四匹、思はれませんでした。する、見る間に三匹の狼の黒い影が、腹這つてゐる牛の上を跳び越えて行きました。そして牛の前から或は後から三匹の狼が牛の上を跳び廻るのでした。お爺さんは怖くて怖くて、穴の中へ小さくなつてゐましたが、やうやくの思ひで顔を出して見ると驚きました。牛は頭を上に向けて、大きな二本の角を左右に振り動かしてゐるの

が見えました。狼はと見ると、牛の上を跳び起える度に、その後足で牛の背中を蹴つて行くのでした。牛の角に足を取られたり、腹を突かれたりして、轉りながら落ちて行きました。それでも狼は牛の下に人間の居るのを知つてゐたと見えて、四邊が眞暗になつても牛を攻めるのをやめませんでした。お爺さんは牛の元氣な姿を見て少し安心しましたが、それでもあまり怖くて、段々頭がぼんやりして何も分らなくなつて來ました。狼は相變らずウオーと高く吠えては、牛を改め立てゝゐました。お爺さんは何だか分らずに、ブル／＼震へてゐました。だん／＼空が白くなつて來た頃には、狼も大分弱つたやうでした。三匹とも牛の角でやられたと見えて、口からタラ／＼と血を流してゐました。そしてたうとう狼はどこかへ逃げて行つて了ひました。その時初めてお爺さんはわれに歸へりました。お爺さんの眼にはいつばい涙がたまつてゐました。昨夕

牛が黙りこんで、土を掘り返したことも皆分りました。牛は静かに立ち上つて、ウオーと一聲吠えました。見ると牛の背中からは赤い血が、いかに痛さうに流れてゐるのでした。お爺さんはそれを見るとき、一層涙が流れ出て來ました。

「あゝ、有難いこつた。お前はわしを助けてくれたんだなあ。ほんとに可愛い奴だ。」

さう言つてお爺さんは牛を引いて、靜かに山を下りて行きました。お爺さんの眼からは、嬉し涙が出るばかりでした。牛は黙つて何も知らないやうな顔をして、お爺さんについて行きました。家へ歸つたお爺さんは、牛の傷をすつかり洗つてやり、牛の大好きなお餅をそれは／＼澤山、ほんとに山のやうに御馳走したさうです。

これは私が小さい時、越後の小母さんから聞いた本當にあつたお話しの一つです。

たらちね明神

土 橋 力



昔、富士山の麓の深い山の中に、小さい村がありました。その村に、藤二郎と云ふ若者と馬吉と云ふ狩人が、隣り合つて住んでゐました。藤二郎は炭を焼くのが商賈でしたから、人達から『炭焼の藤二郎』と呼ばれてゐました。かうして隣同志住んではゐましたが、馬吉は大變な意地悪で、何かにつけて人のいい藤二郎を困らせてばかり居りました。

或日の事です。藤二郎がいつもの様に、河野と云ふ山へ炭を焼きに登つて行くと、途中の深い

崖の上に、一匹の若い牝牛が係蹄にかゝつて苦しんでゐました。その頃は未だ、牛は野原をでも山をでも自由に駆け歩いて居りました。それは美しい牛で、角は磨いた貝殻の様にキラ／＼光り、美しい斑の皮膚は天鵝絨の様に滑べ／＼してゐました。牝牛は藤二郎を見ると、悲しさうな聲で何度も『どうぞお助け下さい』と云ふ様子をして鳴きました。藤二郎は根が優しい男でしたから、可愛さうに思つて係蹄を外してやり、係蹄に咬まれて痛さうな足の傷をも、丁寧に介抱してやりました。すると牝牛は、さも嬉しさうに一聲鳴いて、どことも知れず立ち去りました。

その時です。後ろの藪で、

『誰だ！ わなを外したのは！』と叫ぶ聲が聞えたかと思ふと、やがて馬吉が鐵砲を片手に躍り出ました。

『オイ、藤二郎、無断で人の係蹄を外すと云ふ法が

あるか。あの美事な獲物を何で逃がした。さあ見ろ、酷い目に合はしてやるから。』

大怒りに怒つた馬吉は、かうとなりながら鐵砲を振り上げて、藤二郎に打つてかゝりました。何も得物を持たない藤二郎は、一堪りもなく打ち据ゑられて、その深い崖の底へゴ／＼と轉げ込んでしまひました。

『いいきびだ！』

馬吉はさう惡口を云ひながらどつかへ行つてしまひました。

さて谷底へ轉がり落ちた藤二郎は、暫くはまるで死んだ様になつてゐましたが、その中に漸く正氣に歸りました。手からも足からも血が流れて、立たうとしても身體中が痛んで、身動きさへも出来ませんでした。それでも夕方迄かゝつて、蝸牛の様に這ひすりながら、漸く家迄歸り着いて、寢床の中であうん呻つてゐました。その明日になると、方々の傷

が昨日よりもつと酷く痛んで、とても苦しくて堪りませんでした。

さうして藤二郎が苦しんでみると、不思議にも見知らぬ美しい娘が一人尋ねて来ました。そして色々な親切に藤二郎を介抱してやりましたので、その甲斐があつてか藤二郎は、二三日の中にすっかり元の身體になりました。それにつけても藤二郎は、この知らない娘の事を考へると不思議でなりませんでし



た。

『さう云ふあなたは一體どなたですか。どうしてここへおいでになつたのですか。』

藤二郎がさう聞くと、娘は只美しくニコ／＼と笑ふばかりで何とも答へませんでした。藤二郎が又山へ仕事に行ける様になつても、不思議な娘は少しも歸らうとはしないで、色々親切に藤二郎の世話をしてくれてゐました。藤二郎はいよいよ不思議に思ひました。でも、何度聞いて見ても娘は只笑ふばかりで、どうしてもほんとの事を教へませんでした。さうしてゐる中に二人はあらためて夫婦になりました。

やがて二人の間には、可愛い赤ん坊が生まれました。夫婦の者はこの上もなく喜んで、大事に／＼育てました。母さんは殊に可愛がつて、よく赤ん坊を抱つこしては、乳房をふくませて上げました。母さんはお乳が特別によく出る性で、眞白な暖かい、い



いお乳が、いくら飲んでも盡きませんでした。恰度その子がやつと歩ける様になつた頃でした。もう秋も深くなつてだん／＼寒さが募つて参りました。或日の事お上さんが云ふには、

『これから冬の仕度、赤、青、黄の布帛を三反織りたいと思ひます。赤は坊やが、青はお前さんが、そして黄は私が着るのです。ですから、どうぞ七日の間だけ、私が仕事をするのを見ないでゐて下さい。一生の願ひです。』

『あゝ、いいとも。誰が見たりなんぞするものか。』藤二郎は確りとかう請け合ひました。その明日からお上さんは機屋に閉ぢ籠つて、

トン／＼カラリン、トンカラリン。

トン／＼カラリン、トンカラリン。

と篋の音も軽やかに機を織り始めました。そしてその間はお上さんは、御飯さへ少しも食べませんでした。始めの二三日は、約束もあるし、藤二郎も決して機屋を窺かうとは思いませんでした。五日六日とたつ中にお上さんの事が心配になつて来ました。『一體御飯も食べないで、どんなきれいな着物をこしらへる積りだらう。』さう思ふと藤二郎は、何だか

早く見なくて堪らなくなりましたが、でもやつと我慢してゐました。

七日目の朝仕事に出かけようとしてゐますと、

トン／＼カラリン、トンカラリン。

と云ふ箴の音が、今朝ばかりは餘計樂しさに聞えて參りました。で、藤二郎はとう／＼泳へ切れないうで、そつと隙間から機屋の中を窺いて見ますと、お上さんは恰度今、美しい黄の布帛を漸く仕上げる所でした。藤二郎は約束を破つた事を後悔しながら、逃げる様に仕事へ出かけて行きました。そして、その日藤二郎が山から歸つて見ると、何故かいつもの違つて家の中がひっそりとしてゐました。中へはひつて見ると坊やが只一人きりでそこに眠つて居りました。變に思つて機屋へ行つて見ると、そこにはもうお上さんは見えなくて、只機の上に、仕上つた美しい、赤、青、黄の三反の布帛と手紙が一通おいてあるだけでした。藤二郎が急いで讀んで見ると、

「今迄隠してばかり居りましたけれど、實を申せば私はいつぞや、河野で助けて頂いたものでございませう。あの御恩の萬分の一でも報じたいと存じて、今迄お傍に居りましたが、私は又河野へ歸ります。どうぞ坊やを大切に育てて下さい。」と書いてありました。そして其末に、

たらちねの親とはなれど河野山

草にかくるゝ我なりしかな

と云ふ歌を一首書き添へてありました。藤二郎はお上さんが残して行つた手紙を見ると、今更の機に、『約束を破つて誠にすまない事をした。』と思ひました。けれどいくら歎いたとて、今となつては致し方ありません。やがて眠つてゐた坊やも、眼を覺まして泣き出しました。

『母ちゃんおつばい。母ちゃんおつばい。』と泣き叫んで、いくら有めても聞き入れません。お腹が空いて泣く赤ん坊を見てゐるのは可哀さうでならない

し、藤二郎はほと／＼弱つてしまひました。

『仕方がない。河野へ行つて見よう。又母さんに達へるかも知らない。』と思つたので、藤二郎は泣き續ける坊やを連れて河野の山へ出かけて行きました。そして牝牛を助けた所まで来ますと、道場の藪の中から、乳房の一ぱい張り切つた牝牛が一匹ふいに出て來ました。藤二郎は思はず、

『あゝお前は。』と云つて近寄りますと、牛は、

『さ、おつばい上げよう。たんとお上り。母ちゃんは今坊やの泣き聲を聞くと、大急ぎでやつて來ましたよ。』と云つてゐる様に見えました。藤二郎はお乳を搾つては子供に飲ませました。

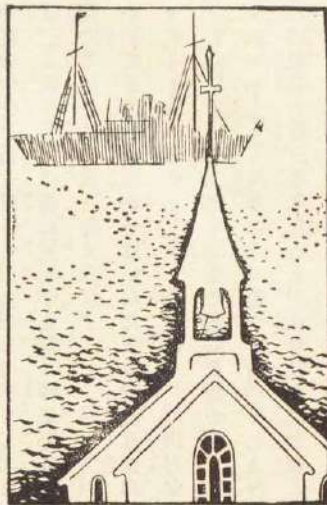
やがて子供はお腹が一ぱいになると、泣き止んでスヤ／＼と眠り始めました。牛は優しい眼付をして、しげ／＼藤二郎と坊やの寝顔を見つめてゐましたが、やがて又藪の中へ歸つて行つてしまひました。翌日も亦日暮になると、坊やはお乳を戀しが

つて、『母ちゃんおつばい。母ちゃんおつばい。』と泣いて仕方ありません。そこで藤二郎は又河野の山へお乳を貰ひに登つて行きました。するとやはり前の牛がやつて來て、おいしいお乳を坊やに飲ませてくれました。其明日も／＼それから毎晩藤二郎は泣く子を連れてはお乳を貰ひに河野へ出かけました。で、坊やは不思議にも、村のどの子よりも達者に、すん／＼大きくなつて行きました。

その後河野の山には、其の牛の出で來たと云ふ邊に『たらちね明神』と云ふお社が築られました。お社の前の石碑には今でも、あの手紙のおしまひにあつた歌が刻まれてゐます。私の村の人達は、この神様は、お乳のよく出ない女の人には、お乳が澤山出るやうにして下さると申して、よく參詣致します。

(たらちねとは、重乳根と書いて、お乳で子供を養ふと云ふ意味です。)

(作者住所 山梨縣西八代郡上一色村)



牛沼物語

松尾 芳男

「明るい感じのする南の港をケルリと折重なつて取まいてゐる山々の中の一つに、あまり高くない琴平山と云ふのがあります。此の山の裏には、牛沼と云つて大きな深い沼がありました。人々は此の沼に波が立つと、また牛糞があられてゐらつしやるな。」と話合ひます。

牛沼! どうしてこんな奇妙な名前がついたのでせう。

話は三百年ばかり前の事です。此の港には黒船が来る様になりました。初めて黒船が来た時には、人々はみんな驚いて了ひました。そして中々近寄りませんでした。

「赤ひげは術使ふで近寄るでれえぞ」

「あれは亡霊だとも、だからあんな死着など着てるのだ」

そして恐ろしい物の様に異人を見ると急に内にかき込み、又遊んでた子供達も火のついた様に泣き出して逃げるのでした。異人は困つて了ひました。折角何もしにならうと思ふのに向ふが逃げるもんですから、遂には却つてそれをよい事にして、勝手に店の品を盗み取つたり、ぶちこはしたりし初めました。それでも人々は手出しは出来ないで、

「今日おれの家の桶をこはしたのは、火をすつてたぞ」

「さうかい、内の菓子を持つて行つた奴は長い前物に帯もせず、足に指は一本もなかつたぜ」と話し合ふばかりでした。

異人達は益々闊に乘つて町を歩き廻り、町の人には異人を毛蟲の様に嫌ひました。併し、お奉行所からは相手になるなどのおふれがありますから、どうする事も出来なかつたのです。

こちらには分らないし、こちらの云ふ事も向ふには分らないし、大きな聲で両方とも勝手な事を言くだつてゐましたが、たうとう異人は、長い足——一本も指のない——をあけて若い男の一人を蹴倒しました。蹴られた男は顔から血を一ぱい出しながら、

「かまばれえやつちよへ」

と利鎌を振上げて打ちかゝりました。居合はせた連中もどうしてだまつてゐませう。

「生意氣な」と叫ぶなり、一緒に勝手な獲物をおつとつて、かゝりました。それからが大喧嘩になつたのです。……

命からがら逃げ歸つた異人の方では、すっかり怒つて了ひました。黒船の船長は、お奉行所の所に強い談判にかゝりました。その頃、お奉行は異人から源山お金を借りてゐたもんですから、向ふの云ふ通りにするより外に仕方はありませんでした。

こちらは若者です。散々異人を懲りしめて大奮闘して、

「あの亡霊野郎は弱虫だ、今まであいつ等に負けてゐたのはつまらなかつたな」

「本當だ、家の寶物は大抵あいつらが取つて行つたりぶちこはしたりしたのだ、本當にいゝ氣味だ」

「所ではどうしよう」

「さうだなア」

その女の子が拾つた時計の仕末に困つた村人は、

「こんなものどこかに捨てて了はう」

是をきいた若い男達は、もつとびつくりして了ひました。その異人の野郎は今にきつとこゝまで追ひかけて来るに違ひないと云ふので若者達は、鉾や鋤や鎌などを取出して用意をしてみると、案に違はずよつばつた異人が三四人、分らない言葉でどなりながらやつて来ました。異人の方では自分が落したのを此の女の子が取つたから誤を悟つて取り戻さうと思つたのです。所が、言葉の通じぬ悲しみに、女の子はびつくりして逃げ出したのでこんな大騒動になつて了ひました。もつといけないのは、異人もよつばつてゐたし、村の若い男達も大分赤くなつてゐた事だつたのです。異人の云ふ事はこ

「どこがいゝ？」

「真の沼がいゝだらう」
と真にあつた大きな深い沼に時針を投げ棄てて了ひました。さうしてゐる中にお奉行所からこんな通知が来ました。



「黒船の方では大變怒つて次の事を約束すれば許してやると云つて来た。一つは此の町の中に天主堂を作る事、一つは食用に牛を五十匹送る事、どうもこちらが悪いのだから仕方がない。三日の内に牛を五十匹集めておけ、異人が取りに来る

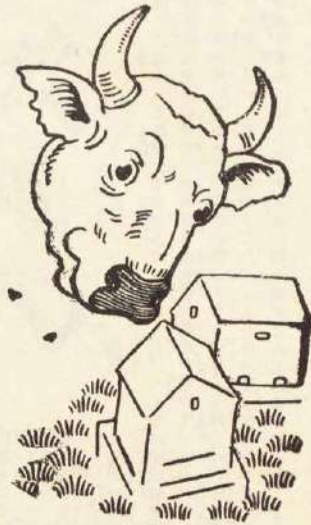
「から」
町の人ばかりつくりして牛を集めました。併し、此の狭い所に牛が五十匹もあるのですか、漸く血眼になつて探し集めたのがたつた三十匹足らず。若者達はすつかりしよけて了ひました。が、足らないと分ると、
「牛なんかやるもんか。生物を殺したら神様の罰が當る。異人が来たら一度殺してやらうぢやないか」
と云ひ初めました。ぢやそれがよいと云ふので、若者は皆集つて又喧嘩の用意に取り掛りました。
やがて三日目が来ました。今日こそはと力んで待つてゐる若者の所へやつて来たのは、赤ひげの異人ではなく、お奉行所からの使ひでした。そして使ひは牛五十匹、奉行所でたしかに受取つたと云ひました。
「え、牛を五十匹！ 奉行所に！ へえー」と若者達は面喰つて、よく話を聞いてみると、
「昨日の暮方、一人のお爺さんが大きな牛を五十匹連れて来た。異人はよるこんでそれをすぐ黒船の方にこんで了つた」とかう言ふのです。
なかしな話だと、若者達は何だか狐につままれた様です。併し、まあ役目はたうと喧嘩しないで済みませう。
一方異人はとんとん天主堂の工事を急ぎました。暫くすると、妙なマツチ箱の様な石の家が方々に立ちました。日暮れになると、天主



堂で鐘がカーンカーンと鳴ります。それが聞くと人達は、
「それ赤ひげが肝取りに出るぞ」と戸をしめたり、牛を小屋にかくしたりしました。それでも何事もなく三年ばかりの月日は過ぎて行きました。

或日の事、港には珍らしく黒船が十隻程入つて来ました。こんなに黒船が多いのです。その日は天主堂に異人が集つて、唄つたりしよべたりしてゐました。所が暫くすると、今まで静だつた天主堂が、急に騒がしくなつて来ました。大きな叫び聲や泣き聲や人の走り騒ぐ聲や……そのうちに異人達がとんとん逃げ出し始めまし

た。みんな狂者の様にかみを振舞したり、ばだしになつたり、血だらけになつたり……その後からまあどうでせう。大きな大きな牛が澤山、角を振立てゝ異人達を追ひかけて行くのです。町の人々は此の横着な赤ひげが困るのは大變愉快だつたけれども、町の方に來はしないかと恐れました。
併し牛は異人だけを追ひかけるので、決して町の方へは追ひつきません。今まで異人の爲に苦しみ切つてた人々は口々に「痛快痛快」と叫びながら後からついて行きました。牛はとんとん追ひつめて、琴平山の頂上までのぼつて行きました。異人はどうする事も出来ないで、今度は裏の方に逃げました。そして大きな沼のふちまで来た時に、牛は三方から押よせて異人はとんとん沼の中に入つて逃げました。併し不思議な事に、沼の中に異人が影をなくして了ふと同時に、澤山の牛も又沼にすつと吸ひ込まれて了ひました。
人々はおどろきながら、是は、神さまが異人を徴しめる爲だとか、異人に食はれた牛の亡霊だとか、色々に話し合ひました。女の子の拾つた金の時計が、此の沼に投げられたので、異人を引取つたのだとも言ひました。
それから異人がおとなしくなつたのです。そして、誰言ふとなく此の沼を牛沼と呼ぶやうになりました。
それから幾年たつたでせう。牛があげられた天主堂もどうなつたか分りません。ただ牛沼ばかりがこんな傳説を、旅に來た人達に語つて聞かせてゐます。(作者住所 長崎市今龍町六〇番)



蜜蜂と牛の戦

西依ひでを

これはつい近頃、愛媛縣玉津村に起つた珍らしいお話です。
七月の末のある日、その朝宇和島市から二頭の牛に、酒樽を積んで、暑い日盛りに、玉津村の濱田といふ酒屋の店先までやつて来ました。
恰度午飯時だったので、二人の牛車は、酒屋へはひり込んで、お辨當を食べてました。その間、牛は店先から四五間離れたところの松の樹につなれてあました。
一頭の牛のすぐ鼻先のところに、箱のやうな小さな家が、三つ四つ並んであました。
「何だらうか？ 人間が住むにしては、あまり小さすぎるし、犬の小屋ともちがふやうだが――」
牛のことですから、何と思つたかは分りませんが、とにかく不思議

議に思つたでせう。ちよいと鼻先で觸つて見ました。すると、裏があまりしつかりしてあなかつたと思えて、その小さな家の恰好をした箱がぐらぐらとゆれました。その拍子に箱が引つくり返つて、地べたに落ちると一緒に、何千萬の蜜蜂がうなり聲を立てて飛び出しました。おどろいて逃げ出さうとしたはずみに、また一つの箱をけとばしました。するとまたその箱から、同じやうに何千萬とも数知れぬ蜜蜂が、一度に飛び出して来て、まるで黒煙の立つやうに見えました。
その黒煙が、見る見る牛の脊中に落ちかかつて来ました。牛は一生懸命になつて逃げ出さうとしましたが、松の樹に固くつながれてゐるために、どうすることも出来ません。蜜蜂は自分達の大切な家を護つた敵に向つて、うなり聲を立てながら、一度におそひかり

ました。
首と云はず、胸と云はず、脚と云はず、牛の身体は、たちまち蜜蜂のために、眞黒にかくされてしまひました。一頭の牛はたうとう手綱をふり切つて逃げ出しましたが、一頭の牛は綱を切ることが出来ないで、死もの狂ひになつて荒れ廻つてあました。そのうちに後から後から脊中に降りかかつて来る蜜蜂の毒が、全身にまはつて、たうとうそこへ倒れてしまひました。
物音を聞きつけた二人の牛車は、おどろいてそこへ飛び出して来ました。が、これには全く手のつけやうがありませんでした。捨てて置けば牛が刺し殺されてしまふし、牛を助けやうとすれば、自分たちの命があらまけん。度を失つて牛のまはりなぐるゝ



かけまはつてあますと、これも仇の片われとても思つたのでせう。数千匹の蜜蜂が、今度は牛車の方に向つて襲ひかかつて来ました。二人の牛車はきまをなつて夢中で近所の池へ飛び込んで、やつと命拾ひをしました。
倒れた牛は、二度と起き上ることは出来ませんでした。毒のために身体中まる／＼とばれ上つたまま、横つてあました。
だが、蜜蜂は戦に勝つたのでうか。いいえ、蜜蜂といふものは、一度何かを刺すと、針が折れてそのまま死んでしまふのです。牛を刺した蜜蜂もみんな勇ましい討死をげあたり一面まるで黒豆がまき散らしたやうに、その死がいで地面を覆ひ隠すほどであつたのです。（作者住所 牛込區藥王寺町七三鹽川方）



方 綴

選郎次佐藤齋

僕の内の牛の子(賞)

香川縣木田郡米上校尋六

井手本秀士

僕が學校から歸つて見ると内の人達は皆集まつて、牛屋をのぞいてゐる。僕も何だらうと思つて走つていつて見ると、牛はいつもと大層ちがつて、眼には涙をたへて「ウーン」とさも苦し氣な息づかひをしながら倒れてゐる。母の言葉によると、今日は朝から煮

物を食はずに倒れてゐるのだと。その日の夕方行つて見るとまだねてゐる。その晩家中が皆心配して起きてゐると、外から戸を叩く者がある。お母さんはすぐ戸を開いて、何かぐと／＼話してゐた。聲を聞いて戸を叩いたのは、うちのひやおちいさんだといふことがわかつた。其の祖父の聲に家の人達は「ギャ／＼」と皆外へ出て行く。一人眠つてゐた弟は、着物を體にひつかけた儘、帶もせずに走り來て、弟おちいさんんな（亂名）お前のすきな牛の子が出來たんだ」といつた。うちの人達はらんぶやかんてらに火をつけて牛屋へ急いで行く。僕もついて行つて見ると牛はまだ「ウーン／＼」とどなつてゐる。僕はどれと母の手から「かんてら」をかつて、牛屋の中へ突き

出すと、かあい／＼やはらかに牛の子が出來てゐる。親牛は子に何か云つたのか、子はすわつてゐたのがすぐ、ひよろ／＼足で立つた。親牛はしきりに子牛の體一面を「シャキリ／＼」となめてゐる。親牛の尻にはまだ穢ない物がついてゐた。

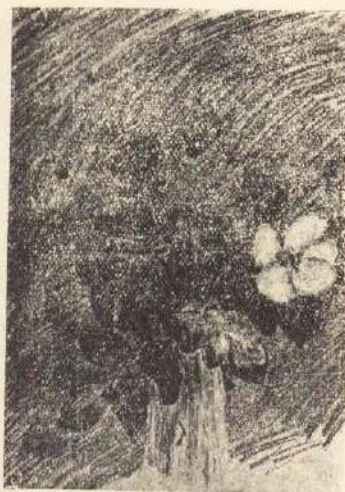
母をむかひに(賞)

美城縣多賀郡日立町清川

小野崎一郎 (十五歳)

三つになる弟とお母さんがゐなければほんとに淋しい。秋山のお祭へ行つてから今日で三日とまつてゐます。今日の十一時頃歸るといつたから、朝から停車場へむかひに行きました。あひにく雨が降りさうでした。

稻を自分でしよひ、溝にものせて引つぱつてくる人もあります。「早くきればいゝなあ」といふと妹も「さんたら今でもいゝ」といふさ／＼と雨が降つてきました。「今日きつかな。雨が降つてきつと、きないねえ。」百姓でいそがしいから、きつとくるよ。こんな雨ぢやぬれないよ。六つになる妹はもう目に涙をうかべてゐます。



香川縣高田郡藤六(賞)リヤダ

停車場には大きな犬があるのでおつかなくて引きかへして、大平の叔母さんの家へ行つて遊んでゐました。いつか雨はやんで、柿が赤く光つてゐます。柿もぎつては裏にでて見、柿もぎつては裏にでて見たが、お母さんはかへりません。御飯よばれてがつかりして家へ歸りました。

物ほし竹にきれいな着物が秋風にヒラ／＼となびいてゐます。もしやと思つてかけだしました後から妹が泣く聲にびつくりしました。おちちやん／＼「おポッポ」さて

はお母さんだ、と思つた時のうれしさ。妹おぶつて家の中へとびこみました。「あんにやん、ねんやん」と元氣よく弟がいふのです。「修よ、いつきた。」といつて、おれも妹もよろこびました。非常に、修もよろこんで「おポッポ／＼」とをどつてゐます。お土産もらつて誰もニコ／＼しました。

いも焼き(賞)

和歌山縣伊都郡妙寺校尋六年

齋藤邦一

去年の今頃の事である。大前君



おとなしり(賞)川香縣三水高子重秀

が慈尊院(村の名)へ行つてさつまいもをもらつて来た。僕等は早速、それをやきに行く場所を見つけない行つた。いろ／＼さがして見たが、みんなの氣のむくのはない。大前君は「もう歸らう」と言ひはじめたが、みれんは残るのですゝめて又さがし出した。そして汽車道のシミナルのそばに元氣よく煙を上げてゐる。板敷のくすべを見つけた。

もをくすべへ入れて来た。もう二十分間程たつたから、一返見に行かう。と言つた。みんな見に出た。美しい月は姿を小川にうつしてゐる。川上の柳の木の間から、赤いともし火がちら／＼とかゞやいてゐた。火の中のいもを出して見ると、まだやけてゐない。僕等三人は又森田君とこへ歸つて来た。そして「まあ二十分たつたら行かう」

一四八
と言つて時計を見てゐたが、中々動かぬ。森田君の母さんは、そばで着物をぬつてゐた。其の中に時間が来たので走つて行つた。行つて見ると、うまくはこ／＼に焼けてゐた。三人が畔の草で灰をはらつて食べながら家へ歸つた。此間の日曜に、大前君が慈尊院へ行つていもをもらつて来た、今日も去年の様に焼きに行かうと思つてゐる。考へて見るとちやうど今夜も月夜だ。

常盤旅行

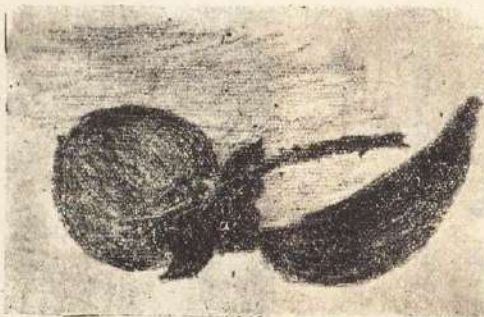
横濱市本牧町和田山下

渡邊 敏

(十二歳)

汽車はちやうど日がてりはじめた頃上野を出た。だんだん土浦の方へちかづくにしたがつて、静か

な田舎が見えてくる。間もなく土浦に着いた。すぐ目の前に廣々とした霧ヶ浦が見えた。小蒸汽船も處々に浮いて居た。汽車は間もな



柿

京都府田村
關本寺岡村

赤松 武登

く土浦を發車し、霧ヶ浦を後にして水戸方面に向つた。窓から顔を出して見て居ると、松林が見えたかと思ふと、畠かと思ふと松林といつたやうに、山をこえ畠をこえ野をこえて、程なく水戸に着いた。父さんと僕は、此所で下車し市街乗合自動車で第一公園へ行つた。先づ第一公園へ行つてかんじた事は、梅の木がたくさんうはつてゐる事、それから好文亭の立派な事である。それから此所は高地であるから大へん見はらしがよい次に第一公園を出て又乗合自動車第二公園へ行つた。此所にもやはりたくさんの梅の木がある。やゝ日が西にかたむいた頃、又汽車に乗つてビリビリといふ音と共に水戸を出た。だんだん汽車は太平洋海岸に向つて進んだ。海

岸に來ると、太平洋の荒波が小石をざあ／＼ざあ／＼と音がしてゐる。遠く向うには水平線が見えて居る。これから汽車は海岸を走つて走つて行く。砂濱の上には、いゝろんなかつかうの松がたくさんはえて居る。汽車は關本に着いた。其所で僕たちは下車した。しり合の阿部さんが迎ひに出て居た。それから車で、平潟町へ行つた。そして宿屋に行つたら三階にとはされた。其處は高いからずゐぶん見はらしよく、小さな平潟灣が一目に見える。あくる朝早くおきて父さんと八幡様へおまゐりをして來た。それから又阿部さんと其の町や海岸を見物した。

其の日の午後二時半頃、上野行の汽車は僕たちを乗せて關本を發車した。

嵐の晩

千葉縣長生郡東郷校高二

中村政恵

午後から風はつよくなつた。夜になつてもまだやまない。父や母から何度も「もうおそいから休め」と言はれた。けれど私は何だかおそろしくて休む氣になれなかつた。風がゴッソッといふいて、雨が戸にサ、サッといふと吹きかけて居る。音は何とも言へない物凄さであつた。地震の時に壁のおつた時よりも凄かつた。雨や風が戸にぶつかる度に、胸をどきまさせた。私のおどろく顔を見るにつけ、父は笑つて「何とんありやしなエ。こんくれやんもの」と言つて居た。けれども其の裏



激戦 廣島縣立高六

學校のまどから

朝鮮忠清北海清州公立校尋二

栗原海男

日の光りがあまりなく、しづかな日だつた。ぼくは、學校のまどからそとを見た。空はくもがあつて、すこし青い空がみえるだけだ。

てゐるおもしろさうに子供が三人あそんでゐる。學校の道のよこにはす池がある。りやうがは田んぼばかりだ。関さんの田には、かがしがある。ばうしはむぎわらばうしです。ゆらゆらと、水がゆれる。それはちやうど、おじぎをしてゐるやうだ。山が二つ三つづいてそびえてゐる。すずめのなきこゑもしない、しづかな日だ。

には何とも言へないおそろしさがひそんで居るやうであつた。中の間の時計と目ざまし時計が一時になりはじめた。中の間の時計は九時を報じたのであつた。もう九時だよあしたおきられないといけなからみんなでやすんだ」と母が言つた。父も同意してうなづいたが、私はどうしてもねる氣は出なかつた。やがて父や母は床についた。

自分もいや／＼ながら床についた。けれどおち／＼ねむることが出来なかつた。外ではまだ雨や風の音が物凄くきこえて居た。

泥ぬり

千葉縣印旛郡久住村大室校尋一

長谷川重雄

夏休には必ず大勢そろつて芝の川に泳ぎに行つた。泳いでゐて少し寒くなつた時、私は土手を越え

の中の水はぬるま湯のごとく温い。恰度風呂にはひつたやうである。私は腹を上にしたまゝ兩手を使つて、泥をぬり始めた。腹から腹へぬり眞黒になつて、ドボンと水中に身を入れた。すると皆まねをして幾回となくやつた。その内に地主が來て大目玉をくひ、どなりつけられた事は、今でも覚えてゐる。

石をけつた事

千葉縣印旛郡久住村大室校尋五

朝比奈丑松

お使に行つた歸りに、忠魂碑の所で丸い石を見つけた。何の氣なしに下駄の齒でコッソリとけつたらころ／＼と轉げて道の真中に止つた。これは面白い。家までけつていつて見ようと、追つかけてしつ



て、泥田の中へはひこんだ。その田はどういふわけか、一二坪ばかり稻が植ゑてない。私はそこへ行つて仰向に寝た。太陽はさんらんとして照り輝いて、田

てカーンとけとばした。二度目か三度目か、恰度曲りかどから郵便配達にかけて来たものだから、僕はあたるといけないと思つてハラ／＼とした。配達はちよいと石を見て笑つて行つた。僕はなんだか氣まりがわるいやうな氣がした。だん／＼けつて家にいつた。家にはお婆さんが縁で着物を縫つてゐたが、眼鏡越しに見てニコ／＼笑ひながら、お、早いねといつたのでうつかり止つたものだから、石はどこへいつたやらわからなくなつてしまつた。

お墓詣り

奈良縣宇陀郡神戸校尋六

山岡セイ

墓の入口に來た時、一番先目についたのは、あの母様のお墓だつ

た。まだあたらしく、一番上の一番好きな兄さんとならんで暗い土の下でねむつてゐられる。なんだかなしくなつてわつとないてしまつた。わたしの一番好きな姉さんの新しい、せきひも、目にうつつたのものの。かあさんの苦しうな顔、姉さんの笑顔、目にうかんでくる。

ねえさんはあの様に早く死ぬとは思つてゐられなかつただらう。かあさんも死ぬのがいやだといつて、いつもないてゐらつしやつた。かう思ふと、又新しい涙がとめどなく流れ出た。花さしに一番好きなばらと夏水仙をさした。母さまはばらが好きだつた。姉さんもばらが好きだつた。ねえちゃん、かあさんも、墓の下でよろこんでゐて下さるだらうと思ふと、何だか

一五二
うれしい氣がした。

田んぼの秋

千葉縣香取郡佐原町西關戸佐原校

石井 皎

(十二歳)

あそびながら田んぼを歩いて居た。田はこの田でも黄色である細道なんかは稻がたれてゐて、足のふみばもない様です。道を歩いてゐると、びよん／＼いなごが田の中へとび込む。一昨日の雨でえん間の水が一つばいである。早い稻はかり取つて、おだにかけてゐるのも其所此所に見える。すぐ向ふの田では、農夫が拍子よく歌を歌ひながら稻をかつてゐる。遠い所からかつた稻を、船にのせて來て、おだのある所に來ると、僕ぐらゐの女の子が、舟から上げると

お父さんらしい人が、おだにかけてゐる。びんを持つてゐるのはいなどでも取つてゐるのだらう。今日はよい天氣である。

菜洗ひ

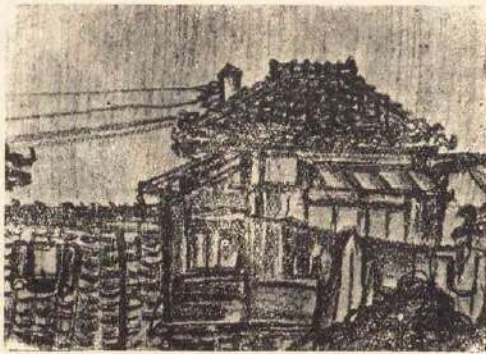
若狭國高濱校尋六

荒木ハナ

學校から歸つて來ると、お母さんが「はな子うらにある菜をねえちやんとくばた川まで行つて洗うてきて」といはれた。わたしはねえさんと弟と三人でくばた川へ行つた。洗ひ場へつくと、六さんと言ふ家のをばさんが、やくしなを洗つてをられた。私らのほを見ると、「今どきまずで」といつて、すこし場をちとめられた。「へえ、おおきに」とへんじをする。ねえさんはもつて來たしやうけのなを石の上へうちやかへして、川の中へ入られた。どんなつめたさか、おゝつめたといつて土のついたなを、ばさ／＼と洗はれる。私

も菜をさかちかであけて、川の中へ入つた。水は六七寸の深さで思つたよりもつめたくなかつた。かきばばかりで洗ひにくい。ばさ／＼ときれいな水で洗つたり、土のついたちくをしごいたりする。弟は「ねえちゃん、もういのか。雨が降りさうな」といつて何べんも何べんもせかす。だん／＼洗へていつて、かごに菜が一ばいになつた。そんなねえちゃん、とみぞうとかへてなをあげてきてもう一べんとりにくると、「いつて、弟とかへつて來た。」

ほそいたんば道のあるいてゐると、どこかにこほろぎのなくこえがする。すゑめがくはの木の下でちゆん／＼とないてゐる。學校をたててゐられる大工さんのつちの音もやかましく聞えてくる。



「雨降る日」 大阪府 玉手町 長崎 四子夫



通信

自由畫選評

山本 鼎

△高國藤米六君のガリヤの寫生、力作ですね、かういふしつかりした、つまりよく見て、其強い感じをとりへてゆく描き方は繪を深くします。此繪の失敗な時は構圖がよくない事です。もつと上へ上げて、花びんを全部出した方がいゝです。それからバツグの色が花に比して強すぎる事、斜にすじを作つた描き方がうるさい感じを與へる事です。

幼年詩選評

若山 牧水

△學校組に秀れた新手が加はつた。福岡縣八女郡の下妻小學校と山形縣南村山郡樺澤小學校の二校である。自由は伸び／＼と育てゐるところも似てゐる。これからが楽しみだ。△今號岡田君の「火事」や川口君の「たいの普」など、また先號磯村君の「せみ」など、實に佳い。大人の私など、心から頭をさげる。斯ういふのがだん／＼多くなると自然に私の謂ふ「子供の歌の難有さが解つて来るとおもふ」川紙のあまりに小ささいのは取扱ひに誤にも不便です。せい／＼牛紙を半分につつたもの位

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

○今月はいふ作が多かつた。殊に入賞の三篇は、どれも似たやうにいふ作なので、どの作を第一に擧げようかといふことに就ては、困つた。結局、井手本秀士君の「僕の内の牛の子」といふのだけでも一等に擧げるだけの値打ちがあると思つた。牛小屋で親牛がお産をした有様を書いたところはスチキな出来だ。○小野崎一郎君の「母のむかひに」もいふ作である。こまやかな情緒がよくあらはされてゐる。停車場へ母を迎ひに行つて途に會へないので、止なく叔母さんの家へ行き、そこでもお母さんがもう歸りはしないかと思ひ乍ら外に出て見たら、いづか雨ばやんで、柿が赤く光つてゐます。柿もぎつては裏に出て見、柿もぎつては裏に出て見たが、お母さんは歸りませぬのあたり、少しも飾らずして眞に迫つたところがある。いふ作だ。○齋藤邦一君の「いも焼き」、それもなか／＼面白いところがある。○渡邊飯君の「常盤旅行さび／＼とした氣持のいふ書だ。面白い。○栗林海男君の「學校のまどから」純ないゝ

氣持の作だ。どうか、つまでもかういふ書き方で進んで下さい。

『牛に關係ある郷土童話』の選に就て

記者

募集の結果はすばらしい成績で、應募總數二百三十七篇といふ多數でした。選者の諸先生が嚴選に嚴選の結果、一、二、三等の各一篇が選外に佳作として二篇が選れました。この五篇は本月號に全部掲載いたしました。選者の各先生の選後感を一々掲載する筈でしたが、誌面の都合上、神野先生に選者を代表して選評を書いて頂きました。入選外の佳作を次に記します。

- 牛のお姫さま
牛に救はれた兄弟
甚兵衛さんの牛
牛の食はれぬ豌豆
黄金造りの牛
財布を飲んだ牛
牛の乳
牛鬼物語
牛になつた庄屋
佛さまの國
牛石の由來
郷土の童話

- 大島 重三
竹内 剛
大塚 宏一
石井 貯尺
高畑 襄
比谷 眞
岡崎 文二
伊藤 三千夫
仙波 しげる
森 ぼたる
藤原 寛
湯山 易水

- 首の無い牛
各務ヶ原の牛と馬
牛の御前
石になつた娘と牛
赤牛と佐吉
甚太と牛
牛も知らなかつた
津輕の牛
お山の仔牛
天狗牛由來
牛の忠義
さうし池の語
銀太郎の牛
逃げた牛
怪牛の話
三匹の牝牛
うなりがくぼ
失題
牛の童話
牛と大根
牛になつた姫
幽霊牛の丘
乳を取る牛
鶏を殺した牛さん
牛のおかげで

- 哉州 井徳夫
小澤 敏夫
河野 夢我
今野 銀星
篠原 五郎
伊藤 要五郎
大塚 文夫
山本 かずを
鈴木 如楓
矢車 富美夫
工藤 眞藏
軍司 龍水
栗田 美昭
栗田 一昭
野田 名次
失島 松雄
松山 雄
大山 安雄
大川 併介
生川 一三
黒田 昌樹
谷 昌樹
中井 樹村
長塚 まさな
高井 昌樹
高井 昌樹
橋本 長四郎
藤森 正契

編輯室より

○今「新年號」の編輯を終へたところです。御覽の通り、記者一同奮闘努力いたしました。たゞ一つ残念なのは菊地寛先生の作が、締切りまでに間に合はなかつた事です。しかし二月號には先生の名作を掲げる事が出来ます。○新年號は實に「金の星」の面目一新を斷行しました。二月號からいふ／＼大努力をして、この上にも立派な雑誌といたします。○一般募集の童話の方は、新年號に牛の郷土童話を掲載した爲めこの方は一回だけお休みにしました。次號と一しよに選をする事になりました。

本月初童話推薦
かぐや姫 小西 行夫

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがあります。御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三月月分以上の直接購読者に對しては、誌友のお取扱ひをする事となりました。



讀者だより

大正十四年を迎へると共に、奮闘しなせう。十一月號を手にして一番なつかしかつたのは岡本先生の『鳥渡る頃』の繪です。涙多い少年にとつて、青い秋晴れの空を飛ぶ渡り鳥の姿はどんなに悲しく見えてやう。暖い暖い南の國を墓ふのです。わが憧憬の師野口雨情先生の作はいつも田園の香りが高い、そして印象深いものばかりです。若松忠夫君、宗寂照君、中村ひさし君、下を下さい。その他の諸兄姉も何卒淋しい子にお便り下さい。神奈川縣 岡中純義

時、私はつくづく、藝術と云ふものの有難さを感じます『金の星』に載せていただいた幾つかの童話は永久に私のなつかしい少年時代の思ひ出を語ってくれるでせう。大正十四年も一生懸命に勉強して投書しようと思ひます。投書家諸兄姉様の御奮闘をお祈り致します。(愛媛縣 仙波しげる)

三島雅川先生のお作『猿廻興次郎』を読みまして、遠いふるさとの昔がしみじみとなつかしくなりました。七ツ八ツの頃までだと思ひます。あゝして猿廻がよく来たものです。けれども十年後の今、今は大阪に居ます。は、そんなものは見たくとも見られません。(大阪 阪野潤)

記者様、皆さん、おたつしやです。白い、ちぎれ雪が、びゅう／＼鳴る風に飛ばされて暖い南の國もどうやら冬らしい色に彩られて来ました。白だすき二世さんに、僕に心から貴方にお問荷申し上げました。僕は或る學校に生徒として、通つてある貧しい一個の男です。友達には多く酒を飲んだり、街道をデツカンショを歌つて豪傑振ります。或は僕を嘲つてゐるかも知れませ

ん。併し僕は、信じて居ります。僕はそれ等の人々よりか、もつと純真な氣持にかへる機會を多く持ち得るものだ、信じてゐます。終りに皆さんの御自愛なされん事を祈ります(高知 羽田敬和)

▼私はこれまで『童話』だの『赤い鳥』だのを取つて讀んで居りますが、童話の名人、野口雨情先生や、畫のうまい寺内先生、岡本先生等のおよりになつた『金の星』を本屋で見えて驚いてしまひました。本屋より『金の星』を買つたり、諸友に入れますか。(愛知縣中島郡今伊勢村 太田貞夫)

▼法本様、御返事を差し上げることに出来なかつたことをどうぞおゆるし下さいませ。でも私は今のところあつたことには沈もくして居なければなりません。貴方の益々おふるひ下さいませ。やうお祈りします。仙波様、十月號の御作は大好きです。私の家の周圍にも昔はごまの畑もあつたんですけれど、今はそのかげさへにとどめさせました。さうして比叡山さへも今に見えなくなつてしまひました。寒くなりませう。寒くなりませう。

す。御身體御大切に、殊に法本様は御病身と承ります。御養生第一に、では皆さんさうなら(東京都の片隅より 三須英三)

▼諸先生其の後お便りはありませんか。お伺申します。北陸に各がやがて参ります。又あの冷たい白い雲を見る時が近づきました。悲しい様な、楽しい様な、云ふに云はれぬ實に情のこもつた時でせう。先日御丁寧にも、青い眼の人物の御通知下さる有難く御禮申上ます。早速申込んだいでしたが、都合が悪く買ふ事が出来なかつたのです。野口先生のご署名！ 見れば見る程、嗚呼返す返すも残念です。而し其の代り新年號からは、きつと諸友になり、もつと／＼金の星に近づき今迄に味れ得なかつた、眞の童話童話を味ひたいのです。終りに童話童話作家達、奮ひませうお互に日本の童話童話世界の爲に(教員 藤野ふく)

▼だん／＼火鉢がほしくなりませう。みなさまお變りばかりありませんか。私は来る正月から『さくら草』といふ童話の本を出さうと思つてをります。みなさまどうか原稿をおめぐみ下さい。私はまつて

をります(神戸市 高橋久藏)

▼だんだんさむくなつて来ました。先生や記者さまにはおかけりございませうか。今日金の星をみましてとび上つてよろこびました。十五少年漂流物語が中途で止めたのは大變かなしゅうございませう。本になつて出たらかつたのだくつもりでせう。又正月號はどんな出来ばえでせう。アラビヤナイトすごくもどんなにいいでせう。早くよみたく思ひます。おはりでももう決死の使者は金の星にも本にも出ないのですか。(和歌山 久保定夫)

△決死の使者は作者西條先生があと一回と云ふところでフランスへ行つて仕舞はれたので、残念ながら、たうとうあまになつてしまひました。近くフランスから續稿を送つていて、本にして發行いたします。記者

尙左の雑誌の御寄贈に與りました。誌上で厚く御禮申し上げます。

柿の實 大阪市北區角田町九七

旭 第二正堂

水戸市市南三の九三

茨城縣教育會

シャボン玉 仙臺市米ヶ袋上丁

笹舟

千葉縣山武郡東金校 笹舟會

空知教育 北海道空知郡岩見澤町(空知教育圖書部)

▼悲しいことを發見しました。清い本誌童話壇に許しがたきかゝる悪い人たちが。かゝる行爲を敢てした弱い人たちが。すぐはれる道は只自覚です。反省です。さうしてあなたが地方同人誌で『投書券』は讀者を無視した行爲だ』と喧鳴つた人であるのをききました。だがあなた様の様な行爲が投書券と言ふケチなものを作る様に導くのではないでせうか。自覚して下さい。ぼくも弱者です。貴君はぼく以上に強い人です。どうか反省して下さい。さうして現實にも理想にも強い人になつて下さい。ぼくは只これを祈るのです。(福井縣 法本芳泉)

▼齋藤佐次郎先生、晩秋の野分に滅びる閑寂の千草もいたく黄ばんで了ひました。ササ／＼と落葉のしめつぱい音が憂愁の彩をなしてゆきます。先生には相變らず健康底の事を祝します。未知の者ながら親しくお呼びする事もおゆる

下さり。同封のこの美しい童話を投稿の一篇としてお目通し下さるならば幸甚の至りで。お手数ながら無智の私をお譲り下さい。(最田友次郎)

▼ホッローレム應募したので、偶然佳作に入つてゐました。トテモ／＼嬉しくなつて、お便りを書きました。私が小學校五年の時、金の船が生れました。それからズツと私に、名もない愛讀者でした。金の船が天上して金の星に變つた時、私は中學生になつてゐました。金の星とは永久に離れ得ぬ事と思つて居ます。昨今誌上に振はる神戸の淀川君、今一度歸り咲きて下さい。其他の諸兄姉何卒我金の星、爲にお振ひあらん事を(東京市外大久保 前田亞木雄)

▼記者先生、この春、作年の十二月頃から工事に取かゝつた二十坪の運動場が落成しました。その運動場で第一回の運動大會が今年の十月十五日に執行しました。又奉安殿も奉出来ました。中々立派です。いつか折が有つたら奉安殿を寫生してお送します。(雪降る信州の片田舎より。(飯島光男)

▼何といふ美しい本なのでせう。

誌上のすべてに子供の純な心持があふれてゐます。毎月毎月よくなつて行くのが目に見えやうです。私たちは先生方に感謝してをります。童話童話にするやうにお祈り下さいませ。いのつてをります。北海道 喜代子

▼記者先生『金の星』十一月にホッローレム入選發表佳作の内私は最の巻とありますが兎退治の間違ひではありませんか。此次の童話の時にはもつと／＼面白いのを投書しやうと今から色々考へて居ます。次に私は大阪の星の會の同人ですが時々童話劇の寫眞をとりますから御送り致しませうか。右二つを誌上に御知らせ下さい。(大阪 あきら)

▼おつしやる通り印刷の間違ひで下さい。どうぞお寫眞を澤山お送り下さい。(記者)

▼段々寒くなつて参りました。こちらでは毎日の様に綺麗な朝鮮晴れが続きます。皆様の御健康を祝します。昨日毎月より四日も早く金の星が着きました。御奮闘を祈る。(朝鮮 宋戸功夫)

第八輯 小松耕輔作曲・達崎 龍作謠 べんぺん鳥 (目曲) べん／＼鳥、螢のお使、仔牛、赤い小馬車、紅殻蜻蛉、さみだれ	第七輯 お人形さんの夢 (目曲) お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雛子、藪の小道、夢を見る人形、草薙び	第六輯 子守唄 (目曲) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、蕨坊主、藪の下道	第五輯 夢と唄 (目曲) 夢とり、おしやれ棒、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	第四輯 赤い靴 (目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り蟲の子	第三輯 青い空 (目曲) 青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼鳥、雀の酒盛り、呼子鳥	第二輯 一つお星さん (目曲) 一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	第一輯 人買船 (目曲) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
---	--	---	--	---	--	--	---

振電
替話
東京
五石
五川
五三
九八
六番

金の星社

東田
京端
市三
外一
八六

振電
替話
東京
五石
五川
五三
九八
六番

金の星社

東田
京端
市三
外一
八六

振電
替話
東京
五石
五川
五三
九八
六番

金の星社

東田
京端
市三
外一
八六

振電
替話
東京
五石
五川
五三
九八
六番

東田
京端
市三
外一
八六

振電
替話
東京
五石
五川
五三
九八
六番

東田
京端
市三
外一
八六

自由畫山本鼎先生選
 幼年詩若山牧水先生選
 綴方編輯部選
 〔注意〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや
 諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりに
 してかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學
 校や學年(または住所と年齢)とともにおとなしやうにして下さい。
 用紙は自由畫はなるべく兼用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙
 (または牛紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の
 賞品を差し上げます。大號の切は十二月廿八日(その以後は次號へ)過
 發表は二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

童謡野口雨情先生選
 童話齋藤佐次郎先生選
 〔注意〕 童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は推薦
 または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、
 童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞
 金として呈します。但し、少年少女の創作童話にして入選の場合に「金
 の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。
 原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿をお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢
 三ヶ月分三冊 送料共壹圓二拾錢
 半年分六冊 送料共貳圓四十錢
 一年分十二冊 送料共四圓八十錢
 但し新年號は特別號で五十錢ですが、
 らい、御注文の節はこの分だけ必ず加へ
 てお拂込み下さい。

振替口座東京五九五九六番

(送) 〇御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 〇送金は振替が一番便利で御座います
 〇切手代用は(壹錢切手)一割増です
 〇何巻第何號よりと書いてください
 〇住所姓名はばつきり書いてください

注意 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年三月九日印刷納行(毎月一週)
 大正十四年一月一日發行

編輯兼發行人 齊藤佐次郎
 東京市外田端 二百三十一番地
 東京市小石川久堅町八番地

印刷人 上村新輔
 東京市小 川久堅町八番地

印刷所 合設 博文館印刷所
 東京市外田端三百五十一番地

發行所 金の星社
 東京市外田端三百五十一番地
 振替口座東京五九五九六番
 電話小石川五三三八七番

ンオイラ 磨齒煉

おめでたう！
ライオンねりはみがきで歯
をみがいてから、お雑煮を
食べたら、
ああ、うまいなア！
うまいなア！
僕、四杯も五杯も食べちや
つた。



歯を美しくする
歯を強くする

ライオン歯磨